

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置 (第3図)

北上平野の北端に位置する盛岡市は、西の奥羽山系からの雫石川、東の北上山系からの中津川が、南流する北上川に注ぐ三河川の合流点に開けた都市である。

本遺跡は盛岡市の中心街の西南、雫石川の南約2kmに位置し、国土地理院発行の5万分の1地形図盛岡14号によれば、西図幅縁より18cm、南図幅縁より4cmの地点にある。

遺跡は盛岡市下太田字新堰端、字方八丁、字宮田、中太田字方八丁、字法丁、字小沼、字吉原、上鹿妻五兵衛新田、字本宮林崎、大宮におよぶ広範な地域である。

今次調査では遺跡の西端を南北に走る市道官台線にほぼ沿う「東北縦貫自動車道」用地内が対象で、中太田字方八丁62地割4番地他、中太田字法丁72地割5番地他、中太田字吉原45番地3他の地域であり、現状は水田で畑地と宅地は極めて少ない。

2 地形と周辺の遺跡 (第4図)

(1) 地形

雫石川の以南、北上川以西の盛岡市・都南村・紫波町・石鳥谷町の一部までの地形概観は、大別して山地・丘陵地・段丘(台地)・河岸低地などからなる。

西方には東根山(950m)を最高峰とする標高500m以上の、第三系よりなる山地があり、断層崖線と思われるその東縁には大小の扇状地群が発達している。また山地東縁のさらに外方には安山岩の露出がみられ、稲荷山・飯岡山・湯沢森・城内山・北谷地山・日詰の城山など残丘状に存在する。

段丘(台地)はいずれも扇状地や旧河床が段丘化したもので、中川久夫氏によれば、盛岡～花巻間の段丘群は大別して四面からなり、古期から順に①石鳥谷段丘 ②二枚橋段丘 ③花巻段丘 ④都南(飯岡野)段丘である。

高位の石鳥谷段丘は南方の土館・片寄など西部山地東縁の山麓に顕著で、日詰から石鳥谷付近にかけて花巻面上に残丘状に残片的に分布する。中位の二枚橋段丘は日詰以南で発達する。

低位段丘は細分され、花巻段丘は西部後背山地東麓から東方に広範に発達し、既述の高・中段丘よりは新鮮な面をもち傾斜も急で、複合扇状地状の等高線配置をなす。

都南段丘は花巻段丘の外方またはこれを刻む河谷に沿ってみられる。日詰以北においては一般に河岸面との比高が小さく、その境界が不明瞭になる部分が多い。盛岡市太田周辺・都南村百目木付近では比較的顕著である。

河岸低地は北端部の雫石川に沿って西方に折れ曲がる他は南北にのびる北上川に沿って巾1～3kmの谷底低地が形成され、そこには旧河道・自然堤防などが多くみられる。

本遺跡は既述の都南段丘の平坦面にあるが、その地域には雫石川の影響によって形成された





第4図 地形区分ならびに「遺跡」立地図

旧河道がいく条もみられ、河道の変遷の著しかったことを示している。

すなわち、奥羽山系に源を発し東流する零石川は、多くの急支川をあわせ零石水系を形成、零石盆地からの大欠山北麓の北浦付近の狭窄部は上流からの土砂の沈下堆積を生じ、それ以後に開ける平坦な地形とあわせ河道変遷の原因を生じている。北ノ浦付近狭窄部は本遺跡の約6 km西にある。

河道変遷は狭窄部以東右岸において著しく、本遺跡ののる段丘の南側と北側に谷底・河岸低地が形成され、特に本遺跡は北側河岸低地に面し、屈折しながら東西に走る段丘崖をみ、比高は約1 mを計る。この河岸低地の旧河道はその右岸に自然堤防が発達し南から現河道へ向って低くなる。また入り組んだ網状の旧河道がいく条もみられ、遺跡北側にも孤状の旧河道が入りこんでいる。

以上のように、本遺跡の立地する都南段丘は零石川の営力をうけた沖積段丘であって、後述する地質も水成層が基本をなす。

(2) 周辺遺跡とその占地

昭和53年現在、当文化課で把握している遺跡その他を重複させて地形区分図上に示した。

縄文時代の遺跡は河岸低地、谷底平野では極めて稀で、花巻段丘とそれより高位の段丘、後背山地山麓緩斜面上、残丘、山地などに大半占地するらしい。

弥生時代については、例が少なく不明点が多いが、縄文時代と重複することが多く、花巻段丘上の大渡野遺跡、二枚橋段丘の上平沢新田遺跡等をみるが類例の増加がのぞまれる。

古代の奈良・平安時代の遺跡は、ほとんど全域にわたって分布する。いずれの時代にも言い得る特徴であるが、古代遺跡の場合も段丘崖や段丘面上に刻まれる河谷、沢にのぞみそれより上位の地点、すなわち、地形のかわりめに占地する。

本遺跡と性格を同じくする矢巾町徳丹城跡をはじめ、都南村百目木遺跡、末期古墳群の太田蝦夷森古墳群、矢巾町秋森古墳群など都南段丘面や自然堤防にのる遺跡であり、周辺に占地する古代遺跡も数多く、城柵・官衙遺跡とされる本遺跡や徳丹城跡と集落址・古墳群との関連的視野での追求も課題となろう。なお、紫波町杉ノ上窟跡は二枚橋段丘東縁に占地する平安時代初期とみられるものである。

中世・近世の城館は後背山地の斜面、高位段丘上の頂部の平坦な丘陵の一部や残丘状の高位段丘、山地に占地する。その他については対象が限定された調査上の問題もあり明らかな分布状況はでない。

3 地質 (第5・6図)

零石川の影響による沖積段丘上にある本遺跡は、水成層が基本をなし基底の砂礫層とその上に水成シルトがあり、上を表土が覆う3層からなるのが基本となる。

第5図の柱状図は今次調査での深掘りによる観察(C~F・K・L地点)と道路公団によるボーリング結果(A・B・G~J地点)にもとづくものである。表土を欠く地点は観察時に遺構検出のため既に除かれていたためである。

I層 表土 耕作土からシルト漸移層までで、耕作土と黒色火山灰土からなる。色調は黒色、黒褐色等を呈し、地点によって層厚は異なり40cm~100cm内外を計る(柱状図には示されないが、築地、南(外)大溝地点等での知見を含めて)、うち水田耕作土は25cm~30cmほどの厚さで底土に水酸化鉄を含む固い層がある。

II層 シルト 水成シルトの層で、粒子の細い粘質のシルト、砂質シルトなどが含まれ、色調は黒褐色、暗褐色、褐色、にぶい黄褐色、にぶい黄橙等を呈し、層厚、層相は地点によって異なり、黒褐色粘質土の介在(C・F地点、南(外)大溝でも知見)や、基底砂礫層上の砂層を認める地点(C~F地点)もある。

III層 砂礫 基底となる砂礫層である。

基底砂礫層面に高低があり一定しない、そのことによってII層の層厚と層相が地点によって異なっており、近接しながら大きな相異を示すこともある。またII層が極度に薄く(K地点)上面まで礫が露出する地点も少なくない。

第6図に示すように北段丘崖(K地点)~河岸低地へと砂礫層が下がり、河岸低地ではI層下にII層は介在せず直接基底砂礫層となる(L地点)。

遺構検出面は、耕作土底土直下の築地寄柱の例もあるが、黒褐色土面では検出は判然とせず一般的にはシルトへの漸移層面での把握である。なお北段丘崖以北の河岸低地は既述のとおりでL地点は南辺築地線から約870m北に相当するが周辺での遺構は全く検出されない。

引用・参考文献 「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II」 岩手県教育委員会 昭和54年3月
「志波城跡I」太田方八丁遺跡範囲確認調査報告書 盛岡市教育委員会 1981年3月
佐嶋與四衛門 北上川の蛇行と平石川の影響 「岩手史学研究」No52 昭和44年2月

注1 機械ボーリング調査報告書 東北自動車道滝沢西根間第二次土質調査

方八丁地区 ボーリング番号 B₄-5
ボーリング番号 B₄-1
ボーリング番号 B₄-2
ボーリング番号 B₄-4
ボーリング番号 B₄-3
東北自動車道第三次土質調査
盛岡地区 ボーリング番号 No 4

III 検出された遺構と遺物

調査地内で検出された遺構は、南辺外郭関連の築地跡、掘立柱櫓跡1棟、築地内溝1条、外溝1条、南(外)大溝1条、築地線とその北約620mの段丘崖までの間に、竪穴住居跡および竪穴169棟、井戸跡1基、掘立柱建物跡18棟、土壇21基、焼土遺構32基、溝9条、その他である。

保存部分を除く竪穴住居跡および竪穴72棟、掘立柱建物跡16棟、他の遺構は溝の一部を除き精査をした。以下、精査遺構と遺物について記述する。

1 南辺外郭遺構

南辺外郭関係では、築地跡、掘立柱櫓跡、築地内外溝、南(外)大溝が主な遺構である。検出地区は、調査区U～Wブロックである。築地跡と掘立柱櫓跡は保存を前提に面的調査を主体にし、断面観察は一部にとどめた。

(1) 築地跡 (付図4 第7図 第8図 第9-1図 写真図版3・4)

遺跡の南北中軸付近で、東西に帯状に走り周囲より小高くドテツパタケと通称される畑地があり、調査当時は土壘かと想定されていた。このドテツパタケの西延長線には他より若干幅の広い畦畔があり、調査区ではU・Vブロック境を東西に走る。

そのため、畦畔沿いを人力による粗掘り、遺構検出の結果、水酸化鉄を含む水田耕作土の底土下、黒褐色粘質土面で東西約69mの寄柱列を検出、築地と確認した。

築地は地表を削り出して構築したものと推定され、現存の削り出し部の南北幅は6m～8mで西側に広がる傾向にあるが、陵線は整っておらず出入りもある。陵線から内溝南側上端までは約2m～2.5m、外溝北側上端まで約2.5m～3mを計りより狭い部分も一部ある。陵線から内外溝上端までゆるやかな傾斜で下がり、その比高は約50cm～60cm内外ある。寄柱幅中点から内溝南側上端まで5.5m、外溝北側上端まで6.5mを計る。

寄柱検出面はほぼ平坦で、基底地業や版築土は確認されず削平がおよんだものと考えられる。寄柱掘り方は径約30cm～40cm内外の円形の平面形を主に、方形に近いものも若干みられる。埋土は黒褐色土に黄色シルトがブロック状に混るのが主体で検出面からの深さは第8図の知見で25cm～35cmを計り、径15cm内外の平面円形の柱痕を確認できるものである。

柱列は4列からなり、第7図模式図に示すように、内列は2.4m幅で、外列は3m幅で対になる。桁行方向は、櫓以东でE-7'30'-S、櫓部分はE-5'30'-S、櫓桁行と一致し、櫓以西がE-6'30'-Sで若干屈曲がある。桁行間隔は一定しないが、内列では4.4m～6.5mの中に入り1間平均は約5.5mになる。外列は間隔が密でしかも一見不規則の様相を呈するが、次の三

点に整理される。一点は内列桁行間のほぼ中間に対柱が位置し、4.9m～6mの中にあり1間平均約5.5mで内列と一致する。更に1.2m～2m外側に柱穴があり、檜より東では概ね1.7m、西では1.2m～2mと間差が大きいが1.2mが多く全般に東より狭い。このことは、後述する不整形な攪拌土の広がりに関連する可能性も考えられる。なお、外側柱穴の南北間隔は5.4m～6.4mを概ねとする。二点めは内列柱に近接し、特に両側に位置するものが多く一単位の様相を呈すること、三点は挟間隔の柱も概ね対をなすことである。

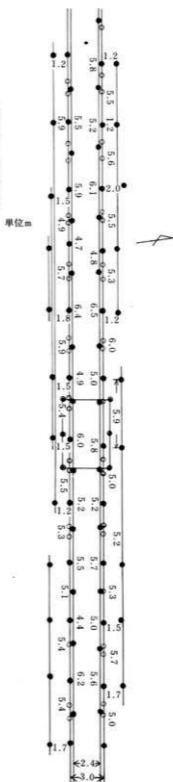
以上から内外列の関連性が推察され、切り合い関係にある柱穴掘り方では第8図のように外列が新しいが、築地構築手順上の先後関係とみれば内外列の同時性を否定するものとはなり得ない。

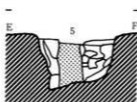
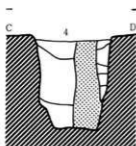
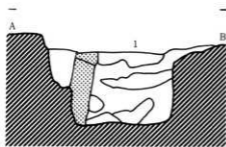
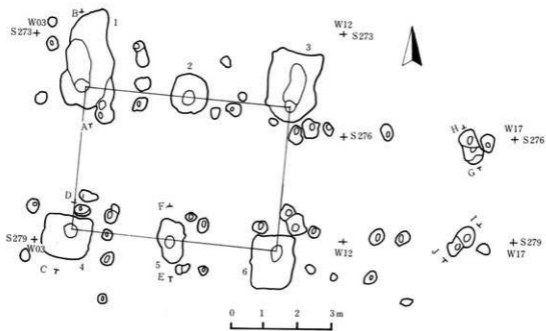
削り出し線と内外溝との間に、東西6.4m～2.6m×南北1.6m～1.1m規模の黄褐色シルトと黒色土が攪拌状に混在する不整形の広がりがあり(付図4)、東西に断続して走るが、檜以東の北側では顕著でない。第9-1図C-D築地外溝断面によれば、固くしまった堆積土があり底面は起伏をもち、範囲内の一部に柱穴をもつことから、土取り後の地業とも考えられるが、今次調査でその性格を断定できるものではない。

(2) 掘立柱檜跡 (付図4 第8図写真図版5・6)

築地寄柱列を跨ぎ檜とみられる。東西6m(19.80尺)2間で、柱間3m(9.90尺)+3m

第7図 寄柱模式図





0 1 m
SL=131.80m

第 8 圖 槽、寄柱關係圖

(9.90尺)の等間、南北1間4.2m(13.86尺)の規模である。建物方向はE-5°30'-Sを計る東西棟で整然とした柱配列を示す矩形の建物である。

掘り方は東・西列が大きく、中列が小さい。形状は一定しないが方形を基調とするとみられる。各々の平面規模は東西、南北で、掘り方1 1.4m×2.8m、2 1.1m×1.1m、3 1.3m×2.2m、4 1.4m×1.3m、5 0.8m×1.2m、6 1.3m×1.6mである。検出面からの深さは、たちわり調査をした掘り方1で1.4m、4 1.33m、5 0.8mとなる。

これらの掘り方には径30cm~40cmの柱痕が残っている。当初、掘り方1・3では抜き取りがあるようにみえたが、たちわりと吟味の結果、柱痕を確認した。

たちわり調査した掘り方1・4・5によれば、埋土は概ね黒褐色土に大小のシルトブロックを混在するもので、混在するシルトの量とブロックの大・小によって細分される。柱痕跡は黒褐色土でシルトの混在がなく非常にやわらかい。

(3) 築地内外溝 (付図4 第9-1図 写真図版6・7)

築地線に平行してその内(北)と外(南)を走る溝であり、検出した総長は内溝約66m、外溝約63mである。

① 内 溝

溝南側上端は築地基底削り出し段線からゆるやかに下がり約2m~2.5mに、寄柱幅中点から5.5mにある。南・北側とも壁ぎわまでゆるい傾斜で地山を削り、黄褐色シルトに掘りこんだ溝である。

溝規模は上幅2.3m~3m、下幅2m~2.5m、深さは0.7m内外であるが東に深く西に浅くなる。特に西端は砂礫層が浅く、溝掘りこみは砂礫層面まで、上幅4m、下幅3.1m、深さ0.3mである。

壁は比較的直に近い立ちで、底面に多少の起伏をみるが全般的にみると平坦に近く逆台形状の断面を呈するが、一部に北から南壁寄りに傾斜し深くなる箇所がある。なお、ところどころに焼土ブロックや炭化物がみられた。

断面A-B地点での堆積土1層は黒褐色または黒色土を主体に下部に少量の暗褐色シルトを含み、溝がほぼ埋没後の堆積で上面を覆い北側に続く、ために遺構の確認に手間どった。2層も黒褐色土を胎土とするがシルトがブロック状、まだら状に混入し下部ほど多量になり、築地方向からの流れこみの様相を呈する。南壁外2層上面に粉状バミスがある。3層は黒褐色土とシルト、5層は暗褐色粘質土と黒色土の攪乱土であり、その間に4層の黒色土が介在する。各層ともレンズ状を呈し自然堆積と推察される。

断面C—D地点での堆積土は概ね黒褐色土を主体とし、1層は小豆大の礫を含み粘性に乏しくザラザラし、2層中に粉状バミスが含まれ、3層で黄褐色シルトのブロックを若干みる。4層ではシルトブロックが多くなり下部では黒褐色土とシルト、砂の混土となる。A—B地点と異なるのは、黒色土とシルトの攪乱状の層がなく、比較的混りの少ない層が大半で、2層中の粉状バミスの一部が溝上に入る。A—B地点とは様相が異なるが、2層は粉状バミスの高さからA—B地点の2層に対応も推察される。

この断面観察地点で砂礫層のため溝の浅くなる付近から西方へ、南壁外側0.4m～0.8mに平行し上幅1.2m、下幅0.9m、深さは南壁上端から0.8m、北壁上端から0.5m規模で、東から長さ8m、4.8m、更に検出部2.9mで調査地外へと断続して走る小溝がある。壁は直に立ち、黒褐色土にシルトブロックを混る堆積土は交互に埋められた様相で人為的埋土の可能性が強く、その上を内溝2層が覆う。

内溝東端近く北壁に隣接し東西6m、南北2mの長方形で深さ20m内外の掘りこみがあり底面に焼土と炭、数個の焼石をみる遺構が確認された。現地用火を使用したとみられるが出土遺物はなく、住居跡としての様相はなく、堆積土はC—D地点の2層、4層と共通する。

内溝底面ほぼ中央の南壁に近接しB類環(第9—2図)が伏せた状況で、堆積土中からA類環2点、須恵器甕(第9—2図)が出土した。

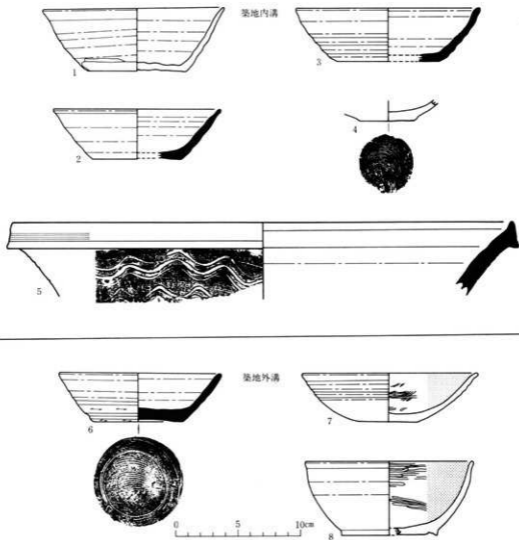
出土遺物 (第9—2図No1～5 第1—1表)

環形土器4点、須恵器大甕口縁部1点の実測である。環4点については下表を参照されたい。No5は須恵器大甕口縁部片。硬質で胎土精良の破片である。口唇直下に図示した波状紋がある。他に縄文土器片1点があるが、ここでは省略する。歴史時代の破片としては、溝底部から須恵器蓋の細片、白橙色に近い須恵器甕体部片(外面に叩目)が出土している。また、堆積土中からは非ロクロ成形土師器甕の口縁～頸部片が3点、刷毛目を有す体部片若干、外面に叩目を有す土師器片多数等があり、環形土器としてはA類ヘラ切片・同手持ヘラ削り片・須恵器台付環の脚部片、B・C類の細片若干等が出土している。

なお、築地近くの検出面からは近世の播鉢陶器片も採集されているが、詳細については割愛

第1—1表 環形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切題	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			h/b	h/d	外傾角度(°)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	—	B 類	ヘラ切	手持ヘラ削り	下部下端～底部	14.4	7.8	5.1	1.8	2.8	59.5	(断面)
2	—	A 類	ヘラ切	手持ヘラ削り	底 部	(13.2)	(7.4)	4.0	1.8	3.3	53.5	
3	—	A 類	ヘラ切	無調整		(14.5)	(8.2)	4.3	1.8	3.4	52.5	磨滅気味。(堆積土)
4	—	B 類	刮削糸切	無調整		—	(44.4)	—	—	—	—	底部片。



第9-2図 築地内溝・外溝出土遺物

する。

② 外 溝

溝北側上端は築地基底削り出し稜線からゆるやかに下がり約2.5m～3m、寄柱幅中点から約6.5mを計る南・北側とも壁ぎわまでゆるい傾斜で地山を削り、黄褐色シルトを掘りこむのは内溝と同様である。

溝規模は上幅3.5m～4m、下幅3m～3.6m、深さは0.6m～0.85mで、内溝よりやや幅広くなる。壁は中端に稜を認める部分もあるが比較的直に立つ、底面は東に低くなる。多少の起伏を

みるが全般に平坦で断面逆台形状を呈するが、南壁から北壁寄りに傾斜し深くなる部分があり内溝と逆対称になる。また、ところどころに焼土ブロックと炭が底面にみられるのも内溝と同様である。

堆積土は断面A-B・C-D地点とも堆積土はほぼ対応するもので、最上の1層は水成のシルトで、当初、地山シルトと誤認し遺構確認に手間どった。C-Dでは砂を含む沈澱層と中央にくぼみがあり数回にわたる水流と堆積が推察される。2層は黒褐色土および暗褐色土でa層がシルトを若干含み褐色味を呈し小礫を含む、3層は黒褐色土とシルトの混合土が主体、4層は黒褐色土とシルト混土にブロック状のシルトを含み上面に厚さ3cm内外の粉状バミスの層をもつ、5層は一部黒褐色土をみるが大半は黒褐色土とシルトの攪拌状を呈する。いずれも自然堆積土とみられる。

堆積土から、A類環、土師器内黒環、土師器内黒高台付環（第9-2図No.8）が出土している。

出土遺物（第9-2図No.6~8 第1-2表）

出土遺物は少なく、坏形土器3点のみの図示。破片としては、堆積土中からB類の糸切底部片と縄文土器片が1点あるだけである。

坏形土器は、No.6がA類、No.7がC類である。また、No.8は台付環であるが脚部を欠失している。

第1-2表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			h/b	h/d	外傾角(度)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
6	—	A 類	回転糸切	回転へり磨り	体部下端—底部	12.7	7.2	3.9	1.8	3.3	52	底部調整外周のみ。(層積土)
7	—	C 類	回転糸切	手磨へり磨り	体部下端—底部	13.9	4.8	4.0	2.9	3.5	41	調整は一部のみ。磨滅。
8	—	台付杯	回転糸切			(13.2)	($\frac{1}{2}$ 口径) 7.8	($\frac{1}{2}$ 口径) 0.4				内黒。C類的。磨滅気味。(床面)

(4) 南(外)大溝 (付図4 第9-1図 写真図版7・8)

築地寄柱幅中点より約44m南に検出され、築地に平行し東西に走る溝である。検出総長は約56mにおよぶが、東側は用水路によって北西—南東へ斜めに切られる。溝は西半で黒褐色粘質土面からシルトへ、東半ではシルトに掘りこんでいる。

規模は上幅5.5m~7m、下幅4m~4.5m、深さ1.4m内外を計る。溝幅は西方に広がる。壁は一部中端に稜を認めるが、やや外開きの立ち上がり、底面はほぼ平坦であり、逆台形状の断面を呈する。なお底面は西方に低くなる。

堆積土は断面A-B・C-D地点ともほぼ対応する。1層は水田耕作土で底土は水酸化鉄を含む黒褐色土を基調とするが、オリーブ褐色を呈する部分も多い。2層は黒褐色土、下部にシ

ルトブロックを若干含む。3層は水成シルトに統一されるが築地外溝C-D地点同様に、細砂を含む沈澱の細層がみられ、中央にくぼみがあり数回にわたる水の流れと堆積が推察される。4層・5層は黒褐色土を主体に一部にシルトをブロック状に混在する部分をみる。4層は3層同様に中央にくぼみ細砂層を含み水流があったとみられ、5層上面に厚さ4cm内外の粉状バミスの層がある。6層は最初の堆積土でA-B地点では黒褐色土にシルトブロックを、褐色シルトに砂を含んでおり、C-D地点では砂を含んだ黒褐色土とみる。

C-D地点では、底面から上50cmに黄褐色の水酸化鉄層が厚さ4cmほどで水平に認められ、面的にも西半約23mにおよび、黒褐色粘質土への掘りこみ部分とほぼ一致す。この酸化鉄層下の堆積土はグライ化しており、A-B地点と異なる点である。

A-B・C-D地点とも堆積土の様相の中で築地外溝と類似点がある。すなわち、上層に水成シルト層を下層に粉状バミス層をみることである。ただし、南大溝では水成シルト層の上に黒褐色土層があり、築地外溝より埋没が若干おそかったものと考えられ溝の規模によるかと想定される。

溝南壁沿いの西半約30mに、幅4m内外で黄褐色シルトを主体とした黒褐色土との攪拌状の土面が検出され、C-D地点での断面観察では溝掘りこみ面の黒褐色粘質土上に、7層とした人為的堆積土を認めた。黄褐色シルトを主体に黒褐色土が攪拌状に混り南側では斜方向のしま状の堆積層相を示し、自然堆積層の黒褐色土に覆われた一時代に粉状バミスが介在する。現存する堆積土の厚さは35cm~50cm内外である。

壁は南北とも下に広がる傾斜をもち、北側は溝壁立ち上がり線と一致し、溝内に入りこまないことから、溝と同時期とみられる。柱穴は認められず、現状では上部構造も明らかでない。また溝北側と東半では認められず、西半南側の黒褐色粘質土面から溝を掘りこむ部分にあることが特徴的である。遺跡中には外大溝沿いに小高い土塁状の高まりが現存することから、土塁の基底とも想定されるが、検出状況からは積極的証左はなく明らかではない。

2 竪穴住居跡と竪穴

カマド施設が認められないものを竪穴とし、竪穴住居跡と分けたが実際は住居的機能を有していた可能性もある。

竪穴住居跡および竪穴は南辺築地から北段丘崖までに検出され、竪穴住居跡159棟(ただし竪穴を含む可能性あり)、竪穴10棟におよぶ、精査遺構は竪穴住居跡63棟(一部精査も含む) 竪穴10棟であり、以下、精査遺構について記述する。なお、未精査遺構検出面での出土遺物については、本項(3)で一括する。

遺構の位置については、個々にふれないが、遺構名の()に付したグリッドを参考にされたい。また東西、南北の長さは遺構の各辺の midpoint を結ぶ線で計測している。

(1) 竪穴住居跡

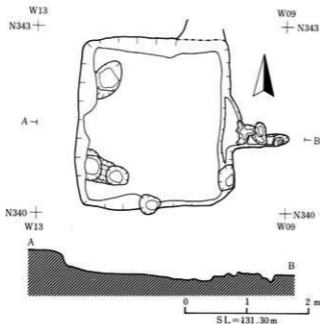
1号(Af15) 竪穴住居跡 (第10図 写真図版9)

(重複 改築) 改築等は認められないが、検出地が後世の屋敷で現状も住宅が建っていたことから、整地、攪乱等によって極めて遺存状況は悪い。

(規模 平面形 方向) 東西2.5m、南北2.7m、面積4.83㎡、ほぼ正方形の平面を呈し、カマド方向軸はN-90°-Eとなる。

(堆積土) シルト混りの黒褐色土を主体とするが、全体的に攪乱が著しい。

(壁) 全般に遺存状況が悪く崩壊も認められる。検出面までの高さは15cm内外を計る。



第10図 1号(Af15)竪穴住居跡

(床) 地山砂質シルト面をそのまま利用したもので、後世の攪乱等による若干の凹凸が認められる。床面には焼土や汚れ等の生活痕はほとんど認められない。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁の中央近くに幅20cmで長さ80cmほどと推定される煙道状の溝が確認され、煙出し部は若干落ちこむ。しかし、攪乱が著しくカマドの全貌は不明である。焼土等も認められない。

(その他の施設) 認められない。

(出土遺物) 堆積土、床面からも検出されない。

2号 (Bd77) 竪穴住居跡 第11図 第2表 写真図版9・51)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西4.7m、南北4.0mで16.27㎡の床面積をもち、やや東西に長い方形を呈し、カマド方向軸はほぼ真北に一致する。

(堆積土) 黒色土にシルトが混合した黒褐色土が主体で細分されない。中央には堆積土上面から掘り込まれた土壌の堆積土が認められる。

(壁) やや外傾して床面から立ち上がり、検出面までの壁高は12cm～14cmある。

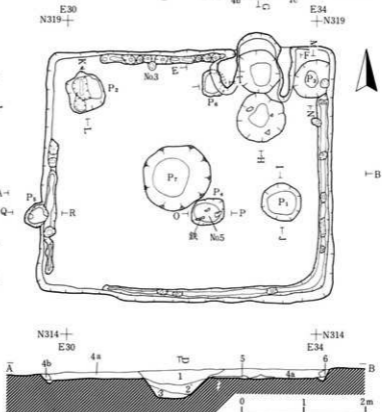
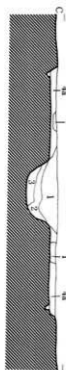
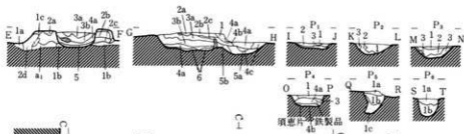
(床) 大半は掘り込んだ地山シルト面をそのまま床面としているが、北東隅のカマド周辺と南東隅では、更に掘り下げた後、シルト面を床面としている部分と同レベルまで黒色土とシルトの混合土を埋めこんで床面を構築していて、いわゆる掘り方構築法を用いている。

(柱穴) P₅は径が約35cm×35cm深さ36cmあって、西壁南半のほぼ中央に位置し、大半は壁外になるが、内側に傾斜する様相をもつ。検出されたピットの中では柱穴状を呈するものであるが、対応するものが認められず断定できない。

(周溝) 北東隅、西壁の北半から北西隅、南壁の西端部分を除く四壁で認められる。上幅は約14.5cm平均で、床面からの平均深さは約4cm～5cmを計り、周溝内には13cmで、溝底から5cmほどの深さをもつ小穴があり、壁の土留施設の一部かと推察される。特に、北壁沿い周溝内に密である。

(カマド) 北壁東半の中央に位置する。煙道と煙出しは確認できなく、燃焼部の一部が半円状に壁外に張り出し、壁内に両袖をもつ、燃焼部は間口で約60cm～70cm 奥行約1m 検出面までの高さ約25cmの規模をもつ、袖は、シルトと黒褐色土による構築である。焚口の前面に径約75cm×20cm深さ20cmの焼土のぎっしりつまったピットが認められた。

(その他の施設) P₁～P₇を認めたが、P₅については柱穴の項で述べた。P₇は後の土壌で時代



SL=131.00m

A-B C-D			
1	IVVN	黒褐色土	シロ土が混入、塊状の石を含む
2	IVVN	黒褐色土	シロ土まがらみに含む
3	IVVN	黒褐色土	シロ土まがらみに少量の石
4a	IVVN	黒褐色土	黒色のシロ土混合
4b	IVVN	黒褐色土	黒色のシロ土混合
5	IVVN	黒褐色土	シロ土質
6	IVVN	黒褐色土	シロ土質
E-F 断面			
1a	IVVN	黒褐色土	シロ土
1b	IVVN	黒褐色土	塊状の石
1c	IVVN	黒褐色土	シロ土
2a	IVVN	黒褐色土	シロ土混合
2b	IVVN	黒褐色土	シロ土
2c	IVVN	黒褐色土	シロ土
2d	IVVN	黒褐色土	シロ土
2e	IVVN	黒褐色土	シロ土
2f	IVVN	黒褐色土	シロ土
2g	IVVN	黒褐色土	シロ土
E-F 断面			
1	IVVN	黒褐色土	シロ土
2	IVVN	黒褐色土	シロ土
3	IVVN	黒褐色土	シロ土
4a	IVVN	黒褐色土	シロ土
4b	IVVN	黒褐色土	シロ土
5	IVVN	黒褐色土	シロ土
6	IVVN	黒褐色土	シロ土

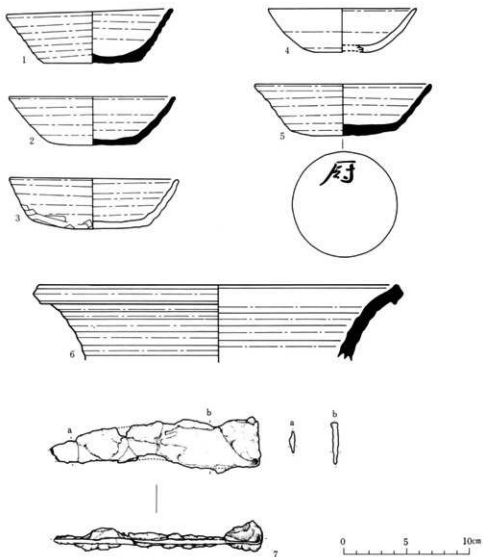
I-J			
1	IVVN	黒褐色土	シロ土
2	IVVN	黒褐色土	シロ土
3	IVVN	黒褐色土	シロ土
K-L			
1	IVVN	黒褐色土	黒土
2	IVVN	黒褐色土	黒土
M-N			
1	IVVN	黒褐色土	シロ土
2	IVVN	黒褐色土	シロ土
O-P			
1	IVVN	黒褐色土	シロ土
2	IVVN	黒褐色土	シロ土
3	IVVN	黒褐色土	シロ土
Q-R			
1a	IVVN	黒褐色土	シロ土
1b	IVVN	黒褐色土	シロ土
1c	IVVN	黒褐色土	シロ土
S-U			
1a	IVVN	黒褐色土	シロ土
1b	IVVN	黒褐色土	シロ土
1c	IVVN	黒褐色土	シロ土

第11-1図 2号(Bd77)竪穴住居跡

性格は不明である。P₁は径65cm×60cm深さ7cm P₂ 径70cm×60cm深さ20cm P₃ 径60cm×60cm深さ15cm P₄ 径40cm×50cm深さ15cm P₅ 径45cm×35cm深さ29cmの規模をもつ、これらピットの性格は明確でないが、貯蔵穴かと想定される。

出土遺物 (第11-2図 第2表)

実測点数は、坏形土器A類3点、B類3点の内訳であり、そのうちNo5は底部に「厨」の墨書を有している。A類はいわゆるくすべ色をした須恵器坏であるが、No5は硬質ながらも白橙色がかかる。B類のNo3は橙、No4は浅黄橙色を呈す焼成不良の坏である。No3は胎土が粗悪



第11-2図 2号(Bd77)竪穴住居跡出土遺物

で、内面底部をロクロナデの後にヘラで掻き取った痕跡が残る。No 4 は内外面とも磨滅が著しく、ロクロ成形痕が目立たない。

この他に破片として、ヘラ切A類底部片、須恵器蓋の破片、C類体部3片が堆積土中から出土している。また、カマド内からは非ロクロ成形土師器壁の体部片、A類細片が若干みられる程度である。

鉄製品の鎌は、住居跡内ピットNo 5からの出土である。先端一部等が欠失しており、残存最長部で16.8cm、幅1.7～3.4ほどの大きさである。

第2表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度(°)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	1	A 類	ヘラ切	無調整		13.3	7.8	4.4	1.7	3.0	58	内面に多量のカーボン付着。(P ₁ 内)
2	2	A 類	ヘラ切	回転 手持ヘラ削り	底 部	13.3	6.8	3.9	2.0	3.9	51	(P ₁ 内1層)
3	3	B 類	ヘラ切	手持ヘラ削り	体部下 一部	13.4	8.8	4.2	1.5	3.2	57	内面底部ロクロナデの後掻き取り。(底面+堆積土)
4	—	B 類	底部残存小のため不明	—	—	12.0	(4.4)	3.5	2.7	3.4	43	磨滅著しい。(堆積土)
5		A 類	ヘラ切	無調整		14.0	8.4	4.2	1.7	3.3	52	底部外面に墨書「厨」あり。(P ₁ 内4層)

3号 (Cb77) 竪穴住居跡 (第12図 第3表 図版9・51)

(重複 改築) 1号 (Cb77) 溝によって、竪穴住居跡の中央近くを東西に斜めに切られており、溝底面は住居跡床面に達する。

(規模・平面形・方向) 東西3.7m、東西4m、面積14.24m²で、若干の歪みをもつが、ほぼ正方形に近い平面形を呈し、カマド方向軸はN-86°-Eである。

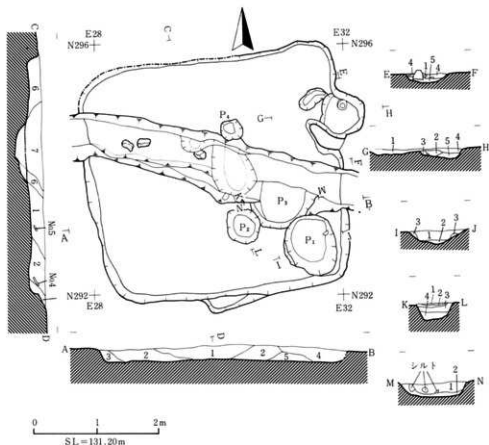
(堆積土) 竪穴住居跡の本来的な堆積土として明確なのは1層・2層および5層の黒褐色土と3層の黒色土とシルト混合の暗褐色土であり、1層・2層・5層はシルトの混入量とシルトブロックの有無等で差異がある。ほぼレンズ状の堆積状況を示す。6層はシルトをまだらに攪拌状に含む黒褐色土で、溝と関連した人為的なものと推定され、7層は溝の堆積土である。

(壁) 検出面上に攪乱土が広がり、遺構検出のため上面を相当削っており、特に北側では顕著であったし、壁も下端近くに辛くも遺存していた。他の壁も遺存状況が良好とは言えず、南壁では崩壊部分を認めた。全般に外傾する立ち上がりで、検出面までの高さは、西壁、南壁で20cmほど、北東隅付近では5cm～8cmであり、北壁の大半は5cmほどの遺存である。

(床) 地山シルトをそのまま利用した床面で比較的凹凸がある。貼り床等は認められない。

(柱穴) 柱穴と確認できるものは認められない。

(周溝) 認められない。



A—B C—D	
1 10YR/7 黒褐色土	極少のシルト粒混入
2 10YR/7 黒褐色土	極少の炭となり多いシルト
3 10YR/7 暗褐色土	炭屑付(1)シルト混入
4 10YR/7 黒褐色土	シルト粒を全粒に含む
5 10YR/7 黒褐色土	シルト粒、太豆大シルトアロップ
6 10YR/7 黒褐色土	シルトまだら状(礫混)
7 10YR/7 黒褐色土	シルト粒極少(礫埋土)
F—F' G—H	
1 10YR/7 黒褐色土	焼土粒若干シルトの小アロップ
2 5YR/7 赤褐色土	シルトの小アロップあり
3 13YR/7 暗褐色土	若干の焼土粒、シルトアロップ
4 13YR/7 暗褐色土	まだら状の焼土、シルト
5 10YR/7 暗褐色土	極少の焼土とシルト粒

I—J	
1 10YR/7 黒褐色土	シルトをまだら状に
2 10YR/7 暗褐色土	粘質シルト 焼土をアロップ状に
3 10YR/7 暗褐色土	シルト 黒褐色土まだら状に
K—L	
1 10YR/7 黒褐色土	シルト、焼土混入
2 10YR/7 暗褐色土	シルト 黒褐色土まだら状に
3 10YR/7 黒褐色土	シルトアロップ若干
4 10YR/7 暗褐色土	粘質シルト 0.5mm以上の炭屑を多数含む
M—N	
1 10YR/7 黒褐色土	シルト混入
2 10YR/7 黒褐色土	アロップ状のシルトあり

第12—1 図 3号 (cb77) 竪穴住居跡

(カマド) 東壁北半中央に位置するが遺存状況は悪い。燃焼部は壁外に半円状を張り出し、壁内に袖が認められるが攪乱等で原形と異っている可能性もある。燃焼部の間口は60cm奥行60cmで15cmほどの深さに掘りこまれているが、掘り方をもつ構築か否か明瞭でない。北側壁寄りに伏せた妻が検出された。煙道、煙出しは確認されない。

(その他の施設) $P_1 \sim P_4$ が検出された。 P_1 と P_3 は径100cm深さ20cmほどで比較的大形で、黒褐色もしくは褐色土を堆積土の主体にもち、 P_1 では遺物も包含する。 P_2 は径50cm内外、深さ30cmを計り、堆積土下層に白粘土と焼土がまだら状に混り粘性の強いシルトをもつのが特徴で、

最上面は黒褐色土やシルトを貼っており、住居跡使用時に人為的に埋めたものと推察される。
P₄は径30cm内外の方形に近いプランを呈し、深さ20cmで、柱穴状でもあるが、柱痕等もなく確定されるものではない。また、溝の中央に掘り込みを認めるが、住居跡に属する確証はない。

以上のピット中、P₄を除き貯蔵穴の性格が推察される。なお、P₁・P₃、P₂とP₃は、それぞれ重複しP₃がどれよりも先になる。また、P₃の本来の堆積土は溝によって掘り取られているものとみられる。

出土遺物 (第12-2図 第3表)

環形土器2点、甕形土器6点、鉄製品1、計9点を図示している。

環は2点とも反転復元によるもので、両者とも浅黄橙色を呈するB類環である。

土師器甕のNo3～6は何れも非ロクロ成形。4点とも各々器形が異なるものと推定される。この中で、特にNo6の破片は球形形を呈するものと思われ、一部に赤色塗彩らしき痕跡が残っている。No5は歪みのある稚拙な成形であり、No3・4は形が整っているが、胎土・焼成があまり良くない。何れも二次火熱を受けたものと推される。

No7は床面出土の鉄製品であるが器種は不明。棒状を呈している。

上記の他に、堆積土を中心として、A類底部2片(ヘラ切)、手持ヘラ削りを有するB類底部片、黄灰色軟質の蓋の破片等がある。蓋の推定径は18cm位。また、カマド内からは、No6の下部に相当すると思われる破片がある。この場合の底部は木葉底を呈している。

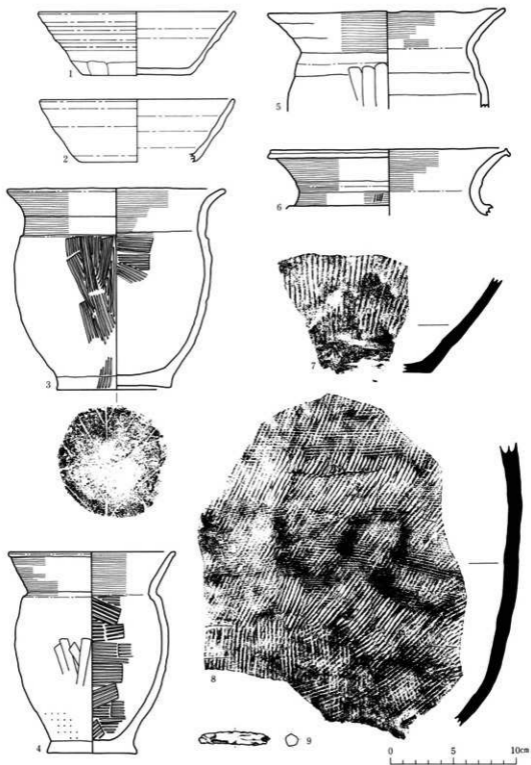
甕形土器については、絶対的に非ロクロのものが多く、No4のように底部の反りが強い破片

第3-1表 環形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			h ₁ /b	h ₂ /d	外傾角度(°)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	4	B 類	調整のため不明	手持ヘラ削り	体部下端～底部	(15.6)	8.6	5.1	1.8	3.1	55	内面の磨面著しい。(床面直上)
2	5	B 類	底部残存小のため不明	—	—	(15.4)	(9.6)	5.0	1.6	3.1	58	内外面磨面著しい。(床面)

第3-2表 甕形土器一覽

実測図番号	写真番号	種 別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大傾斜	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
3	6	土師器	18.6	9.2	16.1	15.7	ヨコナデ	刷毛目	ヨコナデ	刷毛目	非ロクロ。木葉底。
4	7	土師器	(13.4)	7.2	16.1	12.3	ヨコナデ	ケズリ	ヨコナデ	刷毛目	非ロクロ。底部ケズリ。黒変あり。
5	—	土師器	(19.0)	—	—	—	ヨコナデ	ケズリ	ヨコナデ	不 明	非ロクロ。歪みあり。
6	—	土師器	(19.4)	—	—	—	ヨコナデ 一部刷毛目	—	ヨコナデ	—	非ロクロ。肩部有段。球痕か。
7	—	須恵器	拓影図。外面縦位の平行印目。下端傾位のケズリ。内面カキ目。(カマド内出土)								
8	—	須恵器	拓影図。外面印目+カキ目。下端自然輪あり。内面正直+ナデ。								



第12—2图 3号(Cb77)竖穴住居跡出土遺物

が他に3点ほどある。また、ロクロ成形の破片は、体部に叩目を有している。

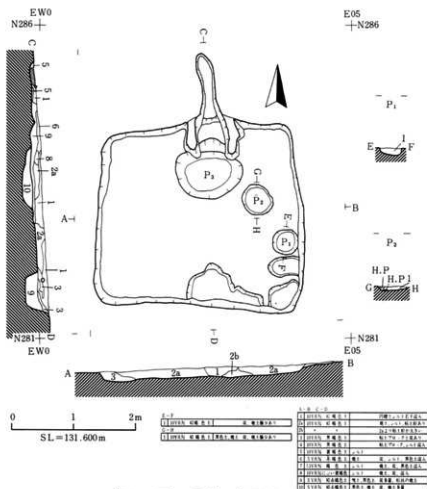
4号 (C150) 竪穴住居跡 (第13図 第4表 写真図版10・51)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3.2m、南北2.8mで8.68㎡の面積をもつ長方形の住居跡であり、カマド方向軸はN-4°-Wである。

(堆積土) 暗褐色土と黒褐色土を主体とし、暗褐色土は円礫と若干のシルトを含むものと、焼土、シルト、粘土粒を含むものとならなり遺物を包含しており、床面まで達している。黒褐色土は壁ぎわに流れこんだ状況を呈する。

(壁) 南壁部東半が焼土ピット等の存在で、若干外側にひろがる。やや外傾する立ち上がりで検出面までの高さは約14cmを計る。



第13-1図 4号 (C150) 竪穴住居跡

(床) 全般に地山シルトをそのまま利用したほぼ平坦な床面である。東南隅に不整形で深さ20cmほどで、焼土と黒色土の混土に多量の炭を含み遺物を包含する堆積土をもつ掘りこみがある。堆積土の状況から、床面構築時と同時のものではなく、その後に生活面に付随して掘りこまれたものと推察される。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 北壁中央部にやや東寄りに位置し、カマド前面に径100cm×110cm深さ15cmほどのP₃を掘りこんで、袖の一部と焚口付近はP₃の北縁の上に構築されており、P₃の堆積土は炭を多量に含む焼土と黒色土の混土であって、P₃はカマドの灰原的なものと推察される。燃焼部から立ち上がって煙道となり北に約100cmのび、幅20cm、深さ8cm内外の溝状を呈し、煙出しとの区別は認められない。

(その他の施設) P₁とP₂を認めた。何れも東半壁寄りで、P₁はその南半、P₂は北半に位置する。P₁の径は40cm深さ10cm、P₂は径50cm深さ5cmを計り、ともに、炭と焼土を極少含む暗褐色の堆積土をもつ。貯蔵穴かと想定されるが確証はない。

出土遺物 (第13-2図 第4表)

A類環3点、須恵器台付環1点、土師器甕2点、須恵器甕片1、鉄製品・砥石各1点の実測。

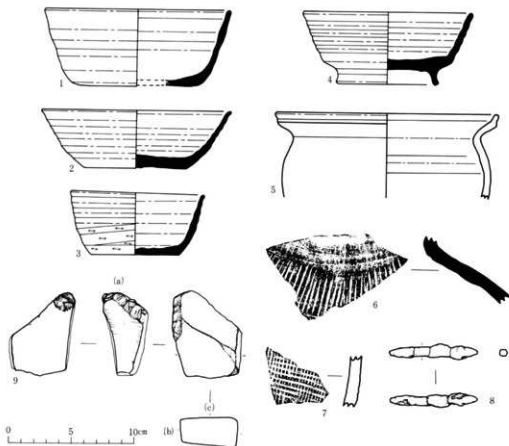
土器類はNo3を除き反転復元・拓影に依る。No2はヘラ切の後、底面の外周と中央付近に軽いナデがみられるが、再調整というほどのものではない。No4は付高台に依る。体部の凹凸が激しく、起上がりも比較的急である。

第4-1表 環形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切磨し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			h/b	h/d	外傾角度(°)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	8	A類	ヘラ切?	—	—	(14.8)	(9.6)	6.2	1.5	2.4	67	底部残存が小。(床面+堆積土)
2	—	A類	ヘラ切	無調整	—	(15.2)	8.2	4.6	1.9	3.3	52.5	底部ヘラ切の後中央部と外周にナデ。(床面)
3	9	A類	調整のため不明	回転ヘラ磨り	体部下縁一底部	10.6	7.0	5.1	1.5	2.1	68	(床面)
4	—	台付環	不明	—	—	(13.4)	8.7 7.8	8.6 1.2	—	—	—	ロクロの回転力弱い。(床面)

第4-2表 変形土器一覽

実測図番号	種 別	法 量	技 法	そ の 他
5	土師器	反転復元。推定口径17.9cm。一部黒変している。全体的には暗赤褐色を呈す。巻上げ後のロクロ成形。(南壁焼土中)		
6	須恵器	拓影図。頸部から胴部にかけての破片。外面磨位の印目。内面はロクロナデ。青灰色。(堆積土中)		
7	土師器	拓影図。外面格子状印目。黄褐色。軟質。甕片として処理したが、正確な器種不明。(堆積土中)		



第13-2図 4号(Cf50)竪穴住居跡出土遺物

No 7は格子状の叩目痕を有する土師器片。堆積土中からの出土である。

No 8は鉄製品。腐蝕が進んでおり器種不明。長さ約7.1cm・重さ7.1gほどであるが、大半は錆部分である。

No 9は砥石。材質は斜長石流紋岩であり、6面に渡っての使用痕が認められる。

上記の他には、住居跡内ピットと南壁焼土中より赤色塗彩を施す土師器片がみられる。ロクロ不使用で、球形形を呈するものと思われる。南壁際焼土中からは、底面のみに回転ヘラ削りの再調整を有するC類片もみられ、またカマド内からはB類の色調を呈する環の体部片が数点あった。

なお、堆積土の上層部には、播鉢と思われる陶器細片がみられた。

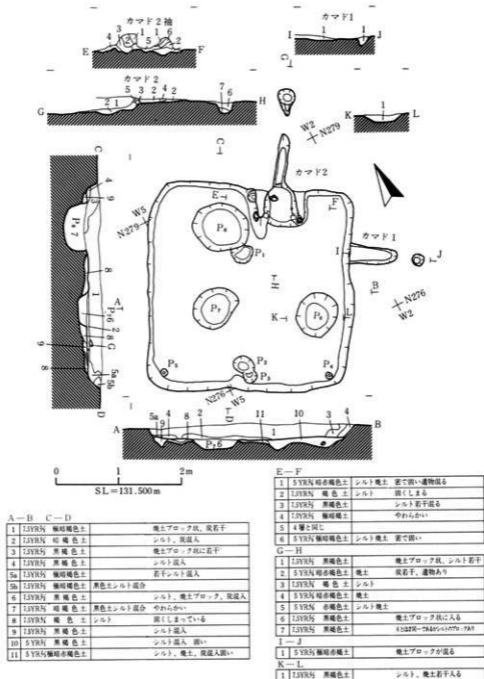
5号(Cg06) 竪穴住居跡 (第14図 第5表 写真図版10・52・53)

(重複 改築) カマドの改築があり、No 1カマドが旧、No 2カマドが新である。

(規模 平面形 方向) 東西3m。南北3.2m、面積9.0m²のほぼ正方形の平面形を呈し、カマド方向軸はNo 1カマドがN-122°-E、No 2カマドがN-31°30'-Eである。

(堆積土) 極暗褐色土の単層に近く、下層にシルトと炭を含む暗褐色土と、壁ぎわに黒褐色土の極暗褐色土が流れこみの様相で入り、極自然の堆積状況を示す。

(壁) やや外傾する立ち上がりで、検出面までの高さは約20cmを計る。



第14—1図 5号(Cgo 6)竪穴住居跡

(床) 全面に掘り方をもち、シルトを混入する黒褐色土をもって構築し、ほぼ平坦で固い面である。

(柱穴) 南北のほぼ中軸線上に乗りP₁とP₂があり、P₁は北壁上端から南へ1m、P₂は南壁上端から0.4mとそれぞれ内側にあり、両者間は1.8mを計る。また、P₁の径は約30cm、深さ15cm、P₂の径は約30cm、深さ38cmの規模をもち、規模、配置面から柱穴と推察できる。

なおP₂と接するP₃は径20cm、深さ20cmの柱穴状であり、P₃の補強または建てかえがあったものか、P₃との先後関係等明瞭でない。

(周溝) 認められない。

(カマド) Na1カマド 東壁北半の中央に煙道と煙出しのみを認める。煙道は約100cm東にのび、幅25cm、深さ5cmの溝状を呈し、煙出しは径17cm、深さ12cmを計る。

Na2カマド 北壁中央よりやや東寄りに位置し、掘り方をもって埋土の上に燃焼部や袖を構築しており、燃焼部火床は間口30cm、奥行60cmで若干くぼんでいて、暗赤褐色焼土の堆積があり下に掘り方埋土の極暗褐色土をみる。袖は石や土器片を芯材に用いシルトおよび黒褐色土によって構築している。燃焼部から立ち上がった煙道は、幅18cm、深さ5cmの長さ130cmの溝状で北にのび煙出しとなり、径25cm、深さ12cmを計る。遺存状況からNa1カマドより新しい。

(その他の施設) P₆～P₈の円形ピットをもつ。それぞれの規模は、P₆ 径65cm×70cm、深さ10cm、P₇ 径60cm×75cm、深さ15cm、P₈ 径75cm×90cm、深さ35cmで、P₆とP₇は黒褐色土にシルトや焼土を若干含む堆積土、P₈は黒色土とシルト混合の暗褐色土を堆積土とする。何れも貯蔵穴様の形態をもつ。

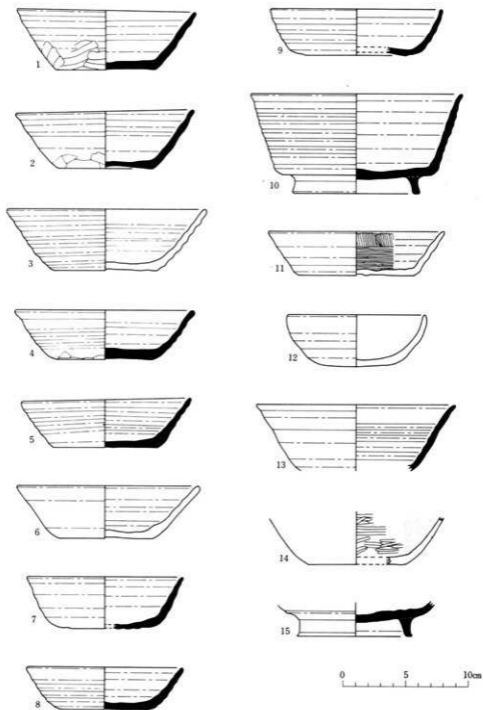
小穴P₄・P₅が南東および南西隅にあり、P₄は径10cm、深さ16cm、P₅は径13cm、深さ13cmを計る。規模と位置から壁の土留施設の一部かとも推察できるが確証はない。また、前述のP₃は、前2ピットに比し、規模は大きい相互に関連する施設の可能性もある。

出土遺物 (第14-2・3図 第5表)

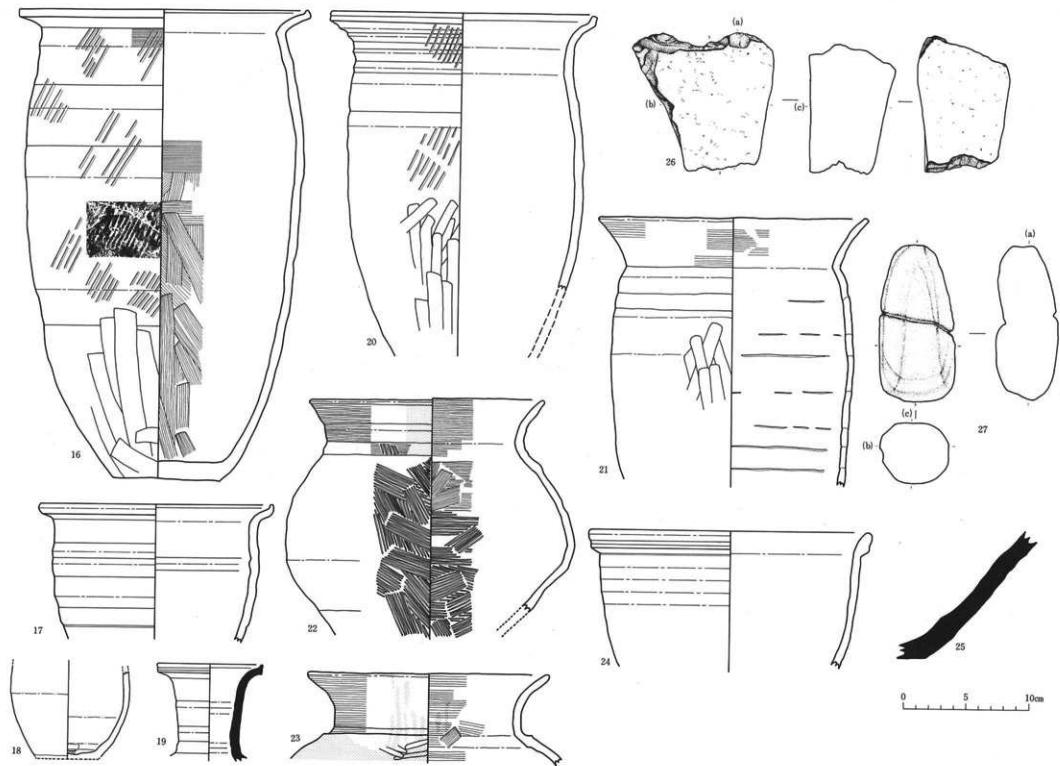
坏形土器15点(台付坏2点)、甕形土器7点、鉢形土器・長頸壺・磁石・石製品各1点、須恵器拓影図1点の計26点。

坏はA・B・Cの各類が出土している。切離し技法はヘラ切が主であり、判明するものではNa7の1点だけが糸切である。ただし、Na7は住居跡壁外から発見されたもので、必ずしも同伴するものではない。手持ヘラ削り・回転ヘラ削り等の調整を有する坏は、Na1・2・4・8(以上手持ヘラ削り)・12(回転ヘラ削り)などがある。

甕形土器は、16・17・18・20・21・22・23等があるが、何れも酸化焰焼成によるものである。長胴形を呈すのはNa16・17・20・21(21のみ非ロクロ)の4点、非ロクロ成形で体部が球胴になるものがNa22・23の2点である。後者の2点は共に赤色塗彩が施される。Na18は正確な器種



第14—2图 5号(Cg06)整穴住居跡出土遺物



第14—3图 5号(Cg06)竖穴住居跡出土遺物

は不明であるが、ここでは小型甕の破片として分類した。

No19は長頸壺の頸部片。胎土・焼成共良質である。No25は須恵器の体部下端片。外面を叩いた後に単位の細かいヘラ削り調整を行なっている。一部に黄橙色や黒変部分が見られるが硬質である。

第5-1表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)				a/b	a/d	外形角度(°)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)	最大幅				
1	10	A 類	調整のため不明	手持ヘラ削り	体部下端 ~底部	14.3	8.0	4.9	1.8	2.9	55	(床面)	
2	11	A 類	ヘラ切	手持ヘラ削り	体部下端 ~底部	14.2	7.6	4.7	1.9	3.0	56	底部の調整は外周のみ。(床面)	
3	12	B 類	ヘラ切	無調整		15.9	8.2	4.9	1.9	3.2	50.5	口縁付近、割線著しい。(床面)	
4	13	A 類	ヘラ切	手持ヘラ削り	体部下端 ~底部	14.2	7.6	4.0	1.9	3.6	50	(床面上+増積土)	
5	14	A 類	ヘラ切	無調整		13.5	8.2	4.0	1.6	3.4	51	底部外面軽いナデ。(床面+増積土)	
6	15	B 類	磨滅のため不明		—	14.5	7.6	4.2	1.9	3.5	49	内面に多量のカーボン付着。(床面)	
7	—	A 類	ヘラ切	無調整		(12.4)	7.0	4.2	1.6	3.0	59	(床面)	
8	—	A 類	調整のため不明	手持ヘラ削り	底 部	(12.4)	7.6	3.4	1.8	3.6	51	(増積土中)	
9	—	A 類	回転糸切	無調整		(13.6)	(8.0)	3.7	1.7	3.7	53		
10	—	台付坏	ヘラ切			(16.8)	17.0 (幅径)	8.0 (高さ)					灰黄褐色(10YR 5/6)で軟質。底部外面に黒墨あり。(床面+増積土)
11	—	C 類	ヘラ切	無調整		(14.0)	9.2	3.5	1.5	4.0	56	(床面)	
12	—	B 類	ヘラ切	別転ヘラ削り	底 部	(11.0)	6.4	4.2	1.7	2.6	59.5	内面磨滅、少量のカーボン付着。外面一部割線。(増積土)	
13	—	A 類	底部欠失	—	—	(16.0)	—	—	—	—	—	(床面上)	
14	—	C 類	磨滅のため不明		—	(7.8)	—	—	—	—	—	(床面+増積土)	
15	—	台付坏	ヘラ切			—	(幅径) 9.3	(高さ) 1.4					(床面)

第5-2表 甕形土器一覽

実測図番号	写真番号	種 別	法 量 (cm)				外 面 調 整		内 面 調 整		備 考	
			口 径	底 径	器 高	最大幅	口縁部	体 部	口縁部	体 部		
16	16	土師器	23.2	8.6	37.4	22.2	ロクロナデ	叩 +ケズリ	目	ロクロナデ	ヘラナデ	赤褐色。下層炭付着。(床面)
17	—	土師器	19.0	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	浅黄褐色。焼成良。(床面+Q、増積土)
18	—	土師器	—	5	—	9.6	—	不 明	—	不 明	不 明	赤切か？(床面)
20	17	土師器	21.5	—	—	19.0	ロクロナデ + 叩 目	叩 +ケズリ	目	ロクロナデ	不 明	二次火焼、黒変・赤化部分あり。
21	—	土師器	21.7	—	—	19.6	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	不 明	骨上げ痕明確。	
22	18	土師器	18.8	—	—	23.0	ヨコナデ 一部刷毛目	刷 毛 目	ヨコナデ	ヘラナデ + 刷 毛 目	刷毛目	球胴形。赤色塗彩。(床面)
23	—	土師器	19.5	—	—	—	ヨコナデ	ミガキ的な ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	赤色塗彩。球胴と思われる。(P、内)
25	—	須恵器	体部片、拓彩図。	外面叩目+ヘラケズリ。	内面ロクロナデ、ヘラナデ一部あり。							

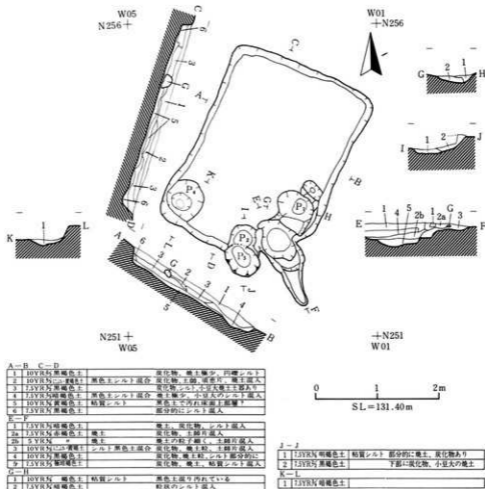
No26は砥石。荒砥用と思われる、材質は両輝石安山岩熔岩塊である。5面使用。また、No27は白色細粒凝灰岩である。面取りをしているため石製品としたが、用途は明らかではない。陽物石の類いかもしれない。

これらの他に床面からは、体部下端から底部にかけて手持へら削りを施すA類片2、へら切無調整A類片1、C類体部片若干等が出土している。

また、床面下(住居跡掘り方内)からは、底部直近に段を有するD類片、土師器木葉底部片と非クロコ甕体部片等が出土している。これらは竪穴住居跡が掘り込まれた段階で混入したものであろう。

6号(De 06) 竪穴住居跡 (第15図 第6表 写真図版11・53)

(重複 改築) 認められない。



第15-1 図 6号(Deo 6) 竪穴住居跡

(規模 平面形 方向) 東西2.4m、南北3.2mで7.68m²の面積をもつ南北に長い長方形の平面で、長軸方向がN-27°-Eであり、カマド方向は、N-159°-Eとなる。

(堆積土) 大別すると、黒褐色シルト質土に焼土、炭化物粒、円礫、黄褐色シルトブロック等を混入する層と、黒褐色土に土器片、小豆大の焼土粒、炭化物粒等を混入する層が堆積土の主体を形成する。以上の前者は堆積土断面1層、後者は3層に当る。1層と3層間には使用焼土塊を含む2層がみられ、当住居の埋没進行中に火が用いられたものと推定される。

(壁) 比較的良好な遺存で、垂直に近い状況で立ち上がる。床面から検出面までの壁高約20cmを計る。

(床) 地山面と生活面間に約3cmと4cmの黄褐色シルト質土の間層をみるが、意識的に敷いたものか否か不明であるが、おそらく生活による汚れと見なす方がよいと思われる。床面はほぼ平坦である。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 南東隅に位置し、燃焼部は、間口約50cm、奥行約60cmで、検出面までの高さは約20cmであって、その構築は掘り方をもつ方法である。両袖は黄褐色砂質シルトを用い、特別な芯などは認めない。煙道は壁外へ南東に約60cmのびる溝状の掘りこみで、特別な煙出しは存在しない。

(その他の施設) P₁~P₄のピットがある。うちP₃は本住居跡より新しい時期のものとみられる。P₁・P₂はカマド袖の両サイドに位置し、径約60cm、深さ約10cmあり、堆積土中に遺物を包含する。P₄は西南隅にあり、径約60cm、深さ約14cmで遺物は含まない。貯蔵穴の性格も推定される。

出土遺物 (第15-2・3図 第6表)

坏形土器17点、甕形土器4点、須恵器長頸壺1点、鉄製品2点、合計24点の実測である。

坏形土器はA類9点、B類2点、C類4点、台付坏(須恵器)2点となっている。再調整を有している坏は、No1(B類)、No2・6・8・9・11・12・15(A類)、No5・17(C類)等である。No7については、底面に軽いナデ痕がみられるが再調整といえるほどではない。

No11・12の坏は何れも小型のもので、本遺跡特有の器形でもある。

甕形土器については、別紙一覧表を参照されたい。他の破片として須恵器蓋、甕体部片等が散見される。(床面出土)

No21は須恵器長頸壺の破片である。埋土中からの出土。上部が剝離している。切離しは不明。外面灰黒色、内面灰白色を呈す。胎土・焼成共に精良である。

No23・24は鉄製品。No23は鉄鏃、No24は刀子である。共に床面出土。大きさ等については後

第6-1表 坏形土器一覽

実測図番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度(°)	備 考
					口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	B 類	調整のため不明	手持へう割り	体部下端	(14.8)	(9.0)	5.0	1.6	3.0	59	外面磨減。(床面)
2	19 A 類	へう切	手持へう割り	底 部	(13.8)	8.0	3.9	1.7	3.5	53	色調、材質に違い。(7.5YR 5/6 - 橙) 口縁の一部くすべ色。(埋土)
3	A 類	へう切	無調整		(13.8)	(8.6)	3.9	1.6	3.5	55.5	(増積土)
4	20 台付環	不明			(12.8)	{編成}	{編成}				脚部分欠失。(焼土中)
5	21 C 類	へう切	回転へう割り	体中部-底端	(13.6)	7.2	5.0	1.9	2.7	57	(焼土中)
6	台付環	調整のため不明	回転へう割り	体部下端	(19.2)	{編成}	{編成}				脚部分欠失。(埋積土)
7	A 類	へう切	無調整		(14.0)	(8.8)	4.0	1.6	3.5	58	底部に軽いナデ。(焼土中+増積土)
8	A 類	調整のため不明	手持へう割り	体部下端	(13.2)	(6.8)	4.9	1.9	2.7	56.5	(床面)
9	A 類	調整のため不明	回転へう割り	体部下端	(13.4)	(7.6)	3.6	1.8	3.7	51	(焼土中)
10	A 類	底部欠失	-	-	(14.8)	-	-	-	-	-	(増積土)
11	A 類	底部欠失	回転へう割り	体部下端	(8.8)	-	-	-	-	-	(床面) コップ形
12	A 類	調整のため不明	回転へう割り	体部下端	-	(6.0)	-	-	-	-	(増積土) コップ形
13	C 類	底部欠失	-	-	(14.8)	-	-	-	-	-	
14	C 類	底部欠失	-	-	(13.8)	-	-	-	-	-	
15	A 類	底部欠失	回転へう割り	体部下端	(13.0)	-	-	-	-	-	(床面)
16	B 類	底部欠失	-	-	(14.0)	-	-	-	-	-	(増積土)
17	C 類	調整のため不明	回転へう割り	底 部	-	(9.8)	-	-	-	-	(床面+増積土)

第6-2表 変形土器一覽

実測図番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考		
		口 径	底 径	器 高	最大傾	口縁部	体 部	口縁部	体 部			
18	土師器	(19.0)	-	-	-	ナ	デ	-	ナ	デ	-	反転産元、球胴であろう。口縁の有無不明。(床面)
19	土師器	(22.0)	-	-	-	口アロナデ	横位の印目	口アロナデ	ヘラナデ			反転産元。(増積土)
20	土師器	(16.8)	-	-	14.5	ヨコナデ	刷毛目	ヨコナデ	刷毛目			反転産元、非口アロナ、肩部軽い。(焼土+増積土)
22	土師器	-	7.4	-	-	-	刷毛目?	-	刷毛目			球胴形、二次大形、胎土粗悪。(床面+増積土)

掲する一覽表を参照して頂きたい。この他に床面から2.8cm長の器種不明製品1点、増積土中から鉄錐の基部にも似たもの2点が出土しているが特に図示していない。

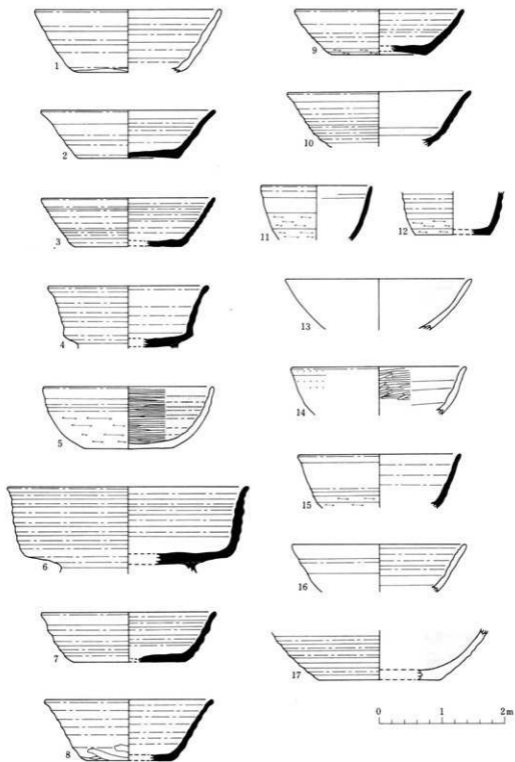
7号 (Dh71) 竪穴住居跡 (第16図 第7表 写真図版11・53)

(重複 改築) 認められない。

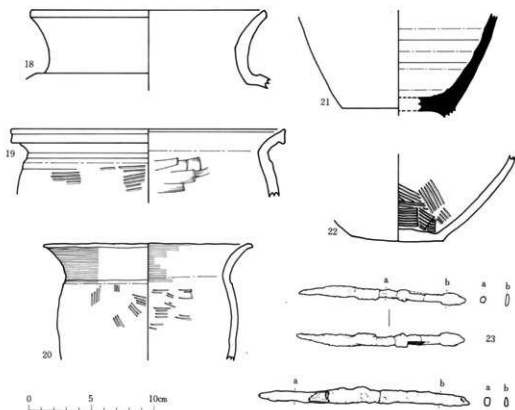
(規模 平面形 方向) 東西・南北とも5.2m、面積25.00m²の正方形の平面形を呈する。

カマド方向軸はN-89°-Eとなる。

(堆積土) 1層の黒褐色土が主体で、壁寄りに極暗色土の2層と黒色土とシルト混合の3層がみられ、自然の堆積状況を示す。



第15—2图 6号(De06)竖穴住居跡出土遺物



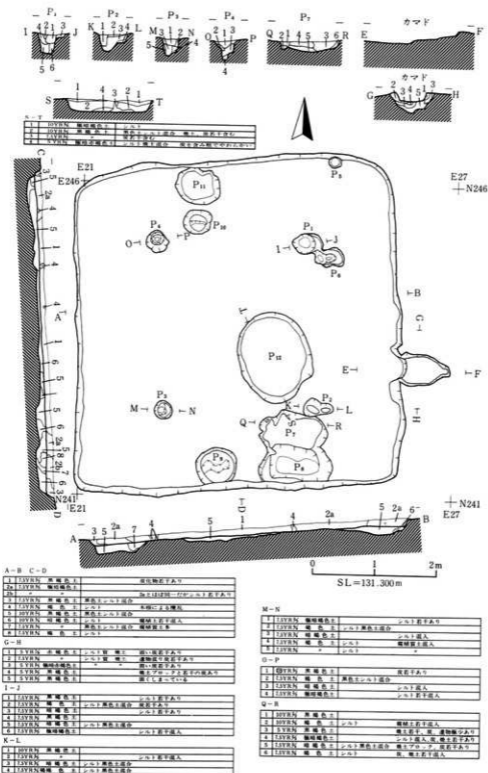
第15—3図 6号(De06)竪穴住居跡出土遺物

(壁) 壁は外傾する立ち上がりで、検出面までの高さは15cmを計り比較的浅く、過去に削平があったものかとも推察される。

(床) 一部で地山シルトを直接床面とするも、大半は掘り方をもって、黒色土とシルトの混合土を用いて構築した平坦な床面である。掘り方は一般に壁ぎわで深く10cm~20cm、他は5cm程度である。

(柱穴) P_1 ~ P_4 が柱穴である。竪穴住居跡の各対角線上ほぼに乗り、東西南北の各壁上端から内へ1.20m~1.45mの範囲を計る交点に位置し、相互に対となり P_1 ~ P_2 ・ P_3 ~ P_4 間は2.7m、 P_2 ~ P_3 ・ P_1 ~ P_4 間は各2.4mある。柱穴規模は、径と深さを順次示すと、 P_1 35cm×50cm、30cm P_2 30cm×45cm、25cm P_3 30cm×30cm、25cm P_4 35cm×35cm、30cmで、 P_2 と P_3 では柱痕も認めた。なお、 P_1 に接して深さ19cmほどの P_4 があり、 P_1 との先後関係は不明である。また、 P_2 の平面形のだるま状も、もう1ピット隣接した可能性もあり、 P_1 ・ P_2 柱穴とも補強的支柱があったかとも想定されるが断定できない。

(周溝) 認められない。



第16-1 図 7号(Dh71)竪穴住居跡

(カマド) 東壁の南半中央近くに位置し、燃焼部は壁外に構築されていて、間口45cm、奥行70cmあり、火床は床面レベルより若干上がり奥へやや傾斜し高くなる。なお燃焼部は掘り方をもち、黒褐色土を埋土に上面と側壁にシルトを貼って構築している。いわゆる煙道と煙出しは認められないが、本来的か削平による消滅か不明である。ただ燃焼部奥壁先端につまみ状の張り出しがあり、これが煙出しの機能をもつ部分と推察もできる。

(その他の施設) P₇~P₁₂をもつ。それぞれの規模は、径、深さと順次以下ようになる。
P₇ 60cm×110cm、15cm P₈ 60cm×120cm、23cm P₉ 55cm×65cm、14cm P₁₀ 40cm×45cm、21cm P₁₁ 60cm×70cm、12cm P₁₂ 120cm×145cm、20cmとなる。

P₇・P₈は不整な平面形でほぼ同規模のピットで重複するが、先後関係を確認する記録に欠く、カマドに近く貯蔵穴の機能も考えられる。P₉・P₁₁がほぼ同規模で、それぞれ南北の壁に接し相対する位置に所在している。P₁₀は柱穴状を呈する。P₁₂は大型で、堆積土にシルト、焼土、炭が混入しており上面にシルトを貼っていることから、生活時のある時期に埋めたものと推察できる。

何れのピットについても、機能を明確にし得ないが貯蔵穴様である。なお、P₉は竪穴住居跡堆積土上からの掘りこみで新しいものである。

出土遺物 (第16-2・3図 第7表)

環形土器5点(台付坏1)、変形土器3点、鉄製品1点、石類3点、計12点の実測。

A類の3点はいわゆるくすべ色をした硬質の である。糸切によるものが2点あり、そのうちの1点(No3)は拓影図に示した如くに底部面の外周にも回転ヘラ削りが施されている。

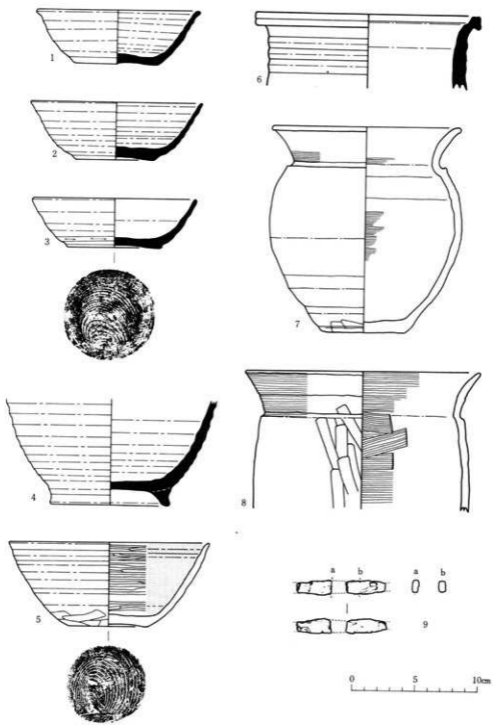
No5はC類。内面のヘラミガキはロクロの回転力を利用したものと思われ、単位が直線的で細かい。

変形土器はNo6・7・8の3点。No6は須恵器の破片。肩部段を持たず、内外面に自然釉がかかっている。断面には赤褐色の胎土がサンドイッチ状に入っており、石英細粒も多く混じる。No7・8は非ロクロ成形の土師器。両者共肩部に明瞭な段を有している。また二次火熱のためか、赤褐色~黒褐色を呈す。

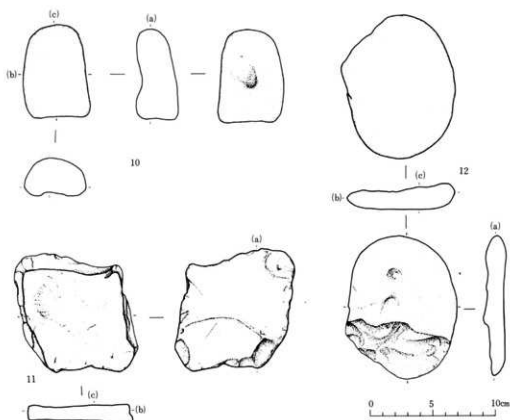
No9-1・2は床面出土の鉄製品。同一個体と思われる、腐蝕は激しいが刀子状のものである。他にもう1点器種不明の鉄製品があるが、特に図示しない。

掲示した3点の石は、床面から出土した摺石状のものと偏平な形をしたものである。特に加工をしたものではなく、用途不明である。

破片としては、床面上・カマド・焼土内等より球胴を呈する甕の体・底部片、A類のヘラ切底部片4点、B類ヘラ切底部片1点、須恵器甕体部片等がみられる。



第16—2图 7号(Dh71)竖穴住居跡出土遺物



第16-3図 7号(Dh71)竪穴住居跡出土遺物

第7-1表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)				A/B	A_d	外傾角度(°)	備 考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (c)	器高 (d)				
1	24	A 類	ヘラ切	無調整	/	12.8	6.6	4.4	1.9	2.9	54.5	完形品。(床面)	
2	25	A 類	回転糸切	無調整	/	13.7	6.2	4.6	2.2	3.0	51	(床面)	
3	—	A 類	回転糸切	回転ヘラ削り	体部下端-底部	(13.0)	7.4	3.9	1.8	3.3	54.5	底部の調整は外周のみ。底部外面に曇書。(床面)	
4	—	台付環	ヘラ切	/	/	—	(口径) (9.4)	(器高) (1.3)	/	/	/	B類の色調(7.5YR5/1に近い橙)。(床面)	
5	—	C 類	回転糸切	手持ヘラ削り	体部下端-底部	(16.0)	6.4	6.8	2.5	2.4	54.5	底部調整は外周のみ。(床面)	

第7-2表 変形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
			口径	底径	器高	最大口径	口縁部	体部	口縁部	体部	
6	—	頂患器	18.0	—	—	—	ロクロ成形	ロクロ成形	ロクロ成形	ロクロ成形	反転復元。(床面)
7	—	土師器	15.1	6.8	16.5	15.4	ヨコナデ	下縁にナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	肩部有段。(床面)
8	—	土師器	18.9	—	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	肩部有段。(床面)

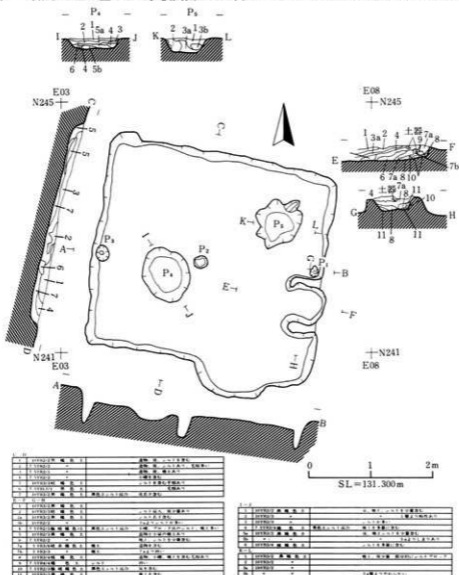
8号(Di53) 竪穴住居跡 (第17図 第8表 写真図版11・54)

(重複 改築) 認められない

(規模 平面形 方向) 東西3.7m、南北3.3m、面積10.85m²で、若干東西に長い方形であるが、南壁東半で外への張り出し部がある。カマド方向軸はN-105°-Eである。

(堆積土) 若干攪乱によって不整な堆積もみられるが、概ね1層〜4層の黒褐色土と5層と7層の暗褐色土と黒褐色土になり、前者は壁ぎわを除く全域に及び、後者は壁ぎわに流れこむ床面上を覆う状況を示す。なお、全般に遺物を包含している。

(壁) 外傾する立ち上がりで、検出面までの高さは20cmである。南壁の東半は弧状に外へ張



第17-1図 8号(Di53)竪穴住居跡

り出しをみる。

(床) 全面に掘り方をもち、黒色土とシルトで床面を構築しほぼ平坦である。構築土下の地山面は凹凸が顕著で、構築土の厚さも一様でないが約5cm～10cmとなる。

(柱穴) ほぼ東西の中軸線上に乗ってP₁—P₂—P₃で1.85m—1.60mを計る。各ピットの径と深さは、P₁ 15cm×18cm、28cm P₂ 20cm×25cm、35cm P₃ 23cm×25cm、38cmを計る。

(周構) 認められない。

(カマド) 東壁南半に位置し、袖はシルトを用いて壁にとりつけ構築している。燃焼部の間口は50cm、奥行60cmで火床は地山面をそのまま利用しており、煙道は認められない。

(その他の施設) P₄とP₅がある。それぞれの規模は、径、深さと順次、P₄は75cm×90cm、15cm P₅ 70cm×80cm、20cmで、堆積土に炭、焼土、シルトを含むが、特にP₄では顕著である。機能を明確づけるものはないが貯蔵穴様である。

出土遺物 (第17-2・3・4図 第8表)

環形土器22点(台付環1)、台付皿1点、須恵器蓋3点、甕形土器4点、鉄製品3点、磁石2点、その他石製品8点の実測である。

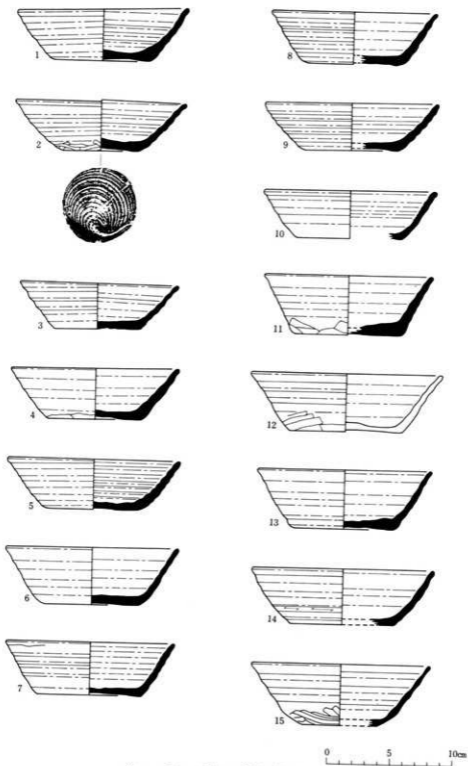
環はA類が圧倒的に多く、B・C類は合わせてNo12・16・26の3点だけである。ただし、No12は色調的にみてB類に分類したものの、形態・成形技法的にみればNo11のA類と分類したものに酷似している。本来的にはA類であるものが、焼き損じ或るいは二次火熱等に依って、結果的にB類的なものに変化したものとみても遜色がない。また、No18は器形的には異色のものである。環というよりは猪口といった方が適切であろうが、分類上では環の範疇に含めている。No23は底部に墨書を有している。肉眼では「大」₁としか判読出来ないが、赤外線照射の結果「大屋」という墨書があることが判明した。恐らくは「大屋郷」という地名に関わるものと推察されている。No19の台付皿は、口縁部のあり方から蓋として使用されたものであろう。

甕形土器は、No27・28(土師器)、29・30(須恵器)の4点。No27は非クロコ成形。No28はクロコ成形。後者は反転復元に依るものであり、内面に赤色塗彩様の痕跡が一部にみられる。

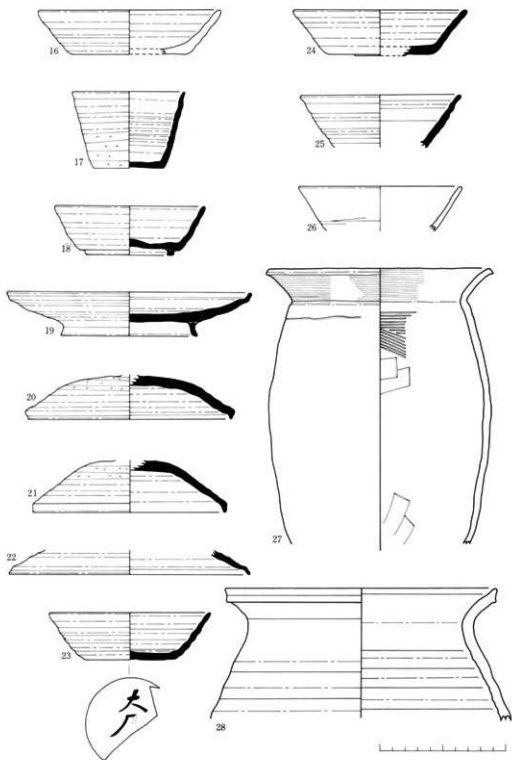
No29・30は何れも反転復元に依る。No29は石英細粒を多量に含み、内面には自然釉がかかっている。No30は一見して酸化焙焼成の如き印象を受けるが、口唇部縁が灰褐色を呈しており、硬質なことから須恵器として分類した。

鉄製品は、図示した3点の他に角釘状のものと刀子状のもの各1点、合計5点出土している。詳細については一覧表を参照して頂きたい。

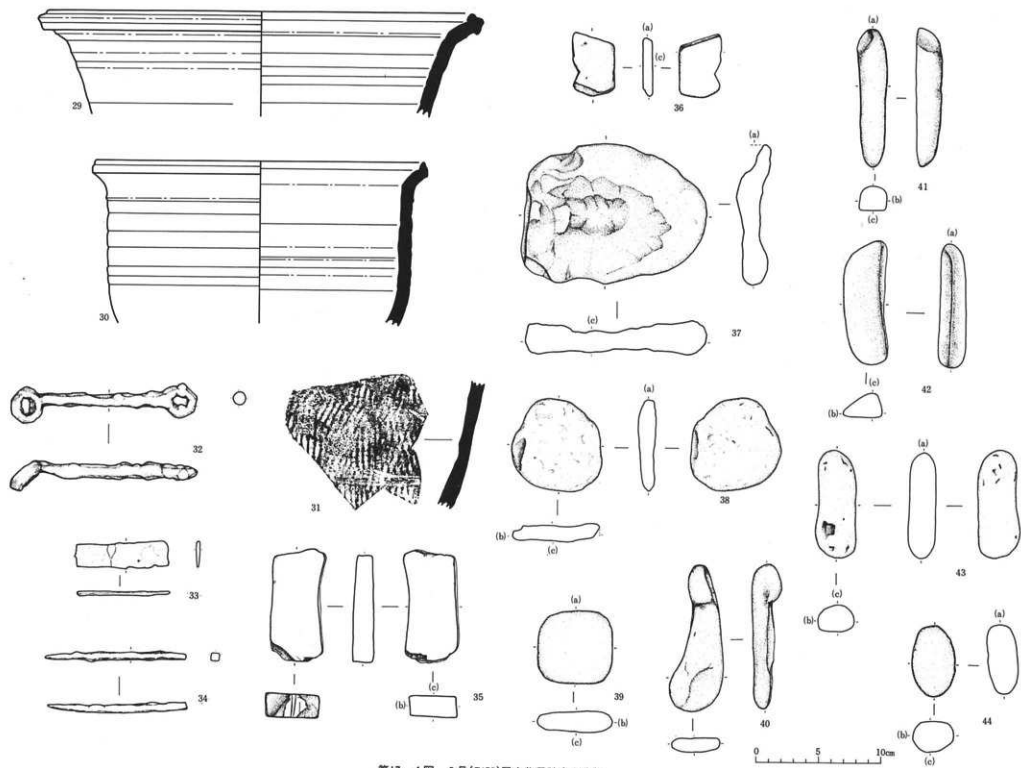
磁石はNo35・36の2点。No35は灰白～淡黄色を呈し、斜長石流紋岩を素材としている。カマド付近の出土である。使用痕は5面に観察される。No36は灰白色、素材は石質細粒凝灰岩。堆積土内からの出土である。



第17—2图 8号(Di53)竖穴住居跡出土遺物



第17-3图 8号(Di53)竖穴住居跡出土遺物



第17—4 图 8号(D53)竖穴住居跡出土遺物

No.37は凹石である。床面からの出土。偏平な石の一面を打ち砕く形で作ったものである。凹面は中央部から周辺に拡がるが、表面は荒く凹凸があり、短期間の使用であることを物語る。石英安山岩を素材としている。

第8-1表 坏形土器 一覧

実測図番号	写真番号	種別	切磨し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			$\frac{a}{b}$	$\frac{a}{d}$	外傾角度(°)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	26	A 類	ヘラ切	無調整	/	13.6	7.6	4.4	1.8	3.1	56.5	(カマド内)
2		A 類	回転糸切	手持ヘラ磨り	体部下端 ~底部	13.6	6.0	4.0	2.3	3.4	45.5	底部調整一部のみ。口縁歪曲。(床面)
3	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	12.6	6.8	3.8	1.9	3.3	49	(床面)
4	27	A 類	ヘラ切	手持ヘラ磨り	体部下端	13.3	7.4	4.1	1.8	3.2	55	(カマド内+カマド右側盛土)
5	28	A 類	ヘラ切	無調整	/	13.6	7.6	4.0	1.8	3.4	53	底部非類の色調(5 YR5にふい橙)(床面)
6	29	A 類	調整のため不明	手持ヘラ磨り	底 部	(13.8)	7.6	4.6	1.8	3.0	56.5	(床面)
7	30	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.4)	8.4	4.3	1.6	3.1	60	(床面)
8	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.2)	(7.6)	4.2	1.7	3.1	56	(床面)
9	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.8)	(7.4)	3.8	1.9	3.6	50.5	(床面)
10	—	A 類	底部残存小	—	—	(13.6)	(8.4)	3.8	1.6	3.6	55	(床面)
11	—	A 類	調整のため不明	手持ヘラ磨り	体部下端 ~底部	(13.2)	8.4	4.8	1.6	2.8	63	(床面)
12	31	B 類	調整のため不明	手持ヘラ磨り	体部下端 ~底部	(15.2)	9.0	4.7	1.7	3.2	56.5	(カマド右側盛土)
13	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.8)	8.0	-4.7	1.7	2.9	58.5	体部に墨書あり。(床面+増積土)
14	—	A 類	底部残存小	回転ヘラ磨り	体部下端	(14.4)	(8.2)	4.5	1.8	3.2	55.5	(床面+増積土)
15	—	A 類	底部残存小	手持ヘラ磨り	体部下端	(14.2)	(6.0)	4.9	2.4	2.9	49.5	(床面直上)
16	—	B 類	ヘラ切	磨 滅 顕 著	/	(14.4)	(9.2)	3.5	1.6	4.1	53	(床面直上)
17	32	A 類	ヘラ切	回転ヘラ磨り	体部下端 ~底部	8.9	5.6	6.1	1.6	1.5	75.5	(カマド右側盛土)
18	33	土付坏	ヘラ切	/	/	(11.8)	8.0 (破損) 6.8	8.0 (破損) 6.4	/	/	/	(カマド右側盛土)
19	—	土付皿	ヘラ切	/	/	(19.4)	10.8 (破損) 10.8	3.5 (破損) 1.1	/	/	/	(床面直上)
20	—	皿	調整のため不明	回転ヘラ磨り	体 上 部	(16.2)	—	—	/	/	/	(床面)
21	—	皿	調整のため不明	回転ヘラ磨り	体 上 部	(15.4)	—	—	/	/	/	口縁と内面下端に自然釉。(カマド内)
22	—	皿	—	/	/	(19.4)	—	—	/	/	/	外面下端(口縁付近)に自然釉。(カマド内)
23	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.8)	7.2	3.8	1.9	3.6	53	底部外面に墨書有。(増積土)
24	—	A 類	ヘラ切	無調整	/	(13.8)	(8.6)	3.6	1.6	3.8	53	
25	—	A 類	底部欠失	—	—	(12.8)	—	—	—	—	—	(床面直上)
26	—	C 類	底部欠失	—	—	(13.2)	—	—	—	—	—	(床面)

第8-2表 変形土器一覽

実測区番号	写真番号	種別	量 (cm)				外面調整		内面調整		備考
			口径	底径	器高	最大脚	口縁部	体部	口縁部	体部	
27	—	土師器	18.2	—	—	17.8	ヨコナテ	ヘラケズリ	ヨコナテ	刷毛目+ヘラケズリ	硬質(カマド内出土)
28	—	土師器	(21.8)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	煤付き。赤色塗彩?
29	—	土師器	(36.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	自然釉。(Q, 堆積土)
30	—	須恵器	(27.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ+刷毛目+ケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	(堆積土)
31	—	須恵器	拓製区。(床面)								

第8-3表 鉄製品一覽

実測区番号	写真番号	種別	残存部位	遺存状態	量				断面形	備考
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)		
32	34	馬具	突形品	腐蝕顕著	153.0	6.70~10.0	6.90~10.50	63.30	円形	棒状の両端にリングが付く。(床面)
33	35	刀子	刃部片	良好	73.80	20.2	3.0	7.70	薄い楔形	(床面)
34	36	角釘	頭部欠失	良好	112.90	5.80	5.30	8.0	方形	先端部やや曲がる。(床面)
—	—	角釘	頭部欠失・2破片	良好	(103, 50)	—	—	計 7.80	方形	同一個体であろう。(床面)
—	37	刀子	刃部片	錆付き著し	72.90	12.50	—	14.80	楔形	(カマド右側盛土内)

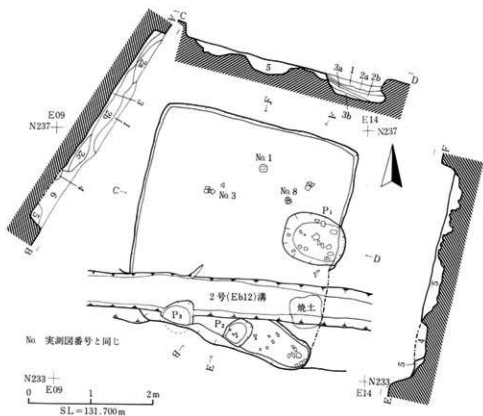
なお、他に円形・方形・棒状等の石が出土している。円形・方形のものについては特に加工された様子もないが、多様なあり方を鑑み、図示したものである。従って用途等については不明である。棒状のものについては足方様石製品として取扱うが、これについては P「2」、足方様石製品について」を参照されたい。

その他土器類の破片としては、赤色塗彩と思われる痕跡を残す球胴片が堆積土と床面から出土している。堆積土からのものは、底径8.8cmで木葉痕がみられる。また、坏はA類のヘラ切底部破片が8点ほど堆積土を中心として出土している。B類は赤褐色軟質の体部片が若干。

9号 (Ea59) 竪穴住居跡 (第18図 第9表 写真図版12・55)

(重複 改築) 2号 (Eb12) 溝によって南壁近くを東西に切られていて床面まで達する。
(規模 平面形 方向) 東西3.4m、南北3.6m、面積10.71m²あり、ほぼ正方形に近い平面をしている。推定カマド方向軸はN-105°-Eである。

(堆積土) 基本的に3層に分けられる。すなわち、1層の黒色土に褐色土ブロックが多量と焼土ブロックと炭を少量に混入し人的に動かされた層の可能性もある。次は、黒褐色シルト質土で、全域に分布する住居跡廃絶後の自然堆積2層で、廃棄されたとと思われる土器が多く含まれる。更に、黒色シルト質土で、住居跡廃絶後の初期的な堆積3層で床面直上にある。



A-B		
1	10YR/1 黒色土	シルト 焼土 アロップ状、セトモノ混入
2a	10YR/1 黒色土	シルト質土 シルト粒状に混入
2b	*	シルト質土 2a層よりしりぞりなし
2c	10YR/1 黒色土	シルト質土 遺物多し
3	10YR/1/1 *	シルト質土 腐植質土混入しりぞりなし
4	10YR/1 黒色土	シルト質土 腐植質土と粒状のシルト混入
5	10YR/1 *	シルト質土 アロップ状のシルトあり
6	10YR/1 黒色土	シルト質土 腐植質土混入 2号溝埋土

C-D E-F		
1	10YR/1/1 黒色土	シルト質土 遺物あり
2a	10YR/1 黒色土	シルト質土 シルトアロップあり
2b	*	シルト質土 2aシルトアロップ多し
3a	10YR/1 黒色土	シルト質土 焼土粒、炭化物多し 焼土
3b	10YR/1 黒色土	シルト質土 3aより焼土粒多し
4	黒褐色シルト質土	褐色シルトのアロップ多く混入 2号溝埋土
5	黒色腐植質土	褐色シルトの残片まで、柱状体構築土

第18-1 図 9号(Ea59)竪穴住居跡

(壁) 床面からの立ち上がりは垂直に近く、検出面までの壁高は約25cmである。

(床) 比較的平坦で固くしまった床面で、全体が掘り方技法によって、黒色土とシルトの混合土を用いて床を構築している。

(柱穴) 確認できない

(周溝) 確認できない

(カマド) 床面の南東部に約50cm×50cmの焼土があり、東壁南寄りにあったカマドの燃焼部の一部かと推察される。カマドは2号溝によって破壊され構造は不明であるが、焼土周辺には土器片が多数認められた。

(その他の施設) 住居跡内にP₁~P₃のピットを認めた。南壁西寄りのP₃は性格不明である。P₁は、1m×80cm、深さ30cmの楕円形で、東端は壁下にもぐって焼土を堆積土に多く混入し、瓦片が多くある。P₂は1.4m×65cm、深さ10cmの長楕円で瓦の破片が多く含まれる。P₁・P₂は貯蔵穴の可能性がある。

出土遺物 (第18-2・3図 第9表)

環形土器10点(台付環1)、変形土器4点、鉄製品3点、計17点の実測。

環はB類が多く、A・C類は各1点の出土。7点のB類は体部の起上りの様子から、A類的なものとC類的なものの2タイプがある。No4は底部面に墨書があり、赤外線照射の結果、「上総^野」と判読される。図上の点描部分は肉眼で識別できる墨書痕らしき部分を表わしたものであるが、はっきりしない部分が多い。なお、B類はにぶい橙色・明赤褐色・赤褐色等を呈し、硬質・軟質の両様がある。

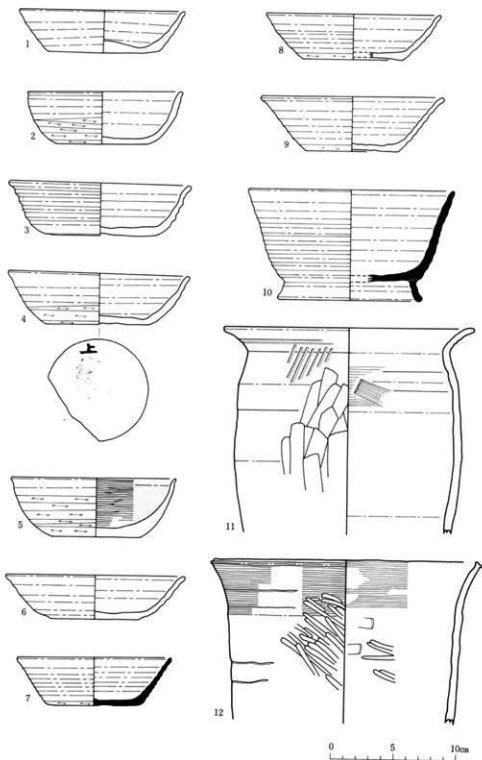
変はロクロ成形のNo11・13、非ロクロ成形のNo12・14の4点。ロクロ成形の2点は何れも口

第9-1表 環形土器一覽

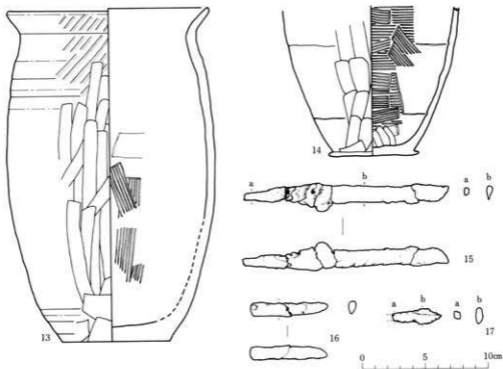
実測 区番号	写真 番号	種 別	切 離し	調 整 技 法	調 整 部 位	法 量 (cm)			h _c b	h _d d	外 傾 角 (度)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	38	B 類	ヘラ切	無調整		13.2	9.0	3.5	1.5	3.8	59	内面に少量のカーボン付着。(堆積土)
2	39	B 類	ヘラ切	回転ヘラ削り	体部下端 -底部	12.2	7.4	4.3	1.6	2.8	58	(底面)
3	40	B 類	ヘラ切	無調整		14.4	9.0	4.3	1.6	3.3	57	硬質でA類的。(堆積土)
4	-	B 類	調整のため不明	回転・手持 ヘラ削り	体部下端 -底部	14.4	8.2	4.3	1.8	3.3	52	回転ヘラ削り後、底部のみ手持ヘラ削り。底部外面に墨書。(堆積土)
5	41	C 類	調整のため不明	回転ヘラ削り	体中部 -底部	13.2	7.2	4.7	1.8	2.8	59	(P ₁)
6	42	B 類	調整のため不明	手持ヘラ削り	底 部	(14.2)	7.0	3.6	2.0	3.9	44	内面に少量のカーボン付着。(燧石部)
7	-	A 類	ヘラ切	回転ヘラ削り	体部下端 -底部	(12.4)	7.4	3.9	1.7	3.2	57	(堆積土)
8	-	B 類	調整のため不明	回転ヘラ削り	体部下端 -底部	14.0	(8.0)	3.6	1.8	3.9	50	硬質でA類的。(堆積土)
9	-	B 類	調整のため不明	回転・手持 ヘラ削り	体部下端 -底部	(14.4)	(7.4)	4.4	1.9	3.3	51.5	体部下端が回転、底部が手持ヘラ削り。(堆積土)
10	-	台付環	不明	-	-	(16.4)	11.4 (11.3)	11.4 (11.6)				(堆積土)

第9-2表 変形土器一覽

実測 区番号	写真 番号	種 別	法 量 (cm)				外 面 調 整		内 面 調 整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大傾角	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
11	-	土師器	(20.1)	-	-	(18.1)	ロクロナデ + 叩目	ヘラナズリ	ロクロナデ	ヘラナデ	(貯蔵穴内)
12	-	土師器	(21.8)	-	-	-	ヨコナデ	ヘラナズリ	ロクロナデ	ヘラナデ	(底面)
13	-	土師器	16.4	8.7	26.6	16.8	ロクロナデ + 叩目	ヘラナズリ	ロクロナデ	ヘラナデ + 刷毛目	(貯蔵穴内)
14	-	土師器	-	7.3	-	-	-	ヘラナズリ	-	刷毛目 +ヘラナデ	(貯蔵穴内)



第18—2图 9号(Ea59)竖穴住居跡出土遺物



第18-3図 9号(Ea59)竪穴住居跡出土遺物

縁から肩部にかけて叩目をつけ、体部にはヘラ削りを施す。赤橙色部分が多く、特にNo13は塗彩しているのではないかとも思われる部分がある。非ロクロ成形のNo12はミガキ様のヘラナゲがみられる。

鉄製品は4点出土しているが、図示したのはNo15・16・17の3点。刀子・鉄錐等と思われる。

第9-3表 鉄製品一覽

写真 図番 号	種 別	残 存 部 位	遺 存 状 態	法 量				断 面 形 影	備 考
				長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
15	43	刀 子	ほぼ完整品 鍔の割に残り 良	161.50	a---6.0 b---12.50	a---3.50 b---2.50	21.90	a---長方形 b---楔形	基部や湾曲。(増積土)
16	—	刀 子	刃部片 良	61.50	10.0	5.0	5.88	先端のある 楔形	(増積土)
17	47	鉄 錐	錐身一基の 一部 鍔の割に残り 良	38.0	a---6.0 b---13.0	a---5.10 b---6.50	4.30	a---尖形 b---楔形	錐身長---17.2 (20.0)mm (増積土)
—	—	刀 子	刃一基部片 やや不良	49.0	—	—	2.10	楔形・長方形	(増積土)

(法量中の a、b---は実測面に付した点の計測値を表す。以下の表についても同様とする。)

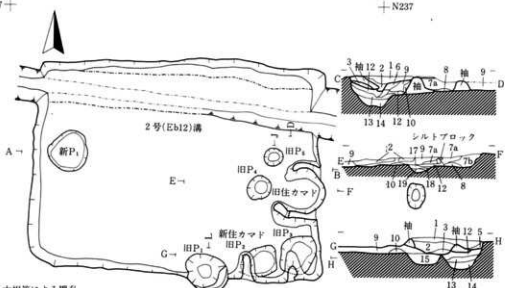
10号-1 (Eb03 旧) 竪穴住居跡 (第19図 第10表 写真図版12・55・56)

(重複 改築) 2号溝によって北壁寄りを切られ、10号-2 竪穴住居跡との重複がある。

(規模 平面形 方向) 東西4.7m、南北3.5mの14.52㎡で東西に長い長方形を呈する。カマ

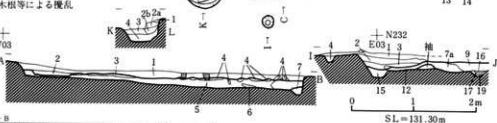
W03
N237

E03
N237



● 木根等による擾乱

N232
W03



A-B	
1	IVR 弱褐色土 灰、焼土、褐色シルト混入
2	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か 新P ₁ 埋土
3	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か 新P ₁ 埋土、小豆丸層下部分に
4	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か 焼付面に焼土混入、灰、砂状シルトあり
5	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か 焼付面に焼土混入、灰、砂状シルトあり
6	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か 焼付面に焼土混入、灰、砂状シルトあり
7	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か 黄色土混り内れている
K-L	
1	IVR 弱褐色土 小豆丸のシルト混入、灰混入あり
2a	IVR *
2b	IVR *
3	IVR 弱褐色土 灰、焼土、褐色シルト混入
4	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か 焼付面に焼土混入、灰、砂状シルトあり
5	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か 焼付面に焼土混入、灰、砂状シルトあり
C-D	
1	IVR 弱褐色土 灰、焼土、褐色シルト混入
2	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か 焼付面に焼土混入、灰、砂状シルトあり
3	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か 焼付面に焼土混入、灰、砂状シルトあり
4	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か 焼付面に焼土混入、灰、砂状シルトあり

5	IVR 弱褐色土 黄色土、シルト混入	灰混入、焼土混入あり
6	IVR 弱褐色土 黄色土、褐色土の透か	灰混入、焼土、灰混入、一部灰あり
7a	IVR *	焼土、小豆丸混入、下部細粒あり
7b	IVR *	焼土、小豆丸混入、下部細粒あり
8	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か	焼付面に焼土混入、灰、砂状シルトあり
9	A-目セクションと壁に相当する	
10	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か	灰混入、焼土混入あり
11	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か	焼土混入あり
12	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か	灰混入、焼土混入あり
13	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か	灰混入、焼土混入あり
14	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か	灰混入、焼土混入あり
15	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か	灰混入、焼土混入あり
16	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か	灰混入、焼土混入あり
17	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か	灰混入、焼土混入あり
18	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か	灰混入、焼土混入あり
19	IVR 弱褐色土 シロ褐色土の透か	灰混入、焼土混入あり

第19-1 図 10号-2 (Ebo 3 新) 竪穴住居跡
10号-1 (Ebo 3 旧) 竪穴住居跡

D方向軸はN-91°-Eである。

(堆積土) 大別すると3層で構成され、セクション図に示す1層の暗褐色土、4層の黄褐色シルト、5層の暗褐色土からなる。4層の黄褐色シルトは、1層と5層間にはほぼ水平に入り、その西延長上に3層の黒色土が広がる。3・4層は10号-2 竪穴住居跡の床面となる。

(壁) 床面より12cm~21cmの壁高がある。南壁中央や東寄りに半円状の張り出し部分があるが、本住居跡に伴うものか、それ以前のものである。

(床) 部分的に掘り込んでから固めたと思われる部分もあるが、直接地山を床面とし、若干の凹凸がみられる。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁の中央やや南寄りに位置し、壁外に煙出しと推察される小穴をもつが煙道は確認されない。燃焼部は、間口約50cm、奥行約60cm、検出面までの高さ15cmであり、両袖は黒色土とシルトによって構築されている。

(その他の施設) $P_1 \sim P_3$ のピットがある。 P_1 は10号—2 堅穴住居跡の壁痕跡に切られるので本住居跡もしくは以前のもとのみられ、径約60cm×60cm、深さ19cmある。 P_2 は径約58cm×45cm、深さ19cmで壘片を包含する。 P_3 は55cm×65cm、深さ20cmで坏片を包含する。 $P_2 \cdot P_3$ は10号—2 堅穴住居跡のカマド袖と燃焼部下に認められ、本住居跡のカマド位置に近く、遺物包含等から貯蔵穴の可能性がある。他に $P_4 \cdot P_5$ の小穴がある。

出土遺物 (第19—2 図 第10—1・2・3 表)

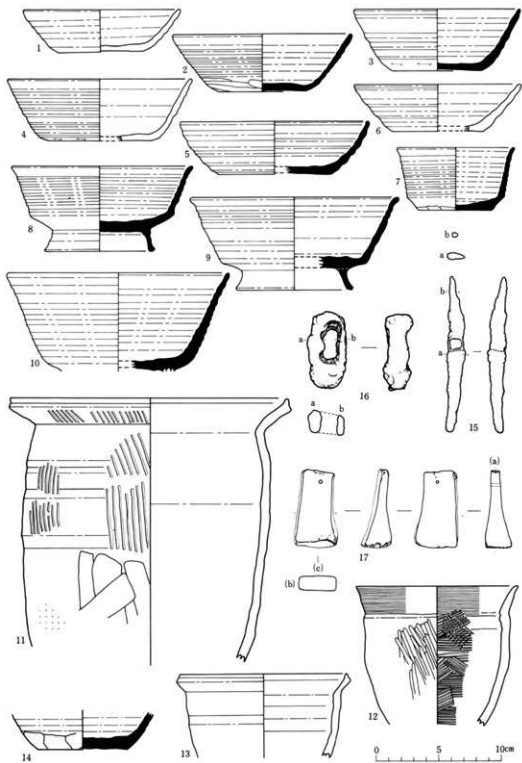
坏形土器10点(台付坏3)、変形土器4点、鉄製品2点、磁石1点、計17点の実測。

坏形土器はA類4点、B類3点であるが、A類の中でNo7を除き全体がいわゆるくすべ色を呈するものはない。口縁部周辺が須恵器的であるものの、体部は、にぶい橙色或るいは赤褐色を呈している。また、B類としたものの中にもかなり硬質な例があるなど、本来的なA類と「結果として生じたB類」との関連が想起される。

台付坏3点のうち、No9はその一部を胎土分析試料としてサンプリングしている。分析結果

第10—1表 坏形土器一覽

実測区番号	写真番号	種類	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a_c/b	a_d/b	外傾角(度)	備 考	
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)					
1	45	B 類	ヘラ切	無 調 整	/	12.5	6.8	3.5	1.8	3.6	47.5	(旧カマド前+東カマド前+東カマド左袖前+旧床面)	
2	46	A 類	回転車切	手持ヘラ削り	体部下端	(14.4)	7.0	4.6	2.1	3.1	51	(旧P ₃ +西床面)	
3	47	A 類	調整のため不明	回転ヘラ削り	体部下端 —底部	(13.2)	7.2	4.9	1.8	2.7	59	内外面に少量のカーボン付着。 (床面+東カマド左袖前)	
4	—	B 類	ヘラ切	回転ヘラ削り	体部下端	(14.6)	(8.2)	5.0	1.8	2.9	57	底部の調整不明。口縁内面に少量のカーボン。 (旧P ₃ +床面+床面上)	
5	—	A 類	ヘラ切	無 調 整	/	(15.0)	(9.0)	4.2	1.7	3.6	54.5	一部B類的。(床面)	
6	—	B 類	ヘラ切	無 調 整	/	(13.2)	(7.2)	3.8	1.8	1.6	51.5	(増積土)	
7	48	A 類	調整のため不明	手持ヘラ削り	体部下端 —底部	9.4	5.8	5.0	1.3	1.9	70	(東カマド左旧P ₃)	
8	49	台付坏	ヘラ切	回転ヘラ削り	体部下端 —底部	14.8	8.6 (脚径)	7.5 (器高)	/	/	/	/	(増積土)
9	—	台付坏	ヘラ切	回転ヘラ削り	体部下端 —底部	(16.6)	(8.6) (9.2)	7.4 1.6	/	/	/	/	体部下端は削りの後クロコナダ。 (旧P ₃ +高増積土) 胎土分析試料
10	—	台付坏	ヘラ切	回転ヘラ削り	底 部	(17.6)	(9.0) —	—	/	/	/	/	(旧P ₃ +旧床面+東カマド焼土中)



第19—2图 10号—1 (Eb03 旧) 竖穴住居跡出土遺物

第10-2表 変形土器一覽

写真 番号	種別	法 量 (cm)				外 面 調 整		内 面 調 整		備 考
		口径	底径	器高	最大径	口縁部	体部	口縁部	体部	
11	土師器	22.8	—	—	19.8	ロクロナデ + ヘラケズリ	叩目 + ヘラケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	カーボン付着。(東カマド左軸)
12	土師器	(13.0)	—	—	(11.7)	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヨコナデ	刷毛目	反転復元。カーボン付着。(床面)
13	土師器	(14.0)	—	—	—	ロクロ成形	ロクロ成形	ロクロ成形	ロクロ成形	反転復元。巻き上げ成形。(ピット内)
14	須恵器	—	7.2	—	—	—	下 端 ヘラケズリ	—	下 端 ロクロナデ	底部外面ヘラケズリ。(床面)

第10-3表 鉄 製 品 一 覧

写真 番号	種別	残存 部位	遺存 状態	法 量				断面 形	備 考
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
15	刀子	完形品	比較的良好	123.0	a…14.0 b…4.50	a…5.30 b…3.50	12.70	a…埋形 b…長方形	やや湾曲。(床面)
16	鋼鉄製品	完形品	錆の付着無し	条件—40.0 短径—30.0	16.0	5.0	40.90	長方形	(床面)
—	釘状破片	破片	炭酸、ゼロ ボロ	—	—	—	5.80	方形	(床面)

は後掲する資料を参照されたい。

変形土器は大型と小型の二種がある。須恵器の底部片は内面の仕上げ方法や器肉の厚さから小型の変形土器と思われる。

鉄製品は3点出土しているが、図示したのはNo15・16の2点である。

磁石はNo17の1点。素材は斜長石流紋岩。床面出土で有孔のものである。

10号—2 (Eb03 新) 竪穴住居跡 (第19図 第10表 写真図版12・56)

(重複 改築) 2号溝によって北壁寄りを切られ。旧期の10号—1 竪穴住居跡と重複があり、旧期の生活面がある程度埋った後、ほぼ同じ平面を利用する中で新时期カマドを構築したのが本住居跡である。

(規模 平面 方向) 東西4.7m、南北3.5mの14.52㎡と、東西に長い長方形であることは10号—1 竪穴住居跡と同様である。カマド方向はN—189°—Eである。

(堆積土) 1層の暗褐色土が主体で、その下の焼土混入の黒色土と黄褐色シルトの3・4層が本住居跡の床面であり、更に、5層の暗褐色土は、カマド等セクションの9層に相当し、本住居跡のカマドはその上に構築されている。

(壁) 壁高は約10cmである。

(床) 検出面より10cmほど下に、暗褐色土を主体とする床面があり、10号—1住居跡がある程度埋没した時点でその状態を利用したものと推察される。ただし、住居跡の東半の一部では焼土混りの黄褐色シルトを、西半の一部では焼土混りの黒色土を敷いたかと推察する広がりがある。

ある。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 南壁東端に位置し、燃焼部は、間口約50cm、奥行約50cm検出面までの高さ約20cmであり、両袖はシルトと黒褐色土を用い構築し、特に芯材等は認められない。煙道は明瞭に確認できず、壁から約40cm南に約20cmの径をもち焼土を上部に乗せた小ピットがあり、煙出しの可能性もある。

(その他の施設) 床面の西壁寄りのほぼ中央に貯蔵穴様ピットがある。

出土遺物 (第19-3図 第10-4・5・6表)

第10-4表 坏形土器一覽

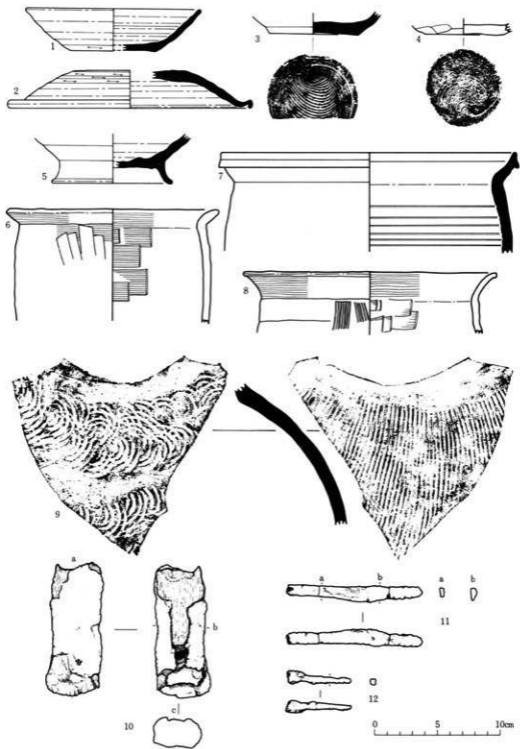
実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			R/b	R/d	外傾角度(°)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	部 高 (d)				
1	—	A 類	調整のため不明	回転へう削り	体部下端～底部	(14.0)	(6.6)	3.4	2.1	4.1	43	(増積土)
2	—	蓋	調整のため不明	回転へう削り	体 上 部	(19.4)	(7.7)	—	/	/	/	フマシ欠失。(増積土)
3	—	A 類	回転糸切	回転へう削り	体部下端～底部	—	7.2	—	—	—	—	
4	—	C 類	回転糸切	手持へう削り	体 部 下 部	—	6.2	—	—	—	—	
5	—	台付杯	へう切	/	/	—	(口径) 9.6 (底径) 9.6	—	/	/	/	(増積土)

第10-5表 甕形土器一覽

実測図番号	写真番号	種 別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大口径	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
6	—	土師器	(17.1)	—	—	—	ヨコナデ	ハラケズリ	ヨコナデ	ハラナデ	(南カマド中)
7	—	須恵器	(20.3)	—	—	—	ロクロ成形	ロクロ成形	ロクロ成形	カキ目	反転還元白褐色を呈すが比較的硬質。(カマド上)
8	—	土師器	(24.0)	—	—	—	ヨコナデ	刷毛目	ヨコナデ	ハラナデ	反転還元。非ロクロ。(増積土+カマド付近)
9	—	須恵器	拓形図。外面縦位甲目。内面背面波文。(カマド右袖部)								

第10-6表 鉄 製 品 一 覧

実測図番号	写真番号	種 別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形状	備 考
					長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
10	53	鉄 斧	柄 部 分	やや不良	101.0	38.0	22.0	110.0	尖味のある部文字	柄の本質が残存。鉄が木質を包む。
11	54	刀 子	ほぼ完形品	やや不良	109.0	a…7.0 b…10.0	a…3.0	9.20	a…長方形 b…棒形	(床面)
12	—	釘 状	束端部分	やや不良	51.0	—	—	4.20	方 形	(床面)
—	—	不 明	—	やや不良	—	—	—	6.40	—	しいのみ大。(増積土)
—	—	釘 状	2 破 片	不 良	—	—	—	計 8.20	方 形	同一個体と思われる。(増積土)



第19—3圖 10号—2 (Eb03 新) 豎穴住居跡出土遺物

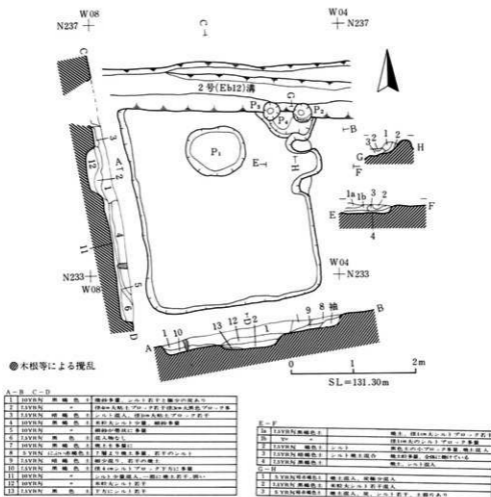
土器類は坏形土器3点、須恵器蓋1点、台付坏1点、壘形土器4点、計9点を図示しているが完形品はない。また、鉄製品は床面より3点、堆積土中より3点出土している。図示したのは前3点である。

堆積土中からは、No4のC類の他にA類9片(底部2片…ヘラ切、回転ヘラケズリ)、脚高2.0cmほどの須恵器台付坏、叩目のある土師器壘片や非クロコ成形壘片が多数出土している。非クロコ片には肩部有段・外面ヘラケズリ等のものがある。

11号 (Eb09) 竪穴住居跡 (第20図 第11表 写真図版13・56)

(重複 改築) 北壁を2号溝によって切られる。

(規模 平面形 方向) 東西2.7m、南北3.2mで面積8.06㎡あり、南北に長い長方形を呈しカマド方向軸はN-84°30'-Eである。



第20-1 図 11号(Eb09)竪穴住居跡

(堆積土) 黒褐色土に細砂を多量に含む1・4層と黒褐色土に帯状の細砂を含む5層、黒褐色土にシルトを多量に混入する11層が主体になっている。堆積土状況からみると、P₁は5層上面もしくは11層面から掘り込まれた可能性もあり、これらの面が形成された時点で使用されたことも推察できるが明確な観察がない。

(壁) 北壁は2号溝で切られ不明であるが、他はほぼ垂直に近い立ち上がりで、検出面までの壁高は約20cmある。

(床) 南西隅付近の一部に、掘り方技法による床面構築が認められたが、ほとんどは地山をそのまま利用したほぼ平坦な床面である。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁の北半に位置し、煙道と煙出しは認められない。燃焼部が若干壁外に張り出すが内側にシルトによる両袖が構築されている。

(その他の施設) カマド左袖に接し北半を2号溝に切られた不定形のビットがあり、壺の破片を包含しており貯蔵穴とも推察される。この中に径約25cmの2つの小ビットがあるが性格不明である。また、P₁については堆積土の項で述べたが、本住居跡に直接関連しない可能性がある。

出土遺物 (第20-2図 第11表)

坏形土器2点、鉄製品1点の実測。

鉄製品はNo.3の他にもう一点あるが、錆の付着した細片で詳細不明である。No.3は刀子と思われ、残存長8.5cm、錆部を除く厚さ4mm大である。欠失しているのは茎端側である。

他に堆積土中から赤色塗彩を有す球胴体部～底部片(底径7cm)、カマド焼土中から須恵器蓋の破片等が出土している。

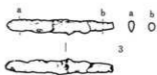
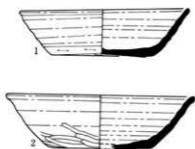
第11表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			h/b	h/d	外傾角度(°)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	55	A 類	調整のため不明	回転へう磨り	体部下端～底部	13.5	8.0	3.9	1.7	3.5	54.5	B類の色調(7.5YR5/1に近い橙)。(床面)
2	56	A 類	調整のため不明	手磨へう磨り	体部下端～底部	(15.0)	(8.0)	4.3	1.9	3.5	50.5	(堆積土)

12号 (EC62) 竪穴住居跡 (第20-2、21図 第12表 写真図版13・56・57)

(重複 改築) 1号 (Ed65)・2号 (Ee65)の各方形土壇によって東半を切られる。

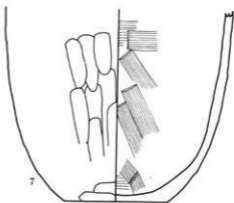
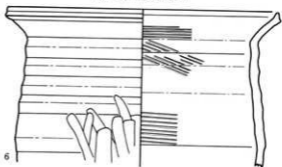
(規模 平面形 方向) 東西2.9m、南北3.1mで8.40㎡の面積をもちほぼ正方形に近い平面形で、カマド軸方向はN-86°-Wである。



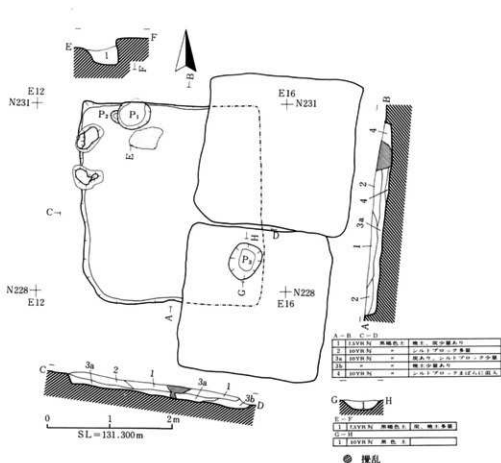
11号(Eb09)竖穴住居跡



12号(Ec62)竖穴住居跡



第20—2图 11号(Eb09)・12号(Ec62)竖穴住居跡出土遺物



第21図 12号(Eo62)竪穴住居跡

(堆積土) 概ね3層からなる。すなわち、1層の黒褐色土は南半中央付近に広がり、2層の黒褐色土はシルトブロックを多量に含み、3層の黒褐色土はシルトブロックと部分的に少量の焼土を含む、2・3層はほぼ全域に広がる。2層に多量にシルトブロックを含む状況は人為的堆積土の可能性もあり、本住居跡を切る1～4号方形土塊の掘りこみと関連する可能性もある。

(壁) 壁の立ち上がりは垂直に近く、検出面までの壁高は約15cmである。

(床) 掘り方技法によって、シルトと黒色土の混合土を主体に床面を構築しており、ほぼ平坦である。

(柱穴) 確認されない。

(周溝) 確認されない。

(カマド) 西壁北半の中央に位置する。攪乱が著しく辛じて両袖の遺存を認めるが、煙道と

煙出しは確認できない。

(その他の施設) 北壁西半の壁に接し、径30cm×40cmの円形で深さ約20cmのP₁があり坏片、甕片を包含し、貯蔵穴であろうと推察する。ピットの南側に接し焼土の広がりがあるが現地での火熱ではない。また南東隅寄りに貯蔵穴様のP₁を認める。

出土遺物 (第20-2図 第12表)

坏形土器4(台付1)、須恵器蓋1、甕形土器2、鉄製品1、計8点の実測。

A類の2点はヘラ切に依る切離しである。No3の台付坏は、脚部が内側に反るのが特徴。この場合もヘラ切痕を底部に残している。No5は数少ないD類坏のうちの1点である。

No4は須恵器に分類したが、淡黄色を呈す部分が多く、軟質な感じがしないわけでもない。結果的には「褐灰色」のくすべ焼成の特徴を重視したものである。

他に、堆積土中から、7.2cm径のヘラ切(A類)底部片、長頸甕片、糸切痕を残す土器器底底部片等がある。

第12-1表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a/b	c/d	外周角(度)	備 考	
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)					
1	57	A類	ヘラ切	回転ヘラ削り	体部下端 ~底部	13.0	7.2	4.9	1.8	2.7	58	変形品。底部調整は外周のみ。内面に多量のカーボン付着。(堆積土)	
2	—	A類	ヘラ切	無調整		(12.8)	(8.2)	4.2	1.6	3.0	61	(堆積土)	
3	58	台付坏	ヘラ切			(9.6)	4.0 (脚径)	4.7 (脚高)	0.4				(堆積土)
4	59	蓋	調整のため平削	回転ヘラ削り	体 上 部	17.6	17.1(脚) 3.0	4.5 (脚高) 1.0					2.5YR5(淡黄(一部7.5YR5(褐灰)で軟質。(堆積土)
5	60	D類	非ロクロ	手拵ヘラ削り	体中部 ~底部	(12.8)	11.2	4.2	1.1	3.0		外面上部ココナテ。内面ヘラ削りの後ヘラミガキ。 (キマド右軸内)	

第12-2表 甕形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外 面 調 整		内 面 調 整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大脚径	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
6	—	土師器	(22.0)	—	(20.2)	(20.2)	ロクロナデ	ヘラケズリ	ロクロナデ 一部カキ目	—	(P ₁ +P ₂)接合
7	—	土師器	—	8.3	—	—	—	ヘラケズリ	—	ヘラナデ	

13号 (Ec53) 竪穴住居跡 (第22図 第13表 写真図版13)

(重複 改築) 3号 (Ed56) 方形竪穴に南東隅を切られる。

(規模 平面形 方向) 東西4.95m、南北3.7m あり約15.98㎡の面積をもち、東西に長い長方形である。長軸方向はN-89°-Eである。

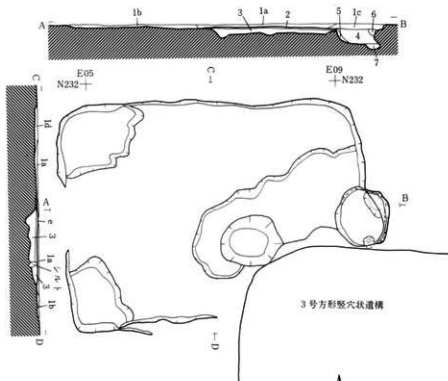
(堆積土) 1層の黒褐色土が住居跡の堆積土である。その下の2層がシルトによる貼床層である。

(壁) 遺存状況が悪く明瞭でない。

(床) 掘り方技法を用いた部分と、地山面をそのまま利用した部分があり、東半の掘り方技法部分では、3cm～4cmの厚さでシルトを用いた貼り床が認められた。

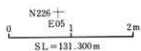
(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。



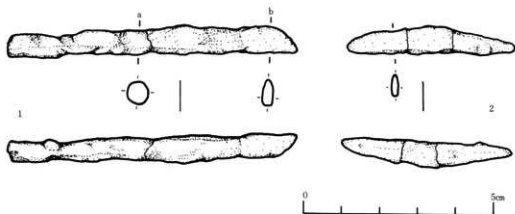
A-B		C-D	
1a	7.5YR 5/1 黒褐色土		遺物含む
1b	7.5YR 5/1 褐灰色土		シルト混入
1c	7.5YR 5/1 黒褐色土		シルト、炭、遺物若干あり
1d	"	"	粒状のシルト若干
2	7.5YR 5/1 褐色土	シルト	黒褐色土混り砂多し、固い
3	7.5YR 5/1 黒褐色土		シルト、遺物を含む
4	7.5YR 5/1 "		礫若干あり
5	7.5YR 5/1 "		シルト若干混入
6	7.5YR 5/1 "		
7	7.5YR 1/1 "		遺物包含

●木根等による擾乱



— N226
+ E09

第22-1 図 13号(E053)整穴住居跡



第22-2図 13号(Ec53)竪穴住居跡出土遺物

(カマド) 確認されないが、南東寄りに焼土の散布が多く、3号方形竪穴に切られた部分に存在した可能性もある。

(その他の施設) 東壁の前半に、径約75cm×85cm、深さ20cmのピットがあり貯蔵穴の可能性もある。

出土遺物 (第22-2図 第13表)

図示したのは鉄製品No 1・2の2点のみ。2点とも原寸大である。

土器類は破片だけの出土であり、しかも堆積土内からのものが多い。A類のヘラ切底部片、クロク・非クロク成形の土師器甕体部片等がある。また、カマド付近からは、叩目を有す土師器甕片・体部に段を有すD類坏片(口縁ヨコナデ、体部ヘラ削り)等がみられる程度である。

第13表 鉄製品一覽

写真 図番 号	写 真 番 号	種 別	現 存 部 位	遺 存 状 態	法 量				新 面 形	備 考
					長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
1	—	鉄 鏃	端部欠失	比較的良好	76.50	a… 5.50 b… 6.0	a… 5.50 b… 3.0	5.07	a…円形 b…楕形	鏃身長… (16.0)mm (端面)
2	—	不 明		良 好	45.0	5.50	1.80	1.30	楕 形	形状は刀子様の小型品。
—	—	釘 状	破 片	やや不良	24.0	—	—	1.40	方 形	

14号 (Fe06) 竪穴住居跡 (第23図 第14表 写真図版14・57)

(重複 改築) 認められない。

(規模・平面形・方向) 東西3.7m、南北3.6m、面積13.32m²で、やや歪みをもつが正方形に近い。カマド方向軸はN-101°-Eである。

(堆積土) 上面に攪乱を一部みるが、シルトを混合する黒褐色土、すなわち、4層が主体で中央付近では炭を多く包含する。

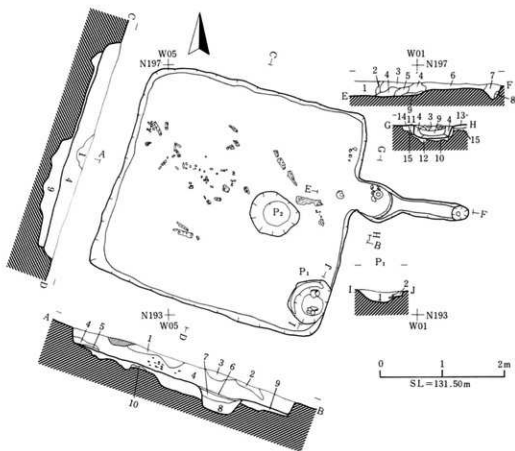
(壁) 比較的垂直に近い立ち上がりで、検出面までの高さは20cmを計る。

(床) 全面に掘り方をもち、黒色土とシルト混合土を用いてほぼ平坦な床面である。カマド付近から西壁北半にかけての床面に細い炭化物の分布がみられるが、火災等を示す痕跡は認められない。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁北半の中央近くに位置し、燃焼部は壁外に掘り方をもって構築され、間口60



A-B	C-D	
1	1SVRN	黒色土
2	1SVRN	黒色土
3	1SVRN	黒色土
4	1SVRN	黒色土
5	1SVRN	黒色土
6	1SVRN	黒色土
7	1SVRN	黒色土
8	1SVRN	黒色土
9	1SVRN	黒色土
10	1SVRN	黒色土
I-J		
1	1SVRN	黒色土
2	1SVRN	黒色土
3	1SVRN	黒色土
4	1SVRN	黒色土
5	1SVRN	黒色土
6	1SVRN	黒色土
7	1SVRN	黒色土
8	1SVRN	黒色土
9	1SVRN	黒色土
10	1SVRN	黒色土

E-F	G-H	
1	1SVRN	黒色土
2	1SVRN	黒色土
3	1SVRN	黒色土
4	1SVRN	黒色土
5	1SVRN	黒色土
6	1SVRN	黒色土
7	1SVRN	黒色土
8	1SVRN	黒色土
9	1SVRN	黒色土
10	1SVRN	黒色土
11	1SVRN	黒色土
12	1SVRN	黒色土
13	1SVRN	黒色土
14	1SVRN	黒色土
15	1SVRN	黒色土

第23-1図 14号(Fe06)竪穴住居跡

cm、奥行60cmで、火床面は床面とほぼ同じレベルである。燃焼部から若干の立ち上がりで煙道となる。煙道は幅25cm、深さ10cm、長さ125cmの溝状で東にのび、煙出しは若干落ちこむが平面的な区別はない。

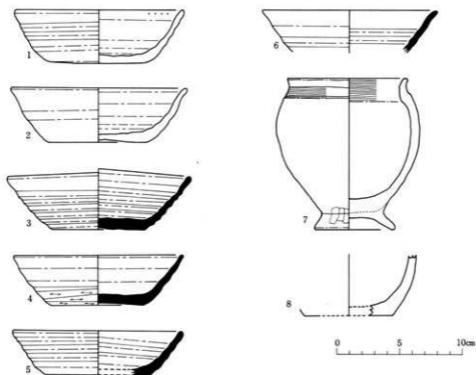
(その他の施設) 南東隅にP₁、カマド南西の床面中央寄りにP₂を検出、規模は径と深さの順に、P₁で55cm×75cm、15cm P₂: 70cm×80cm、30cmを計り、いずれも堆積土に炭と焼土を含み、P₁では遺物の検出もある。P₂は上面を黒色土、シルト、焼土の混合で薄く貼っており、生活時に廃棄したものと推察される。確証はないが、住居跡の隅とカマド寄りの位置から貯蔵穴の可能性がある。

出土遺物 (第23—2図 第14表)

坏形土器6点、土師器甕2点の実測。

B類としたNa 1・2はかなり軟質で、白黄橙色に近い坏である。土師質土器に類似したものである。部分的ににぶい黄橙色を呈すNa 5 (A類)と同様に、本来はA類の範疇として扱えるべき一群の坏でもあろうが、軟質すぎるため分類上ではB類としている。

Na 7は台付の小型甕である。この器種は、本遺跡内では一点しかみられない。脚部は後から付けたもので、その分底面が肥厚している。Na 8は小型甕の破片。底部に糸切痕が観察される



第23—2図 14号(Fe06)竪穴住居跡出土遺物

第14-1 環形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)				r/b	r/d	外傾角度(°)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)	最大径				
1	63	B 類	ヘラ切	無調整	—	13.4	8.0	4.3	1.3	3.1	56.5	完形品。内面に少量のカーボン付着。磨滅(P ₁)	
2	64	B 類	ヘラ切	無調整	—	13.9	7.8	4.4	1.8	3.2	53.5	完形品。内外面共磨滅。(カマド内。No3の上にあった)	
3	65	A 類	ヘラ切	無調整	—	14.5	7.4	4.9	2.0	3.0	50.5	口縁に歪み。(カマド内。No2の下に重なる)	
4	—	A 類	回転糸切	回転ヘラ削り	下部下陥一部	13.5	7.4	4.0	1.8	3.4	52	底部調整は外周のみ。(P ₁)	
5	66	A 類	ヘラ切	無調整	—	13.5	8.4	3.6	1.6	3.8	55	に白い黄褐色(10YR5/5)部分は二次火熱による。(カマド内)	
6	—	A 類	底部欠失	—	—	(14.0)	—	—	—	—	—	(床面直上)	

第14-2 変形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)					外面調整		内面調整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大径	口縁部	体 部	口縁部	体 部		
7	67	土師器	9.6	(脚径) 6.4 (全高) 12.1	11.5	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	不 明	台付。(床面)		
8	—	土師器	—	7.0	—	—	ロクロ成形	ロクロ成形	ロクロ成形	ロクロ成形	回転糸切。二次火熱あり。(カマド内)	

が、他部分の器面は剝離のため調整不明である。

これらの他に床面からロクロ成形変片、堆積土中から長頸壺の破片が出土しており、また、カマド近くにはいわゆる「足方」様の石製品がある。鉄製品は見当たらない。

15号 (FI09) 竪穴住居跡 (第24図 第15表 写真図版14・57・58)

(重複 改装) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3.0m、南北3.1m、面積7.84m²で、平面形はほぼ正方形である。カマド方向軸はN-30°Eである。

(堆積土) 周辺および堆積土にも攪乱が多い。堆積土は、遺物を包含しシルトが混入した黒色土を主体に、壁ぎわにシルト混合の黒褐色土がみられる。

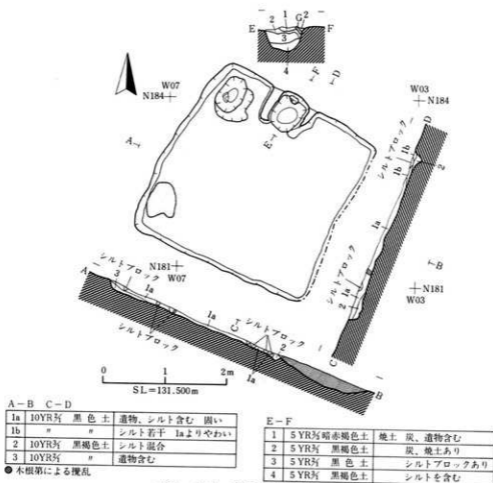
(壁) やや外傾する立ち上がりで、検出面までの高さは約10cmある。東壁は粗掘り時にショベルによって破壊されている。

(床) 地山をそのまま床面にし、比較的平坦である。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 北壁中央のやや西寄りに位置し、煙道と煙出しは認められず両袖と燃焼部のみである。燃焼部は径約40cm×50cm、深さ30cmほどに掘り込み、黒褐色土等を埋めこんで、その上面を火床面としている。南西隅にみられる焼土の堆積は、土器片を包含するが火熱痕はなく炉



第24-1図 15号(F109)竪穴住居跡

等の施設ではない。

(その他の施設) カマドの西隣りに、径約40cm×70cm、深さ30cmのピットが認められ、黒色堆積土中には土器を包含しており、貯蔵穴と推察される。

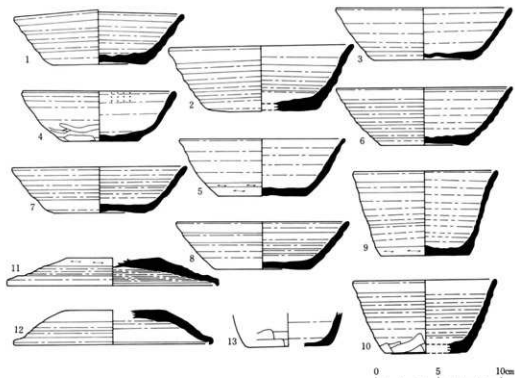
出土遺物 (第24-2・3図 第15表)

環形土器11点、須恵器蓋2点、変形土器2点、須恵器鉢形土器1点、鉄製品5点、砥石1点、計22点の出土。

環はA類だけであるが、No 6・7は灰白～浅黄色を呈している。しかし、焼成温度は高いと思われ、硬質である。No 9・10・13は体部の起上がり強い、特徴的な環である。

蓋は2点とも焼成良好の須恵器である。何れも反転復元に依る実測。推定口径はNo11が17.1cm、No12が16.1cm大である。

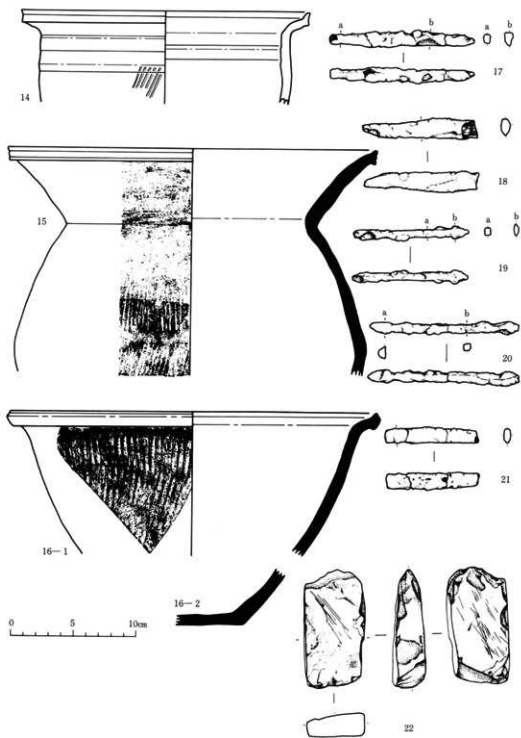
No16は床面出土の須恵器である。16-2は底部片と思われ、平底を呈している。刀子と鉄銚



第24-2図 15号(Fi09)壺穴住居跡出土遺物

第15-1表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	量 (cm)			a/b	a/d	外縁変位率(%)	備考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)				
1	68	A類	ヘラ切	無調整	/	13.5	7.4	4.4	1.8	3.1	51	完形品。口縁著しい歪み。(床面)
2	69	A類	ヘラ切	無調整	/	14.6	8.8	5.3	1.7	2.8	60	口縁の一部に歪み。(床面)
3	—	A類	ヘラ切	無調整	/	14.0	8.0	4.2	1.8	3.3	53	(床面)
4	70	A類	調整のため不明	手捻ヘラ削り	体部下端～底部	12.2	6.2	4.1	2.0	3.0	52	内面に多量のカーボン付着。(床面)
5	71	A類	調整のため不明	回転ヘラ削り	体部下端～底部	(13.2)	7.0	4.6	1.9	2.9	56	(床面)
6	72	A類	ヘラ切	磨減著しく不明	/	(14.0)	7.0	4.6	2.0	3.0	52.5	群青色調(2.5Y7.5黄)で硬質。
7	—	A類	ヘラ切	無調整	体部下端～底部	(14.0)	7.2	3.7	1.9	3.8	47.5	(床面)
8	—	A類	ヘラ切	無調整	体部下端～底部	(13.8)	7.6	3.8	1.8	3.6	51	(床面)
9	73	A類	ヘラ切	回転ヘラ削り	体部下端	11.4	7.2	6.8	1.6	1.7	72	完形品。(床面) コップ形
10	74	A類	ヘラ切	手捻ヘラ削り	体部下端	(11.2)	(6.4)	5.9	1.8	1.9	67	(床面) コップ形
11	—	蓋	調整のため不明	回転ヘラ削り	体上部	(17.0)	—	—	/	/	/	フタミ欠失。(床面)
12	—	蓋	残存少く不明	—	—	(15.8)	—	—	/	/	/	フタミ欠失。(床面)



第24—3图 15号(F109)竖穴住居跡出土遺物

第15—2表 鉄 製 品 — 覧

写真 番号	種 別	残 存 部 位	遺 存 状 態	法 量				断 面 形	備 考		
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)				
17	76	刀 子	基端部欠失	錆の割に残りよし	116.0	a… 7.50 b… 10.0	a… 5.0	16.10	a…長方形 b…挖形	(床面)	
18	77	刀 子	刃 部	錆の割に残りよし	91.0		13.0	7.50	17.20	丸味のある挖形	(床面)
19	78	鉄 鏝	基端部欠失	錆の割に残りよし	91.50	a… 6.0 b… 10.0	a… 4.50	10.90	a…長方形 b…扁平な 鉄鏝形	鉄身長…12.0 (14.0)mm. (床面)	
20	80	刀 子	刃 部 片	錆の割に残りよし	74.0		11.0	5.50	9.50	丸味のある挖形	全体がやや反り気味。(床面)
21	79	鉄 鏝	基端部のみ欠失	比較的良好	121.50	a… 9.50 b… 5.50	b… 5.50	16.80	a…半月状 b…方 形	鉄身長…17.40 (20.80)mm. (床面)	
—	—	不 明	砥 片	比較的良好	32.0		9.0	—	4.25	—	板状。(床面)
—	—	不 明	砥 片	やや不良	31.0		5.0	5.0	3.10	—	円 形 若干湾曲。(床面)

のようである。何れも床面出土。

砥石はNo22の1点。床面出土で、素材は斜長石流紋岩である。4面を使用しており、9.4×4.7×2.2cm大のもの。

これらの他に破片としては、叩目と刷毛目技法を併用する土師器甕片が床面より、またカマド付近からは、叩目とヘラ削りを有する土師器片がある。後者は残存部位から推定して、球形を呈すと思われるが、内面に青海波文の圧痕がある。

16号 (Ge09) 竪穴住居跡 (第25図 第16表 写真図版15・58・59)

(重複 改築) 竪穴住居跡廃絶後、埋没する過程のくぼみを利用したものと推定される点がある。すなわち、1層下の焼土を主体とする2層が中央に広がり、これとほぼ同レベル面は固くしまっていることと土器が分布することである。

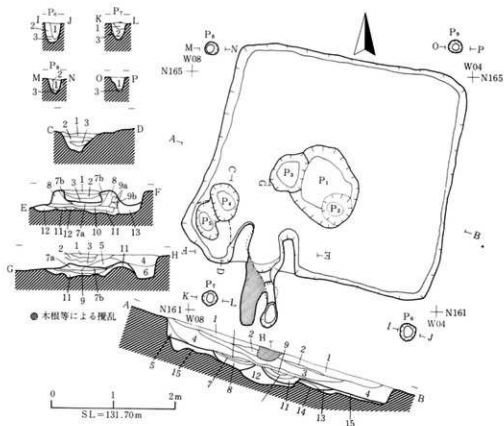
(規模 平面形 方向) 東西3.8m、南北3.6m、面積12.24m²のほぼ正方形で、カマド方向軸はN-181°-Eである。

(堆積土) 1層暗褐色土、3層黒褐色土、4層暗褐色土が堆積土の主体であり、いずれも自然堆積の様相であるが、3層上面は固く2層とした焼土の広がりをもつ、13・14・15層は床構築土である。

(壁) 現代の溝によって破壊される北壁の一部を除き遺存状況は良い。壁はほぼ垂直に近く立ち、検出面までの壁高は約30cmである。

(床) 全体が掘り方技法により、黒色土シルトの混合土をたたき込んで構築したもので、固くしまりほぼ平坦である。

(柱穴) 床面での柱穴は認められないが、壁外にP₆～P₉を検出した。規模は、P₆ 径約30cm、深さ30cm、P₇ 径約30cm、深さ25cm、P₈ 径約20cm、深さ20cm P₉ 径約20cm、深さ20



A-B	
1 JAVRN 黒褐色土	シルト・サブロ・ブツ底、灰燼少
2 JAVRN 赤褐色土	赤褐色土層上部 500-1000の柱状の層土を含む
3 JAVRN 赤褐色土	シルト・サブロ・ブツ底あり、燼少
4 JAVRN 黒褐色土	シルトが層状に混入、赤褐色土が少い
5 JAVRN 赤褐色土	赤褐色土層下部
6 JAVRN 赤褐色土	柱状のシルト、燼土を含む
7 JAVRN 赤褐色土	シルトが層状に混入
8 JAVRN 赤褐色土	柱状のシルトが若干
9 JAVRN 赤褐色土	しりとり、燼土あり
10 JAVRN 黒褐色土	柱状のシルトが若干、燼土あり
11 JAVRN 赤褐色土	シルトが層状に混入、燼土あり
12 JAVRN 赤褐色土	柱状の層土を含む
13	柱状の層土、シルトを含む
14 JAVRN 赤褐色土	シルトが層状に混入
15 JAVRN 赤褐色土	柱状のシルトが若干、燼土あり
C-D	
1 JAVRN 黒褐色土	シルトが層状に混入、燼土を含む
2 JAVRN 赤褐色土	燼土層、シルトが若干を含む
3 JAVRN 赤褐色土	燼土層

E-F G-H		
1 JAVRN 黒褐色土	シルト	シルトが層状に混入、燼土あり
2 JAVRN 赤褐色土	シルト	1層より厚くも燼土が若干
3 JAVRN 赤褐色土	燼土	シルトが若干
4 JAVRN 赤褐色土	シルト	1層より厚くも燼土が若干
5 JAVRN 赤褐色土	燼土	燼土が層状に混入
6 JAVRN 黒褐色土	シルト	燼土が若干
7 JAVRN 赤褐色土	燼土	燼土が層状に混入
8 JAVRN 赤褐色土	燼土	燼土が層状に混入
9 JAVRN 赤褐色土	シルト	燼土が若干
10 JAVRN 赤褐色土	燼土	燼土が層状に混入
11 JAVRN 赤褐色土	燼土	燼土が層状に混入
12 JAVRN 赤褐色土	燼土	燼土が層状に混入
13 JAVRN 赤褐色土	燼土	燼土が層状に混入
14 JAVRN 赤褐色土	燼土	燼土が層状に混入
15 JAVRN 赤褐色土	燼土	燼土が層状に混入
I-J		
1 JAVRN 赤褐色土	シルトが層状に混入	
2 JAVRN 赤褐色土	燼土	
3 JAVRN 赤褐色土	燼土が層状に混入	

第25-1図 16号(Ge09)竪穴住居跡

cmあり、それぞれが対の位置にあり、P₆・P₇では柱痕が認められることから柱穴と推察できる。しかし、竪穴住居跡の壁方向とは、ずれをもつことから住居跡に伴うものとして確認できず、或いは中間焼土層時に伴う可能性も否定できない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 南壁西半の中央に位置する。袖および火床部は、地山を若干掘りくぼめた上に黒褐色土やシルトまたは混合土を用い、版築状にたたいて構築していて、火床部は強い火力で固くしまっている。煙道は上がり傾斜で約50cm南へのび煙出しとなる。煙出し平面は長径約30

cmの楕円を呈し、検出面から約30cmの深さで煙出し底面は煙道底面より約15cm下がる。なお、煙道の西壁は現代の溝で破壊されている。

(その他の施設) P₁~P₆のピットがある。床面中央近くに径100cm、深さ20cmほどのP₁が、この後P₂・P₃の径60cm、深さ15cmが施設されているが、P₂・P₃の先後関係は不明である。しかし、堆積土の状況から上面は貼られており、埋められた後、床面としてしていると推察される。

カマド右袖に隣接するP₄・P₅は径40cm×50cm、深さ20cmほどで、P₄が新しいものとみられるが明瞭でない。これらのピットは貯蔵穴の性格が考えられ、特に位置的な面からP₄・P₅は可能性が高い。

出土遺物 (第25-2・3図 第16表)

坏形土器9点、須恵器蓋3点、甕形土器5点、拓影図2点、及び砥石1点を図示している。

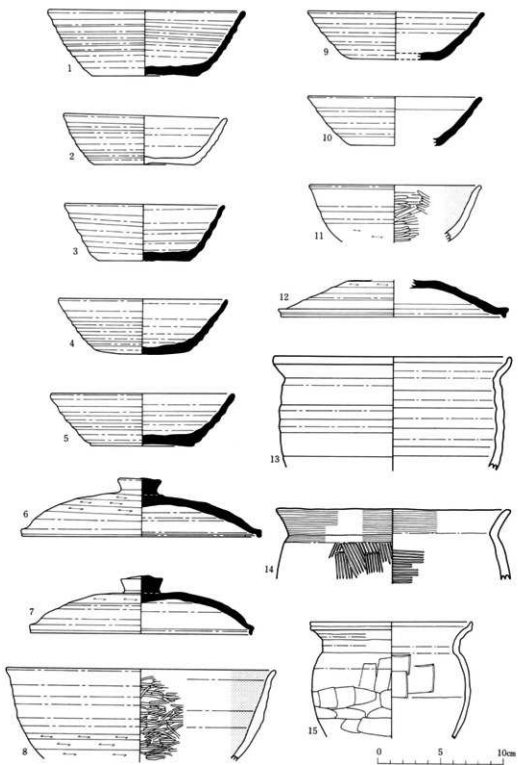
坏形土器はA・B・C各類が出土しているが、A類の量が圧倒的に多い。No2のB類は、胎土が悪く、にぶい橙色を呈しているが、形態的にはA類と大差ない。No8は大型のC類である。下方に台がつくかもしれないが、現状では坏として分類している。

蓋は3点共硬質の須恵器である。ツマミと口縁の反りの様子がやや異なるが、成形技法は同じである。

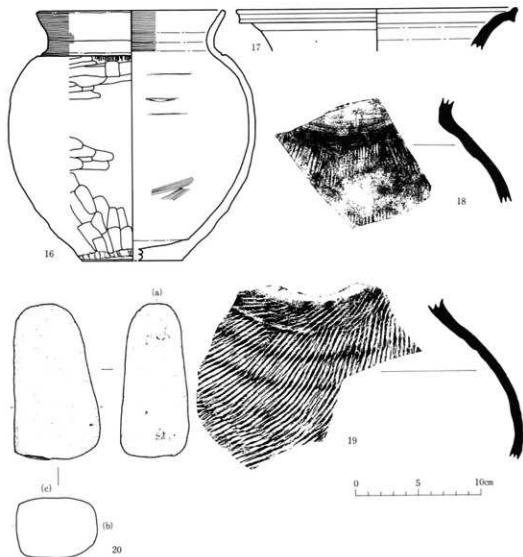
甕形土器は土師器4点、須恵器3点の出土。このうち非ロクロ成形のものは、No14・15・16の3点ある。

第16-1表 坏形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	切断し	調整技法	調整部位	量 (cm)			a/b	a/d	外傾角(度)	備考
						口径 (a)	底径 (b)	部高 (d)				
1	81	A類	ヘラ切	無調整	/	15.6	8.4	5.3	1.9	2.9	54	完形品。(床面)
2	82	B類	ヘラ切	無調整	/	13.0	8.0	4.1	1.6	3.2	55	磨滅気味。(床面上+カマド内+P ₂)
3	—	A類	ヘラ切	無調整	/	12.7	7.2	4.6	1.8	2.8	57	(P ₄ +床面)
4	83	A類	ヘラ切	無調整	/	(13.4)	7.6	4.5	1.8	3.0	54	底部、指orヘラのナデ。(床面上の生活面)
5	—	A類	ヘラ切	無調整	/	(14.6)	8.0	4.2	1.8	3.5	52	底部、指orヘラのナデ。(床面上の生活面)
6	84	蓋	調整のため不明	回転ヘラ削り	体上部	19.0	(7.7)削り 3.5	4.7 1.2	/	/	/	完形品。内面中央付近に軽いナデ。(床面)
7	—	蓋	調整のため不明	回転ヘラ削り	体上部	17.7	3.3	4.2 1.4	/	/	/	完形品。口縁及び内面の一部に自然軸。(床面)
8	85	C類	底部欠失	回転ヘラ削り	体部下端	(21.4)	—	—	—	—	—	黒色処理粉人と消失。(カマド内+床面直上)
9	—	A類	ヘラ切	無調整	/	(14.0)	—	3.8	2.0	3.7	47	(床面上の生活面)
10	—	A類	底部欠失のため不明	—	—	(14.0)	(7.0)	—	—	—	—	(床面上の生活面)
11	—	C類	底部欠失	手研ヘラ削り	体部下端	(13.8)	—	—	—	—	—	(床面上の生活面)
12	—	蓋	調整のため不明	回転ヘラ削り	体上部	(18.0)	—	—	/	/	/	ツマミ欠失。(床面上の生活面)



第25—2图 16号(Ge09)竖穴住居跡出土遺物



第25—3 図 16号(Ge09)竪穴住居跡出土遺物

他に、ピット内から回転糸切痕を有す土師器甕底部片（底径8.8cm）・印目のある土師器甕体部片、カマド内から非ロクロの球胴甕片とB類片、検出面から回転糸切痕のC類底部片、堆積土中から須恵器台付坏の脚部片やA類片等が出土している。

鉄製品は特に検出されなかったが、No20の砥石が1点ある。素材を両輝石安山岩とする4面使用のものである。比較的大き目の砥石であり、研磨面の様子から察して長期間の利用はされていないと思われる。

第16-2表 変形土器一覧

写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
		口 径	底 径	器 高	最大径	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
13	土師器	(19.1)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元。(カマド内)
14	土師器	(18.8)	—	—	—	ヨコナデ	刷毛目	ヨコナデ	刷毛目	反転復元。(ピット内)
15	土師器	(13.0)	—	—	(12.7)	ロクロナデ	ヘラケズリ	ロクロナデ	ヘラナデ	球胴形。外面カーボン付着。
16	86 土師器	15.2	8.0	20.1	19.9)	ヨコナデ	刷毛目+ヘラケズリ	ヨコナデ	一部ヘラナデ	球胴形。黒埃あり。(ピット内)
17	須恵器	(22.9)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元。(カマド内)
18	須恵器	拓影図。胴部-体部片。外面胴部より下方縦位の甲目。内面ロクロナデと押し痕あり。(床面)								
19	須恵器	拓影図。胴部-体部片。外面縦位の甲目。内面ロクロナデと押し痕。白褐色を呈す部分あり。やや軟質。(床面)								

17号 (Gi09) 竪穴住居跡 (第26図 第17表 写真図版15・59・60)

(重複 改築) 確証的でないが拡張も考えられる。すなわち、平面図中の一点鎖線で示す範囲は東西南北とも約2.5mの正方形であり、竪穴住居跡と段差をもち約3cm~12cm深く、黒色土にシルトブロックが混入し部分的に焼土と土器片を含む堆積土が床面レベルまで認められる。堆積土下は地山シルトで、いわゆる床面構築の掘り方は著しい凹凸をもつのが一般的であるのに比較し平坦に近い。以上の様相から旧平面形かとの推察もするが生活痕も明瞭でなく断定できず、単に床面構築の掘り方である可能性も強い。カマドは新・旧の二基を認める。

(規模 平面形 方向) 東西・南北とも3.5m、面積10.24㎡の正方形の平面を呈し、カマド方向軸は、No 1カマド、No 2カマドともN-111°-Eである。

(堆積土) シルト等混入物による若干の差異のみで、ほぼ黒色土と黒褐色土を主体とする堆積土である。

(壁) 比較的良好に遺存し、垂直に近い立ち上がりで検出面までの高さは約30cmである。

(床) 四壁沿い30cm~60cm幅では地山シルト面を利用し、それより内面は前述のように、旧遺構もしくは床面構築の掘り方と推察され、黒色土にシルトブロックを混入する埋土が約3cm~12cmの厚さであり、その上面が生活面で全般に平坦である。

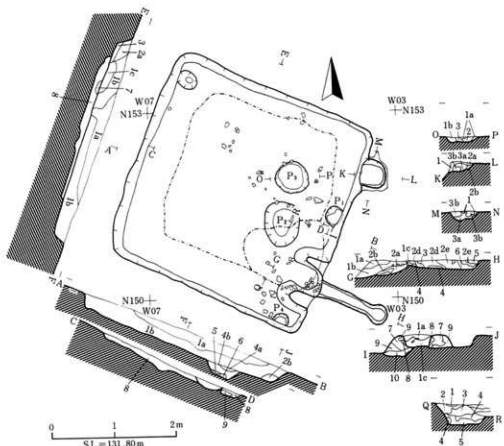
(柱穴) $P_1 \cdot P_4 \cdot P_5$ は深さ10cm内外の柱穴状の小ピットであるが積極的確認に欠ける。

(周溝) 認められない。

(カマド) No 1カマド 東壁北半の北端寄りに位置する旧カマドであり、現状は燃焼部のみである。燃焼部は半円状に壁外に張り出し間口40cm、奥行40cmほどで、周壁および火床面は火熱で瓦礫状に近い。火床面は約15cmほどの段差で床面より高く、壁内のカマド関連施設と焼土等の痕跡を現状では全く認めない。また、壁内に旧遺構の存在を肯定したとし、それに関連づ

ける確証はない。

No2カマド 東壁南半の南端寄りに位置する新カマドであり、壁内に燃烧部と両袖が認められる。燃烧部と左袖下は、平面図の一点鎖線で示す不整形で深さ35cmほどを掘り込んだ後、埋土した上に構築されている。燃烧部は間口45cm、奥行50cmあり、両袖は土器片を芯材に用い黒褐色土やシルトで構築し、燃烧部奥壁から約10cmほど立ち上がり長さ80cm、幅20cm、深さ10cm



A-B	C-D	E-F	
14	10VFN	黒褐色土	土層面及び
15	10VFN	+	14層面及び15層面より埋土層
2a	10VFN	黒褐色土	シルト層下の砂層より埋土
2b	10VFN	+	埋土層より埋土
3	10VFN	黒褐色土	埋土層より埋土
4a	10VFN	黒褐色土	黒褐色土層より埋土
4b	10VFN	黒褐色土	黒褐色土層より埋土
5	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
6	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
7	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
8	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
9	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
10	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
11	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
12	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
13	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
14	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
15	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
16	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
17	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
18	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
19	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
20	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
21	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
22	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
23	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
24	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
25	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
26	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
27	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
28	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
29	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
30	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
31	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
32	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
33	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
34	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
35	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
36	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
37	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
38	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
39	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
40	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
41	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
42	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
43	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
44	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
45	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
46	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
47	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
48	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
49	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
50	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
51	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
52	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
53	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
54	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
55	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
56	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
57	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
58	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
59	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
60	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
61	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
62	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
63	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
64	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
65	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
66	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
67	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
68	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
69	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
70	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
71	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
72	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
73	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
74	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
75	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
76	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
77	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
78	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
79	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
80	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
81	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
82	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
83	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
84	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
85	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
86	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
87	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
88	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
89	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
90	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
91	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
92	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
93	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
94	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
95	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
96	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
97	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
98	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
99	10VFN	埋土層	埋土層より埋土
100	10VFN	埋土層	埋土層より埋土

G-H	I-J	
1a	10VFN	黒褐色土
1b	10VFN	黒褐色土
1c	+	埋土層より埋土
2a	3VFN	黒土
2b	3VFN	黒褐色土
2c	3VFN	黒褐色土
2d	3VFN	黒褐色土
2e	3VFN	黒褐色土
2f	3VFN	黒褐色土
3	10VFN	+
4	10VFN	+
5	10VFN	+
6	10VFN	+
7	10VFN	埋土層
8	10VFN	埋土層
9	10VFN	埋土層
10	10VFN	埋土層
11	10VFN	埋土層
12	10VFN	埋土層
13	10VFN	埋土層
14	10VFN	埋土層
15	10VFN	埋土層
16	10VFN	埋土層
17	10VFN	埋土層
18	10VFN	埋土層
19	10VFN	埋土層
20	10VFN	埋土層
21	10VFN	埋土層
22	10VFN	埋土層
23	10VFN	埋土層
24	10VFN	埋土層
25	10VFN	埋土層
26	10VFN	埋土層
27	10VFN	埋土層
28	10VFN	埋土層
29	10VFN	埋土層
30	10VFN	埋土層
31	10VFN	埋土層
32	10VFN	埋土層
33	10VFN	埋土層
34	10VFN	埋土層
35	10VFN	埋土層
36	10VFN	埋土層
37	10VFN	埋土層
38	10VFN	埋土層
39	10VFN	埋土層
40	10VFN	埋土層
41	10VFN	埋土層
42	10VFN	埋土層
43	10VFN	埋土層
44	10VFN	埋土層
45	10VFN	埋土層
46	10VFN	埋土層
47	10VFN	埋土層
48	10VFN	埋土層
49	10VFN	埋土層
50	10VFN	埋土層
51	10VFN	埋土層
52	10VFN	埋土層
53	10VFN	埋土層
54	10VFN	埋土層
55	10VFN	埋土層
56	10VFN	埋土層
57	10VFN	埋土層
58	10VFN	埋土層
59	10VFN	埋土層
60	10VFN	埋土層
61	10VFN	埋土層
62	10VFN	埋土層
63	10VFN	埋土層
64	10VFN	埋土層
65	10VFN	埋土層
66	10VFN	埋土層
67	10VFN	埋土層
68	10VFN	埋土層
69	10VFN	埋土層
70	10VFN	埋土層
71	10VFN	埋土層
72	10VFN	埋土層
73	10VFN	埋土層
74	10VFN	埋土層
75	10VFN	埋土層
76	10VFN	埋土層
77	10VFN	埋土層
78	10VFN	埋土層
79	10VFN	埋土層
80	10VFN	埋土層
81	10VFN	埋土層
82	10VFN	埋土層
83	10VFN	埋土層
84	10VFN	埋土層
85	10VFN	埋土層
86	10VFN	埋土層
87	10VFN	埋土層
88	10VFN	埋土層
89	10VFN	埋土層
90	10VFN	埋土層
91	10VFN	埋土層
92	10VFN	埋土層
93	10VFN	埋土層
94	10VFN	埋土層
95	10VFN	埋土層
96	10VFN	埋土層
97	10VFN	埋土層
98	10VFN	埋土層
99	10VFN	埋土層
100	10VFN	埋土層

第26-1 図 17号(G109) 竪穴住居跡

～15cmの構状の煙道がのび、先端に径30cm円形の煙出しをもつ。

(その他の施設) P₁・P₄・P₅は前述の通りである。P₂は60cm×70cmの楕円形で20cmの深さをもち、南半分はNo 2カマド前の掘り込みより新しく、No 2カマド時のピットと推察され、土器片を包含し貯蔵穴の可能性もある。P₃は55cm×55cmの円形で8cmの深さをもつが、堆積土の黒色土下のシルト面で確認したものである。

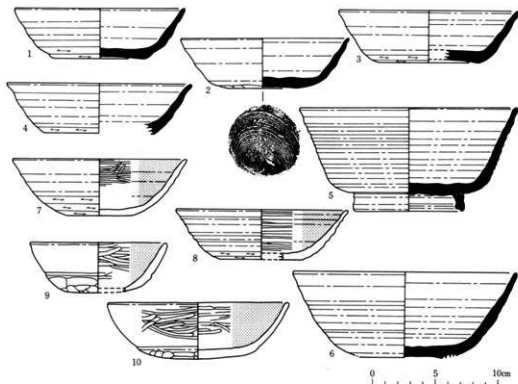
出土遺物 (第26-2・3・4図 第17表)

環形土器10点(台付環2)、甕形土器3点、須恵器片拓影図2点、石製品2点、計17点を図示している。

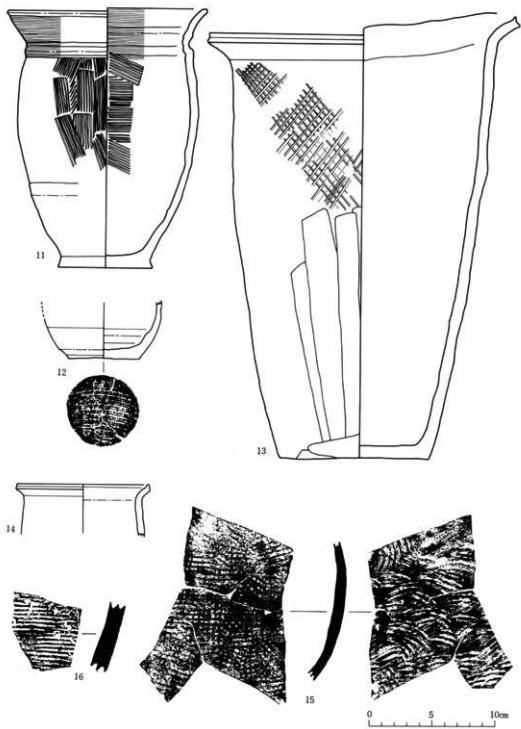
環はA・C・D類の出土である。D類は2点あるが、何れも反転復元である。本遺構内からは白橙色に近いやや軟質の土器片は1点みられるが、確実にB類の範疇に入ると思われる環は出土していない。

No 5・6は台付環である。No 6の脚部は剥離している。器形的にみてこの2点は体部の様子が異なっている。

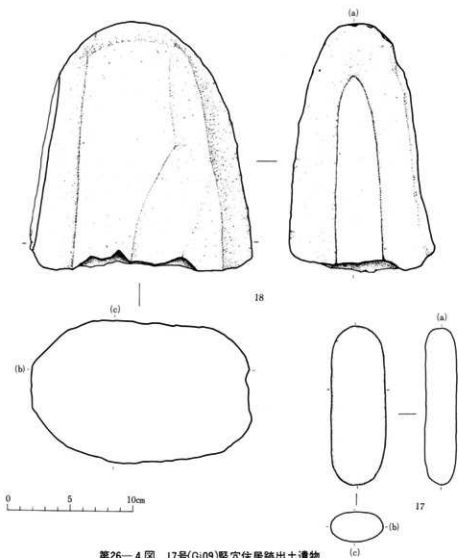
土師器の甕形土器は、大・中・小合わせて4点あるが、No 12は小型の壺になるかもしれない。切離しは静止糸切様を呈している。またNo 13はロクロ成形の長胴甕であるが、体部に膨らみを



第26-2図 17号(Gi09)型穴住居跡出土遺物



第26—3图 17号(G109)竖穴住居跡出土遺物



第26—4 図 17号(Gi09)竪穴住居跡出土遺物

持たず直線的である。体部の上半には格子形の叩目を施し、その下方はダイタミックなへら削りで仕上げる。格子叩目があっても技法的には他の土器類と同じ成形であるが、この種の器形は他例がない。

石製品のNo17は足方と思われる。No18はカマドの袖石として検出されたが、一面が研磨されている。砥石に転用したものかもしれない。No17は両輝石安山岩、No18は両輝石安山岩熔岩塊である。

他に破片としては、ピット内からロクロ成形小型壘片、堆積土中から土師器木葉底部片、須恵器壺の破片、またカマド（新）周辺からロクロ、非ロクロ成形の土師器壘片が多数出土している。

第17-1表 環形土器 一覽

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a/b	a/d	外傾角度(°)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	87	A 類	回転糸切	回転ヘラ磨り	体部下端 ~底部	13.6	7.2	4.1	1.9	3.3	52	磨減気味。底部調整外周のみ。(新カマド右軸内)
2	88	A 類	回転糸切	手持ヘラ磨り	体部下端 ~底部	13.4	5.6	4.0	2.4	3.4	44.5	底部調整外周のみ。(新カマド右軸上)
3	—	A 類	調整のため不明	回転ヘラ磨り	体部下端 ~底部	(14.4)	(8.2)	4.2	1.8	3.4	53.5	
4	—	A 類	底蓋埋付小	回転ヘラ磨り	体部下端	(14.6)	(8.8)	4.0	1.7	3.7	54	(カマド前)
5	89	台付坯	ヘラ切	—	—	(17.4)	$\frac{9.0}{8.6}$ (幅径)	$\frac{8.3}{1.5}$ (幅高)	/	/	/	色調に濃い橙(7.5YR5/6)・灰白(2.5Y5/6)で軟質。(床面)
6	—	台付坯	ヘラ切	—	—	(17.8)	7.0	—	/	/	/	磨減。割離部分有。(カマド前掘り方内)
7	—	C 類	調整のため不明	回転ヘラ磨り	体部下端 ~底部	(13.8)	5.2	4.6	2.7	3.0	46	磨減気味。(P ₃ +床面)
8	90	C 類	調整のため不明	回転ヘラ磨り	体部下端 ~底部	(13.6)	(6.6)	4.0	2.1	3.4	48.5	(床面+堆積土)
9	91	D 類	非ロクロ	手持ヘラ磨り	体部下端	10.8	4.8	4.0	2.3	2.7	50.5	外面上部ココナデ後ヘラミガキ。(床面)
10	92	D 類	非ロクロ	手持ヘラ磨り	体部下端	14.2	9.4	4.5	1.5	3.2	57.5	外面上部ヘラミガキ。有段。(新カマド左軸内+突口前+床面)

第17-2表 甕形土器 一覽

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大腹径	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
11	93	土師器	16.1	7.5	20.8	14.5	ヨコナデ	刷毛目	ヨコナデ	刷毛目	輪積み成形。(床面)
12	—	土師器	—	5.6	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	静止糸切(拓製皿。二次火焼。(床面)
13	94	土師器	25.0	11.8	34.2	—	ロクロナデ	叩目 + ヘラケズリ	ロクロナデ	磨削ヘラナデ	歪みあり。一部黒変。(カマド部)
14	—	土師器	10.8	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	粗砂多量。(突口前)
15	—	須恵器	甕体部片拓製図。外面平行印目。内面青濁波文。(住居跡掘り方埋土中)								
16	—	須恵器	甕体部片拓製図。外面平行印目。緑灰色の釉ケカス。内面白然釉。断面自然釉。断面赤灰色。陶器的。								

18号 (Gj12) 竪穴住居跡 (第27図 第18表 写真図版16・60)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3.4m、南北3.2m、面積9.75m²の正方形で、カマド方向軸はN-109°-Eである。

(堆積土) 2層のシルト質の黒褐色土が全般に広がり、壁寄りに3層のシルトを混合する黒褐色土と4層の黒色土が入り、床面近くにシルト混合の黒褐色土が堆積する。

(壁) 壁の遺存は比較的良好で垂直に近い立ち上がりをもち、検出面までの高さは10cm~25cmである。

(床) 掘り方や貼り床は認められず、地上シルト面をそのまま利用しており、ほぼ平坦な床

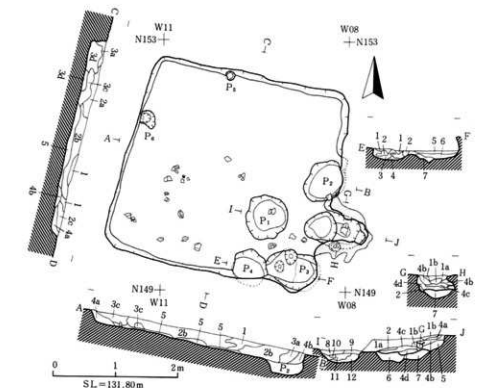
面である。

(柱穴) 西端から約1.15mの北壁沿いに径13cmの円形で深さ25cmのP₅を、北端から約1mの西壁沿いに径18cmの円形で深さ25cmのP₆と柱穴状の小ピットを認めるが、柱穴としての確証はない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁南半分の中央に位置し、燃焼部は壁外に張り出し煙道と煙出しは認められない。燃焼部は全面掘り方で黒褐色土を埋土としてその上面が火床面となる。中央に支脚石が認められ壁は火熱によって瓦礫状を呈している。

(その他の施設) カマド周辺にP₁~P₄を認め、径50cm~70cm、深さ15cm~20cm規模であり、位置的に貯蔵穴である可能性が高い。



点	層	土質	説明
1	100cm	黒褐色土	シロト、ブク、アサギ、草
2	100cm	黒褐色土	シロト壁土
3	20	+	シロト壁土
4	20	+	シロト壁土
5	20	+	黒褐色土
6	100cm	+	黒褐色土
7	100cm	+	黒褐色土
8	100cm	+	黒褐色土
9	100cm	+	黒褐色土
10	100cm	+	黒褐色土
11	100cm	+	黒褐色土
12	100cm	+	黒褐色土

点	層	土質	説明
1	100cm	黒褐色土	シロト壁土
2	100cm	+	シロト壁土
3	100cm	+	黒褐色土
4	100cm	+	黒褐色土
5	100cm	+	黒褐色土
6	100cm	+	黒褐色土
7	100cm	+	黒褐色土
8	100cm	+	黒褐色土
9	100cm	+	黒褐色土
10	100cm	+	黒褐色土
11	100cm	+	黒褐色土
12	100cm	+	黒褐色土

第27-1 図 18号(G12)竪穴住居跡

出土遺物 (第27-2・3図 第18表)

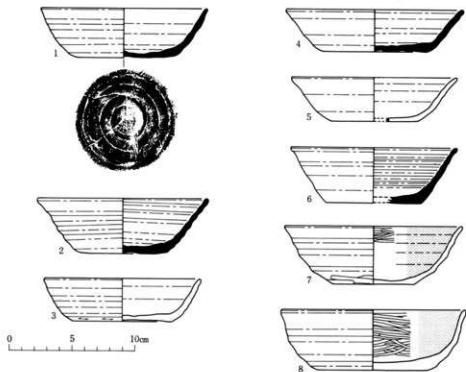
坏形土器 8点、甕形土器 5点、鉄製品 2点、須恵器拓影図 1点、計16点を図示している。

坏はA・B・Cの各類が出土している。C類のNo 7・8は体部がやや内湾しながら口縁部で外反する器形である。一方のB類はA類の器形と大差なく、法量も同じ位でみる。ただし、No 5は浅黄橙色を呈す軟質のもので、焼成・色調は典型的なB類の坏である。

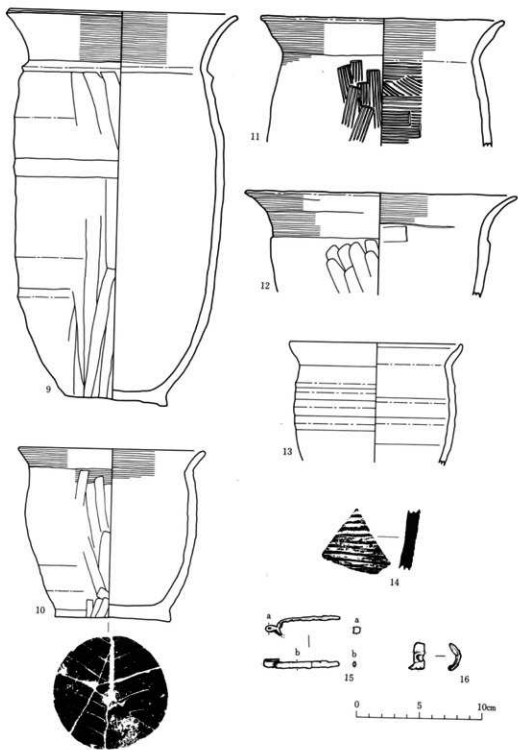
甕形土器は、相対的に非ロクロのものが多い。No 9はカマド内出土のため二次火熱を受けており、暗赤褐色を呈す。底部縁の突出は部分的に剝離している。また底部面には単位の大きいヘラ削り痕がある。No 10は木葉底の甕。この場合も火熱を受けている。No 11・12は反転復元に依る。肩部と体部の境界が明瞭なもの (No 12)、不明瞭なもの (No 11) の二種で成形技法も各々異なる。No 13はロクロ成形。

須恵器甕と思われる唯1点の破片はNo 14である。堆積土中からのもので、外面に叩目、内面にロクロナデが残る。

鉄製品は2点ある。No 15は燻子と呼ばれるもので、本来はピンセット様を呈す。この種の遺物は本遺跡内で5点出土しており、その内の1点である。No 16は鑽状を呈すと思われるが器種は不明。



第27-2図 18号(Gj12)竪穴住居跡出土遺物



第27—3 图 18号(Gji2)竖穴住居跡出土遺物

第18-1表 坏形土器 一覧

実測図番号	写真番号	種別	切磨	調整技法	調整部位	法 量 (cm)					外傾角(度)	備 考	
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)	H/b	H/d			
1	A	類	ヘラ切	無調整		13.2	8.0	4.0	1.7	3.3	55	完形品 (P, 直土)	
2	95	A	類	ヘラ切	無調整	体部下端 ~底面	13.5	7.2	4.4	1.9	3.0	54.5	完形品。内面に少量のカーボン付着。(カマド内)
3	96	B	類	調整のため不明	回転ヘラ磨り	(12.4)	8.0	3.5	1.6	3.5	57	自然の色調 (7.5YR5/6) の割に比較的硬質。(堆積土)	
4	A	類	ヘラ切	無調整		(14.0)	8.8	3.4	1.6	4.1	51.5	(堆積土)	
5	97	B	類	ヘラ切	無調整		(13.2)	(7.0)	3.5	1.9	3.8	48.5	磨滅著しい。
6	A	類	ヘラ切	無調整		(13.2)	(7.6)	4.5	1.7	2.9	58	(床面)	
7	C	類	ヘラ切	手捻ヘラ磨り	体部下端	(14.0)	6.4	4.7	2.2	3.0	50	磨滅気味。(床面)	
8	C	類	磨滅のため不明	—	—	(14.6)	9.0	4.9	1.6	3.0	59	(床面)	

第18-2表 甕形土器 一覧

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大脚径	口縁部	体部	口縁部	体部	
9	—	土師器	18.5	8.2	31.0	16.8	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	不 明	(カマド)
10	—	土師器	15.0	9.3	13.5	13.8	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ?	水薬区。(南東隅ピット内)
11	—	土師器	(19.6)	—	—	—	ヨコナデ	刷毛目	ヨコナデ	刷毛目	暗褐色。(床面)
12	—	土師器	(21.9)	—	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	(出土地点不明)
13	—	土師器	(14.0)	—	—	(13.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	胎砂多い。(床面)
14	—	須恵器	拓形瓦。外面甲目。内面ロクロナデ。断面にみる胎土は灰~灰褐色。(Q, 堆積土)								

第18-3表 鉄 製 品 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形状	備 考
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
15	98	鏝	子 一部欠失	比較的良好	58.0	a... 5.50 b... 4.0	a... 5.50 b... 2.0	2.30	*...	同一個体の2破片依りなる。(堆積土)
16	—	鏝状製品	ほぼ片	比較的良好	(径)22.0	9.0	2.50	1.60	長方形	ほぼ円形のリング。(堆積土)

19号 (Id12) 竪穴住居跡 (第28図 第19表 写真図版16・60)

(重複 改築) 同じ平面形の中で旧床面上に20cm~30cmの黒褐色土を埋土し新床面を形成している。以下は旧床面をI期、新床面をII期とし述べるが、II期は竪穴とした範疇になる。
 (規模 平面形 方向) I期、II期とも東西5m、南北4.9m、面積24.5m²の正方形を呈する。
 I期のカマド方向はN-91°-Wであり、II期はカマドがなく南北軸はほぼ真北に近い。
 (堆積土) 1層の黒褐色土と2層の黒色土はII期床面上の堆積土であり、4層はシルトと黒色土のブロックを全般に含んだ黒褐色土で人為的埋土と推察される。

(壁) 比較的良好の遺存で垂直に近い立ち上がりを呈し、検出面までの壁高は、I期床面から40cm～50cm、II期床面から20cmを計る。

(床) I期床面の約4分の1弱の南西部は掘り方技法による構築だが、他は地山面をそのまま利用していて、全般に平坦である。II期は人為的埋土の黒褐色土上面を床面とし貼り床等ではなく焼土も認められなく、床面の汚れも顕著でない。なお、I期カマド袖の上面がII期の床面とほぼ同じ面にある。

(柱穴) 壁外にP₁₀～P₁₆の柱穴状ピットを認め、径と深さは順次以下ようになる。P₁₀ 30cm×37cm、11cm P₁₁ 30cm×23cm、18cm P₁₂ 23cm×20cm、12cm P₁₃ 25cm×38cm、17cm P₁₄ 20cm×21cm、16cm P₁₅ 20cm×25cm、14cm P₁₆ 22cm×25cm、17cmで、黒褐色土が堆積土の主体でシルトが混入し、柱痕は、P₁₀・P₁₂・P₁₄で確認され径12cmほどの円形平面である。

位置的には、各壁の上端から65cm～70cm外側にあり、P₁₀・P₁₃は南・北壁の midpoint を結ぶ線上に、P₁₁・P₁₅は東・西壁の midpoint を結ぶ線上にありP₁₀—P₁₃は6.40m、P₁₁—P₁₅は6.35mの間隔をもつ。P₁₅の東延長115cmにP₁₆がある。北西隅のP₁₂は、P₁₁から北へ2.7m、P₁₃から西へ2.85m にあり、北東隅のP₁₄は、P₁₃から東へ2.75m、P₁₅から北2.8m にある。すなわち、P₁₁—P₁₂—P₁₃—P₁₄—P₁₅は、2.7m—2.85m—2.75m—2.8mとほぼ等間隔を示す。南東隅と南西隅ではピットを確認できなかったが、南西隅の場合、未精査の竪穴住居跡があり重複した可能性もある。

以上のように、規模的にはやや浅い点もあるが、一部に柱痕が認められ、位置とほぼ等間隔を示す配列は柱穴と推定できるし、生活面の汚れ状況から、より長期使用とみられるI期に属するものと推察するが確証はない。

(周溝) I期・西壁南半のカマド部分を除き、各壁沿いに認められ幅8cm～13cm、深さ8cm内外を計る。II期、西壁沿いは明瞭でなく、他は、幅10cm～15cm、深さ10cmを計る。

(カマド) I期、西壁南半の中央に位置し、浅い掘り方に埋土し、その上面に構築している。燃焼部火床は、間口60cm、奥行50cmであり、両袖は石を芯材に褐色シルトを用いている。燃焼部奥壁は直に約20cm立ち上がり煙道となって、幅45cm、深さ15cm～20cm、長さ125cmの規模で溝状に西にのび、底面は煙出し方向に高くなる若干の傾斜をもつ。煙出しは径45cm×50cmで検出面から45cmの深さをもち、煙道底面より30cm低い底面となる。

II期 カマド、炉等の施設は認められず、火の使用痕等もない。

(その他の施設) I期床面上にP₁～P₉を検出した。位置的にみて、カマド南側に隣接するP₁～P₄は、貯蔵穴の機能が推察され土器も包含している。これらは重複関係にあつて、旧から新へ順に、P₂→P₃→P₄となり、P₁→P₃で、したがってP₁—P₄となるが、P₁とP₂の関係は明

瞭でない。他に、P₅～P₉があり性格は明確でない。P₅とP₇は床面中央にあり、径100cm、深さ15cmほどの比較的大きなピットで、互いに重複しP₆が新しい、P₈とP₉も重複しP₉が新しい。

II期 伴う施設は検出されない。

(小結) II期とした面は、汚れも少なく、生活関連施設も確認されない。周溝の検出から意図的な構築を想定されるが、実際に使用したか否か疑問が残る。また、カマド施設が認められないことから、本報告書で言う竪穴とする方が妥当であるが、I期との関連で述べた。

出土遺物 (第28-2・3図 第19表)

環形土器4点(台付環1)、甕形土器8点、砥石3点、鉄製品2点、須恵器の破片を利用した焼物台1点、須恵器甕の拓影図1点、計19点を図示した。

環形土器はNo4の台付環を含めてA類のものだけである。(19-1表)

甕形土器は土師器のものだけで、No9を除きロクロ成形である。体部上半に叩目痕を有し、体部下方側にはダイナミックなヘラ削りが施されるタイプが一般的である。(19-2表)

砥石、鉄製品等については一覧表を参照されたい。(19-3・4表)

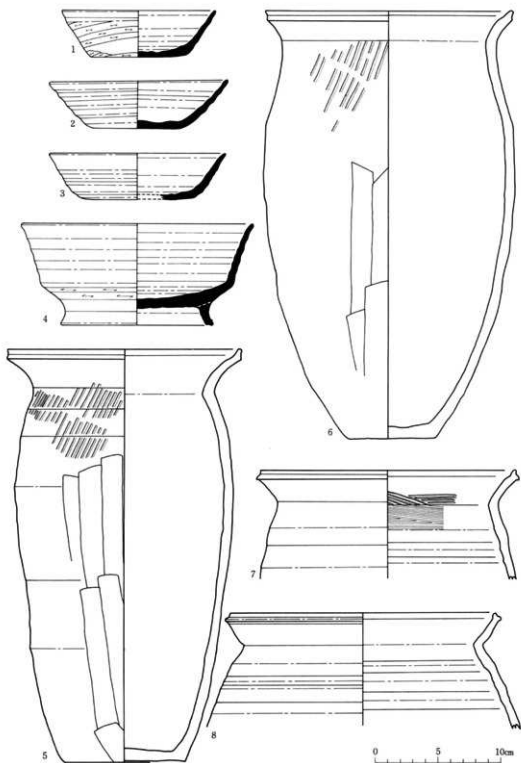
No13は須恵器の破片であるが、焼物の台に転用されている。拓影図に示した叩目部分と断面には灰緑～青灰色の釉がかかっており、光沢がある。内面は中央の円形を呈する部分を除き、灰かぶりの痕跡を留める。白地部分は須恵器の素地に近い部分であり、器面が薄く剥離している所である。恐らくは台付の脚部下端(高台畳付部分)が焼物の表面に密着した跡でもあろう。また、その剥離した部分と対称になる位置には細かい搔痕が観察される。これは、台に接着した焼物を鋭利な道具で剥いだ痕跡と推定される。少なくとも通常の集落内で使用されるものではなく、近辺に配されたであろう窯跡から紛れ込んだものと思われる。

これらの他にも多量の土器片が出土している。量的にはロクロ成形の土師器甕片が最も多い。

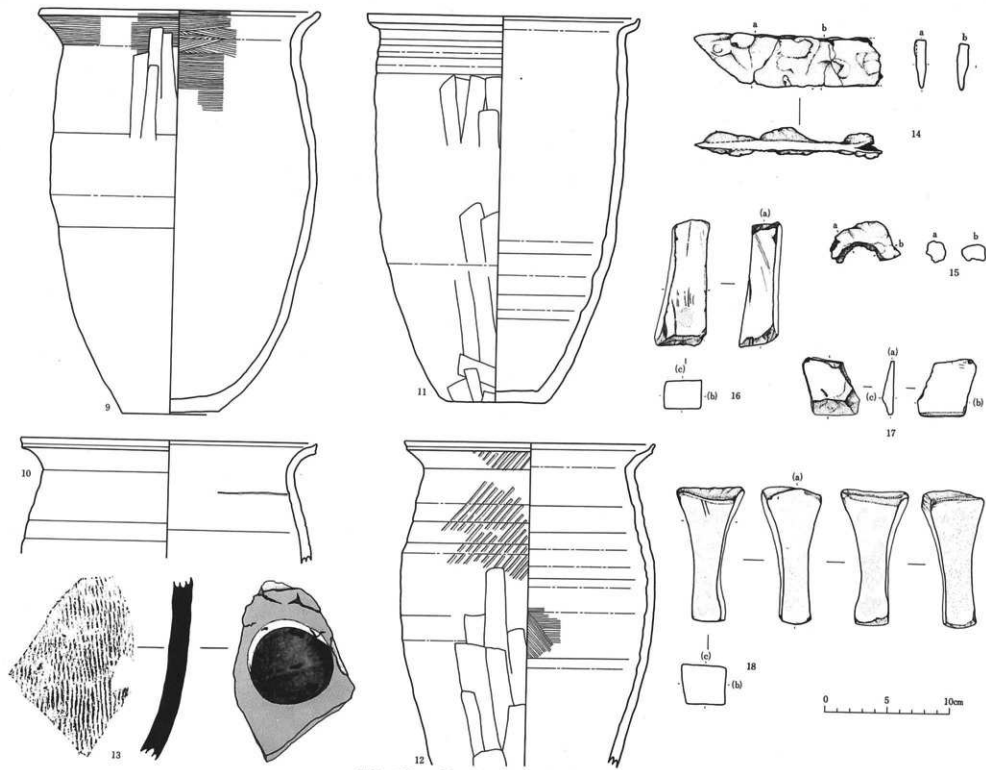
また、堆積土上層からはB・C類の細片が若干、外面に赤色塗彩を施す土師器体部片、外面に叩目を有し黒斑がみられるロクロ土師器片等が出土している。特異なものとしては、東西ベルトセクション中から厚さ1.5cm前後の羽口細片が出土している。推定内径は細片のためはつきりしない。

第19-1 環形土器一覽

実測 図番 番号	写真 番号	種 別	切 離 し	調 整 技 法	調 整 部 位	法 量 (cm)			a/b	a/d	外 傾 角 (度)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	99	A 類	ヘラ切	回転ヘラ切り	体上部 ～底部	12.3	7.6	3.8	1.6	3.2	55	完形品。(床面)
2	100	A 類	ヘラ切	無調整	—	14.2	7.0	4.0	2.0	3.6	46.5	底部に軽いナデ。(カマド左軸)
3	—	A 類	ヘラ切	無調整	—	(14.0)	(9.2)	3.7	1.5	3.8	54.5	(床面)
4	—	台付環	ヘラ切	—	—	11.2	7.4 (脚径) 7.0	4.5 (脚高) 0.4	/	/	/	完形品。脚部に歪み。(床面)



第28—2圖 19号(Id12)豎穴住居跡出土遺物



第28—3图 19号(1d12)竖穴住居跡出土遺物

第19-2表 甕形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外 面 調 整		内 面 調 整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大開口	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
5	—	土師器	(18.8)	9.7	30.0	17.5	(体上半) 叩目 ヘラケズリ	磨 減 顕 著		胎土粗。石英粒多量。(ビット内)	
6	—	土師器	20	7	34.4	20	(体上半) 叩目 ヘラケズリ	磨 減 顕 著		体部に歪み。胎土粗。(カマド部)	
7	—	土師器	(21)	—	—	—	ロクロナデ。水口利用。	水口利用のケキ目		焼成良。(焼土ビット内)	
8	—	土師器	(22.0)	—	—	—	ロクロナデ。水口利用。	ロクロナデ。一部ケキ目。		前部が歪る。(焼土ビット内)	
9	—	土師器	22.6	7.8	32.4	21.4	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ ヘラナデ		磨減顕著。煤付着。(カマド内)	
10	—	土師器	(24.0)	—	—	—	叩目+ロクロナデ	ヘラナデ	?	(カマド部+焼土ビット+堆積土)	
11	101	土師器	22	8.2	30.9	20.3	ロクロナデ ヘラケズリ	ヘラナデ	不 明	胎土粗。(床面+カマド部)	
12	—	土師器	(20.2)	—	—	20.4	上半叩目、以下ヘラケズリ	一部ヘラナデ		焼成良。(床面)	

第19-3表 鉄 製 品 一 覧

実測図番号	写真番号	種 別	現 存 部 位	遺 存 状 態	法 量				断 面 形	備 考
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
14	102	直 刀	刃 部	錆の割に残りよし	152.90	39.30	7.50	111.50	楕 形	(床面)
15	—	不 明	破 片	不 良	—	—	—	36.80	—	炭酸顕著。計測時。(堆積土)
—	—	釘 状	破 片	不 良	50.50	—	—	5.0	方 形	(床面)

第19-4表 砥 石 一 覧

実測図番号	写真番号	法 量 (mm・g)				使用面 の 数	色 調	材 質	産地・地質年代	備 考
		(a) 長さ	(b) 幅	(c) 厚さ	重さ					
16	6	99.0	32.0	24.10	158.0	4	灰白 (2.5Y・5)	斜長石流紋岩	帯石盆地西南部。中新統	
17	7	43.0	38.50	9.0	18.0	4	灰白~褐色 (7.5YR・5~6)	斜長石流紋岩	帯石盆地西南部。中新統	薄手。(堆積土)
18	8	109.20	33.50	33.0	200.50	5	灰白 (2.5Y・5)	斜長石流紋岩	帯石盆地西南部。中新統	付着物あり。

(法量の(a)・(b)・(c)は実測図中に付された点での計測値を表わす。以下の長も同様とする。)

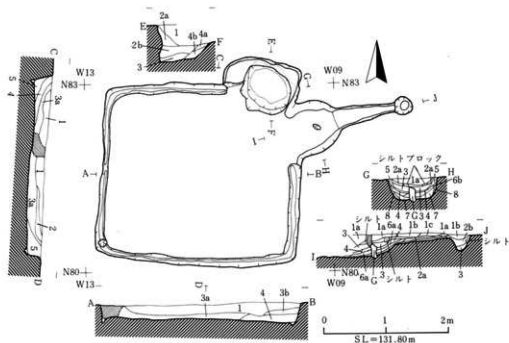
20号 (Jc15) 竪穴住居跡 (第29図 第20表 写真図版17・61)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西2.9m、南北3.2m、面積7.95m²のほぼ正方形に近い平面形を呈する。カマド方向軸はN-80°-Eである。

(堆積土) 堆積状況はレンズ状を呈し、暗褐色土と黒褐色土が主体となり、1層のシルト含みの暗褐色土、2層から4層までの黒褐色土、壁ぎわに流れこむ暗褐色土の5層と三大別ほどになる。部分的に木根等の攪乱が認められた。

(壁) 西壁の一部が攪乱で破壊されているが、総じて遺存状況は良好であり、垂直に近い立



A-B C-D		
1	10YR5 暗褐色土	シルト混入
2	10YR5 暗褐色土	*
3a	10YR5 *	シルト粒を若干含む
3b	10YR5 *	若干のシルト混入
4	10YR5 黒色土	粘性 弱きみり
5	10YR5 暗褐色土	シルト多く含む
E-F		
1	10YR5 暗褐色土	A-Bの1層と類似
2a	10YR5 暗褐色土	非常にやわい
2b	10YR5 *	2a層より更にやわい
3	10YR5 黒色土	非常に固くしまりよい
4a	10YR5 暗褐色土	黒色シルト混入 炭、焼土を含む
4b	10YR5 *	大粒の焼土、炭を含む

G-H I-J		
1a	10YR5 暗褐色土	シルトアロップを含む
1b	*	焼土粒を含む
2a	*	シルト、焼土粒を1b層より多
2b	10YR5 暗褐色土	シルト質土 シルトアロップを含む
2c	*	シルト質土 焼土、炭を含む
3	10YR5 暗褐色土	シルト質土 黒褐色土混入、焼土粒若干
4	5YR5 赤褐色土	焼土 硬さなくやわい、炭若干
5	10YR5 暗褐色土	シルト 黒褐色土含む、非常に硬い
6a	15YR5 暗赤褐色土	焼土 しまりよい、シルト質焼土粒
6b	*	焼土 シルト質焼土粒多量
6c	*	焼土 シルト質焼土粒少
7	15YR5 暗赤褐色土	焼土 黒褐色土、焼土粒混入
8	15YR5 *	焼土 シルトの焼土粒 しまりよい

●本図等による複製

第29-1 図 20号(Joi15)竪穴住居跡

ち上がりをもち検出面までの高さは20cm~30cmを計る。北壁東半で貯蔵穴に関連し張り出し部がある。

(床) ほぼ全面に掘り方をもち、約5cm~7cmの厚さで黒色土とシルトの混土を用い床面を構築しており、ほぼ平坦である。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 北東隅のカマドと貯蔵穴部分を除く壁沿いに認められるが、西壁中央部に約10cmほどの切れがあり、幅、深さとも約8cmほどを計る。

(カマド) 東壁の北端に位置し、燃焼部は壁外に張り出し、掘り方等は特に認められないが断面図G-Hの8層のように、側壁にシルトを貼っている。火床は間口60cm奥行70cmあり、ほぼ中央に支脚石をもち、そこから緩傾斜で上がり煙道に達する。煙道は幅15cm~35cm、深さ5cm~18cm長さ160cmの溝状で東にのび煙出しとなる。煙出しの径は約30cm、深さ25cmを計り、底

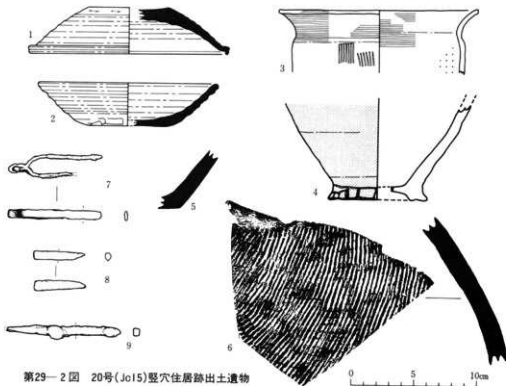
面は煙道底面より約20cm低い。

(その他の施設) 北壁の東半で、東西100cm、南北50cmほどの長方形の張り出しがあり、この張り出しの中に、径70cm×80cm、床面からの深さ20cmのピットがあり、北側下端は奥に挟りこまれている。堆積土は黒褐色土および黒色土と南縁の崩壊土かとみられる焼土と炭を含む黒色土とシルトの混合土がある。なお、長方形張り出し部の西側部分に、北壁に連続するように床面より約10cmほど高い段差を認め、ピットとの先後関係も想定されるが確認するものはない。何れも、竪穴住居跡の堆積土1層を上にもっており、住居跡に伴った施設であって、カマドに近接する位置的な面からして貯蔵穴と推定される。

出土遺物 (第29-2図 第20表)

環形土器1点、須恵器蓋1点、甕形土器2点、須恵器拓影図2点、鉄製品3点、計9点の遺物を図示している。

土器はカマド近くに集中して出土するが、量はそう多くはない。須恵器蓋は図示したものの他に、別個体が1点破片として出土している。環はA類のみの出土である。No 2は反転復元図であるが、推定口径約14.2cm、推定底径7.0cm、器高3.4cm大のもの。体部の凹凸が激しく沈線様を呈する部分もある。体部下端から底面は手持へラ削りが為されているため、切離しは不明。堆積土内からの出土。



第29-2図 20号(Jc15)竪穴住居跡出土遺物

第20-1表 甕形土器 一覽(須恵器片除く)

写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
		口径	底径	器高	最大径	口縁部	体部	口縁部	体部	
3	土師器	(16.0)	—	—	—	ヨコナデ	刷毛目	不 明	不 明	(層位不明)
4	土師器	—	(18.0)	—	—	—	赤塗のた まなび、一 部ニナツツ	—	ヘラミダキ?	(堆積土。但し、東カマドに同一個体あり)

第20-2表 鉄 製 品 一 覧

写真番号	種別	残存部位	遺存状態	法 量				断面形状	備 考
				長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)		
7	103 鍬子	底 部 欠 失	比較的良好	75.0	7.25	2.50	4.60	長 方 形	(床面)
8	— 刀子	刃 部	比較的良好	40.0	6.0	4.50	2.70	先端のある 短形	先端部やや湾曲。(床面)
9	104 鉄 鍬	端 部 欠 失	鍬の剝に残りよし	90.50	6.0	5.0	8.80	方 形	鍬身長…(13.20)mm (床直上)

土師器甕は2点図示したが何れも非ロクロ成形である。No 4は胴部が球状に膨らむと思われ外面に赤色塗彩が施されるのが特徴。

須恵器甕片は拓影図の2点。このうちNo 5は体部下端と底部の一部破片である。平底を呈すもので、球胴形の甕と推される。

鉄製品は3点あるが、一覽表を参照されたい。なお、No 7の鍬子については後掲の別項を参照されたい。

21号 (Jd50) 竪穴住居跡 (第30図 写真図版17・61)

(重複 改築) なし

(規模 平面形 方向) 東西3.3m、南北3.25mで約8.0m²の面積をもつ正方形に近い平面形を呈し、カマド方向の軸線はN-184°-Eである。

(堆積土) 概ね黒褐色土による単層であり、部分的に焼土粒と炭を含み、土器片も若干散在する。壁付近で黒色土がみられる。

(壁) 床面からやや外傾して立ち上がり、壁高は約20cmである。

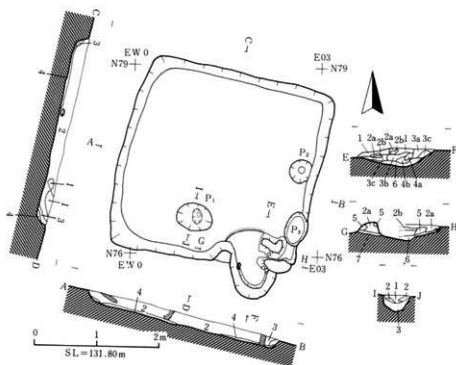
(床) 暗褐色地山シルト面を利用し貼床等を認めない。ほぼ平坦な床面である。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 南壁東端に位置し、煙道、煙出しは確認されない。燃烧部は壁外に半円状に張り出して、一旦掘りこんだ後に黒色土を人為的に埋めて構築したものと思察される。燃烧部焼土上に、下部が焼け赤化したシルトが乗っており上部の陥落したものとみられる。

(その他の施設) P₁~P₃を確認した。P₁は、約44cm×55cmの径で30cmの深さを持ち、堆積



A-B-C-D		
1	10YR片	黒褐色土がアロウ状に入る
2	10YR片	黒褐色土 部分的に焼土粒あり、土器包含
3	10YR片	黒褐色土
4	10YR片	暗褐色土がアロウ状に入る

I-J		
1	10YR片	黒褐色土 土器片包含
2	10YR片	" 焼土、灰を含む
3	"	" 焼土多、灰、土器片包含

●本欄等による推定

E-F-G-H			
1	10YR片	黒褐色土	焼土若干混入
2a	7.5YR片	暗褐色土	シルト 焼土の一部
2b	10YR片	にじい黒褐色土	シルト質土 2aの焼けたもの
3a	5YR片	暗赤褐色土	焼土 土器片を含む
3b	5YR片	暗赤褐色土	焼土 灰を含む
3c	5YR片	暗褐色土	焼土 腐植質土多量に混る
4a	7.5YR片	暗褐色土	シルト 大粒で赤味をおびる
4b	5YR片	暗赤褐色土	シルト 焼土を多量に含む
5	10YR片	黒褐色土	黒色土シルト混合
6	5YR片	"	"
7	10YR片	"	若干の焼土を含む

第30-1図 21号 (Jd50) 竪穴住居跡

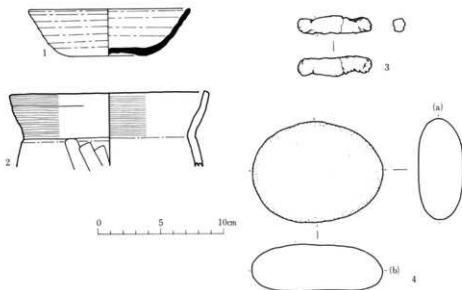
土中に土器片を包含する。P₂は約30cm×36cmの径で深さ10cmであり、P₃は約55cm×30cmの径で深さ5cmあり、堆積土に土器片を包含する。位置的にP₁とP₃は貯蔵穴である可能性もある。P₂の性格は明瞭でない。

出土遺物 (第30-2図)

出土遺物は少なく、図示したのはA類・土師器甕・鉄製品・石等各1点ずつである。

No.1のA類は、口径12.3cm、底径6.2cm、器高3.8cmの大きさで、ヘラ切無調整の坏である。外面底部に軽いナデ痕が観察されるが、再調整を意図したものではあるまい。灰白色を呈し、胎土・焼成共良質の坏である。

No.2は非ロクロ成形の甕。反転復元に依る。推定口径約16cm大。口縁が内湾するような器形であり、外面の上方には沈線様の痕跡が残る。口縁部は内外面共ヨココナア成形し、外面体部にはヘラ削りが施される。内面は磨滅のため不明である。



第30—2図 21号(Jd50)竪穴住居跡出土遺物

No 3は鉄製品であるが、器種不明。住居跡内ピットからの出土。大きさ等については後掲する一覧表を参照されたい。

No 4は堆積土中からの出土。両輝石安山岩を材質としている。住居跡との関わりは不明である。

22号(Je15) 竪穴住居跡 (第31図 第21表 写真図版17・61)

(重複 改築) No 1とNo 2の二基のカマド跡を認め、No 1を廃棄しNo 2を新設したものであるが、No 1カマド時の床面の一部に貼床をし、No 2カマド時の床面としている。住居跡全体に及ぶ増改築等は認められない。

(規模 平面形 方向) 東西、南北とも4.05m No約14.82m²の面積をもち、正方形の平面形を呈する。カマド方向の軸線はNo 1カマドでN-7°-E、No 2カマドでは、N-94°-Eである。

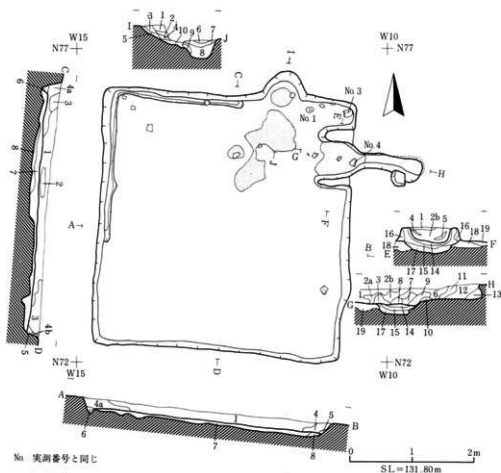
(堆積土) 黒褐色土を主体とするが、腐植質土にシルトの混合したもので、シルト量の多少と壁の崩壊土等で5層に細分できるが、大差を認めない。

(壁) 遺存は良好で、壁高は平均し約20cmある。

(床) 床面構築のための掘り方をもち、黒色土とシルトの混合土をたたき込んで床面としている。No 2カマド使用時には、カマド付近で、No 1カマド使用時の床面上に黒色土とシルトの混合土を薄く貼って床面としている。すなわち、カマド付近の床は、新旧二枚の面をなす。何れも、ほぼ平坦な床面である。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 北壁中央から西部分と、西壁の北から南へ約3分の2弱の部分に認められ、上幅で



No. 実測番号と同じ

A-B C-D

1	1335瓦	焼土	黒色シロ土層	焼土アロップ	炭灰ナシ
2	1335瓦	+	黒色シロ土層	1層上アロップ多量	アロップ(内)込
3	1335瓦	+	+	アロップ	焼土
4a	1335瓦	+	黒色シロ土層		
4b	1335瓦	焼土	黒色シロ土層		
5	1335瓦	焼土	シロ土		
6	1335瓦	焼土	焼土		
7	1335瓦	焼土	シロ土	シロ土層	
8	1335瓦	焼土	シロ土	+	

1-2

1	1335瓦	焼土	シロ土	焼土層	シロ土多量	焼土アロップ
2	1335瓦	焼土	+	焼土層		
3	1335瓦	焼土	シロ土	焼土層		
4	1335瓦	焼土	シロ土	焼土層	焼土アロップ	
5	1335瓦	焼土	シロ土	焼土層	焼土	
6	1335瓦	焼土	シロ土	焼土層	炭	遺物あり
7	1335瓦	焼土	シロ土	焼土層	焼土アロップ	
8	1335瓦	焼土	シロ土	焼土層	炭灰若干	中ナシ
9	1335瓦	焼土	シロ土	焼土層	焼土アロップ	
10	1335瓦	焼土	シロ土	焼土層	シロ土	

E-F G-H

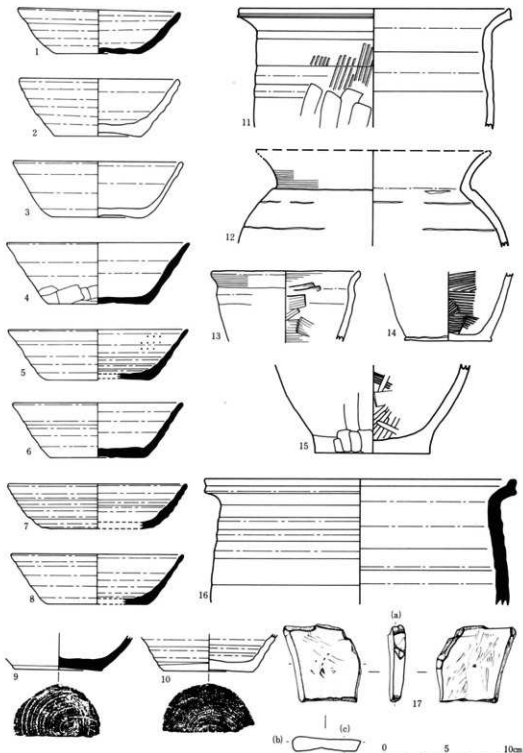
1	1335瓦	焼土	黒色シロ土層	炭	焼土若干
2a	1335瓦	焼土	シロ土	シロ土多量	炭
2b	+	+	黒色シロ土層	2層上アロップ多量	炭
3	1335瓦	焼土	シロ土	焼土層	
4	+	+	+		
5	1335瓦	焼土	焼土層	焼土アロップ	
6	1335瓦	焼土	黒色シロ土層	焼土	
7	+	+	焼土層		
8	1335瓦	焼土	シロ土	焼土アロップ	
9	1335瓦	焼土	焼土層	焼土アロップ	
10	1335瓦	焼土	焼土層	焼土アロップ	
11	1335瓦	焼土	焼土層	焼土アロップ	
12	1335瓦	焼土	焼土層	焼土	
13	1335瓦	焼土	焼土層	焼土	
14	1335瓦	焼土	焼土層	焼土	
15	1335瓦	焼土	シロ土	焼土アロップ	
16	1335瓦	焼土	シロ土	焼土アロップ	
17	1335瓦	焼土	シロ土	焼土層	
18	+	+	+		
19	1335瓦	焼土	シロ土	焼土層	

第31-1図 22号 (Je15) 竪穴住居跡

約15cm、深さ約10cmである。

(カマド) No 1、No 2のカマドを認めた。遺存の状況と、それぞれの使用時の床面のあり方から、No 1カマドが旧で、No 2カマドが新である。

No 1カマド 北壁東半の中央に位置し、煙道、煙出しは確認されない。燃烧部の一部は壁外に半円状に張り出し、掘り方をもつ構築方法である。



第31—2图 22号(Je15)竖穴住居跡出土遺物

No 2 カマド 東壁北半の中央近くに位置し、壁内に燃焼部と両袖部を認める。燃焼部は、開口約55cm、奥行約70cmで、残存する高さは約25cmであり、掘り方をもつ構築方法である。袖は黒色土とシルトの混土を主体に用いている。燃焼部から東へ約70cmの煙道がのび、上幅約25cm、検出面からの深さ約20cmを計り、先端に、径約40cmの煙出しをもち、検出面からの深さは煙道とほぼ同じである。

(その他の施設) 認められない。

出土遺物 (第31-2・3図 第21表)

坏形土器10点、甕形土器6点、砥石1点、計17点の実測である。

坏はA類を主としている。そのうちNo 1は大半が浅黄褐色を呈しB類的な要素もあるが、口唇部付近に残る重ね焼痕は灰黄色の須恵器そのものである。また、No 2・3はB類としているが、共存する須恵器と形態的にあまり大きな差を持たない。しかしNo 2は、白橙色軟質の素地上に黒斑を有しており、断面が肥厚していること等と合わせ考えれば、A類とは一線を画すものかもしれない。一方のNo 3は浅黄褐色のB類として分類しているが、No 1のあり方からみてA類の焼き損じの可能性は否定しない。

甕形土器は、ロクロ成形2点、非ロクロ成形4点であり、何れも土師器である。長胴・球胴形の他に小型の器種が混じる。

No 17は石質細粒凝灰岩の砥石である。薄手のもので4面使用。両面の中央に若干の窪みを持ち、刺突痕がある。携帯用であろう。

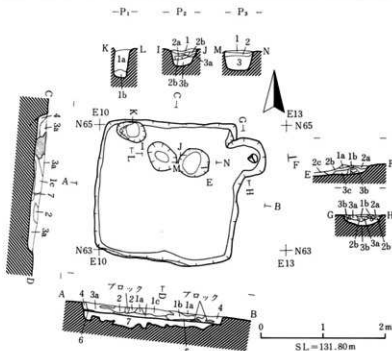
その他土器破片としてB・C類の体部細片が堆積土中から、またA類(へら切・底径7.7cm)底破片がカマド付近から出土している。なお、No 12・15の球胴形に関わると思われる破片も多い。

第21-1表 不 形 土 器 一 覧

実測図番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			a ₁ /b	a ₂ /d	外傾角度(度)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	部 高 (d)				
1	106	A 類	へら切	無調整	/	12.9	6.8	3.7	1.9	3.5	46	(北向カマド東)
2	107	B 類	回転糸切	無調整	/	12.7	7.0	4.6	1.8	2.8	57	磨減顕著。(カマド内)
3	108	B 類	へら切	無調整	/	13.4	7.2	4.5	1.9	3.0	55	磨減。(北東隅)
4	—	A 類	へら切	手磨へり磨 ⁹	体部下端一部	(14.6)	8.0	4.9	1.8	3.0	56	(カマド内)
5	109	A 類	へら切	底部残存少	—	(14.2)	(8.2)	4.1	1.7	3.5	52.5	内外面にカーボン付着。(東カマド増積土)
6	—	A 類	へら切	無調整	/	(13.4)	7.4	4.4	1.8	3.0	54	(床面上)
7	110	A 類	へら切	無調整	/	(14.2)	(7.0)	3.6	2.0	4.0	52.5	(カマド内)
8	—	A 類	へら切	底部残存少	—	(13.8)	(8.0)	4.0	1.7	3.5	54.5	(北向カマド増積土)
9	—	A 類	回転糸切	無調整	/	—	7.0	—	—	—	—	(掘り方埋土)
10	—	B 類	回転糸切	手磨へり磨 ⁹	体部下端一部	—	7.2	—	—	—	—	内外面多量のカーボン付着。底部調整は一部のみ。(増積土)

第21-2表 甕形土器一覽

写真 番号 (本調査 番号)	種別	量 (cm)				外面調整		内面調整		備考
		口径	底径	器高	最大傾	口縁部	体部	口縁部	体部	
11	土師器	(22.0)	—	—	—	ロクロナデ	ヘラケズリ + 印目	ロクロナデ	ロクロナデ	輪積み。(東カマド埋積土)
12	土師器	—	—	—	—	ヨコナデ	不明	不明	不明	反転復元。赤色塗彩部片あり。(東カマド)
13	土師器	(12.0)	—	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	粗雑な作り。暗赤褐色。(床面)
14	土師器	—	7.0	—	—	—	ヘラケズリ	—	刷毛目	胎土粗。二次加熱。(床面)
15	土師器	—	9.2	—	—	—	ヘラケズリ	—	刷毛目+ナデ	赤色塗彩火熱。(東カマド)
16	土師器	(25.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元。(掘り方埋土内)



A-B-C-D

1a	10YR片黒褐色土	シルト質黒色土	焼土粒子若干
1b	〃	シルト質黒色土	明るくシルト質ブロックあり
2	10YR片	シルト質黒色土	シルトの小ブロックあり
3	〃	〃	黒褐色土ブロックをまばらに含む
3a	〃	シルト質黒色土	凝結質土、灰が混る
3b	〃	シルト質黒色土	〃
4	10YR片黒色土	〃	〃
5	〃	〃	上部に焼土を含む
6	10YR片黒褐色土	シルト黒色土混合	〃
7	〃	シルト黒色土混合	細分可、基本的に一括埋積土

E-F-G-H

1a	10YR片黒色土	〃	〃
1b	10YR片黒褐色土	〃	焼土少量混入
2a	10YR片	黒色土シルト混合	焼土を多く混入
2b	10YR片黒色土	シルト質黒色土	シルト、焼土ブロック状に点在
2c	15YR片	〃	シルト、焼土少量
3a	15YR片黒褐色土	焼土	シルト質の硬い焼土と明るい焼土
3b	10YR片	〃	黄色い焼土ブロック含む
3c	15YR片	〃	3a層より明るい焼土ブロック多

I-J

1	10YR片黒色土	上部に焼土が混る
2a	10YR片黒褐色土	焼土、黒色土を含む汚れている
2b	15YR片黒褐色土	焼土、明るい焼土を若干含む
3a	15YR片黒褐色土	シルト
3b	10YR片黒褐色土	シルト、黒色土が混る

K-L

1a	10YR片黒色土	非常にやわい、遺物含む
1b	〃	1*層より深い

M-N

1	10YR片黒色土	焼土、灰を含む
2	10YR片黒褐色土	シルト、汚れている、しまりあり
3	10YR片	〃

●本図等による標点

第32-1図 23号(J159)壘穴住居跡

23号 (Ji59) 竪穴住居跡 (第32図 第22表 写真図版18・61・62)

(重複 改築) なし

(規模 平面形 方向) 東西2.3m、南北2.2m、約4.3㎡の面積をもち、ほぼ正方形を呈する住居跡で、カマド方向の軸線はN-89°-Eである。

(堆積土) 攪乱が強く、明確になし得ない部分もあるが、概ね、シルト質黒褐色土と黒色土からなり、シルト質黒褐色土にはシルトのブロックを含む部分もある。

(壁) やや外傾する立ち上がりで、遺存する壁高は約10cmである。

(床) 北西隅の一部分を除き、掘り方による床面構築をしている。床面構築土は、黒色土とシルトの混合土が主体でその厚さは10cm～20cm程度である。

(柱穴) P₂は径約50cm×30cm、床面からの深さ50cmを計る柱穴状のピットであるが、対応するピットが確認されず断定しがたい。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁北半に位置し、燃焼部は壁外に半円状に張り出し煙道と煙出しは認められない。燃焼部の間口は約65cm、奥行約60cmで、残存する高さは約15cmであり、掘り方をもつ構築方法である。また、支脚石が確認された。

(その他の施設) P₁～P₃を確認した。P₂については、柱穴の項で述べた通りである。P₁は、径約40cm×50cmの楕円状の平面で、深さ35cmを計り、P₃は、径約45cm×50cmの円形の平面に、深さ35cmを計る。両者は、北壁から約50cm中央寄りで、カマド軸線上に隣接して位置し、黒褐色土、焼土を堆積土にもち、土器片を多く含むことや規模等に共通点をもち、貯蔵穴も想定される。先後関係の有無は不明である。

出土遺物 (第32-2図 第22表)

環形土器2点(台付環1)、蓋2点、壺形土器3点、計7点の実測。

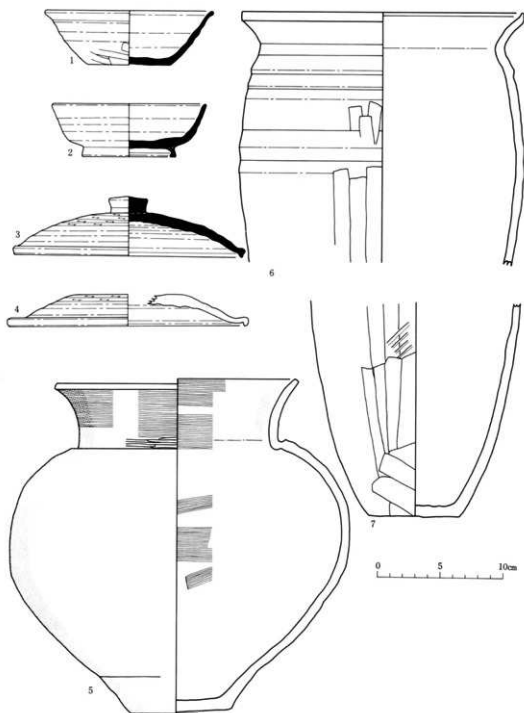
No 1は手持ヘラ削りの調整を有すA類環。床面と堆積土中出土片の接合資料である。推定口径13.2cm、底径6.6cm、器高4.4cm大のものである。

No 2は須恵器台付環。口径12.2cm、脚径7.4cm、器高4.3cm。

No 3・4は蓋。還元焰焼成と酸化焰焼成の二様がある。即ちNo 3はA類、No 4はB類の範疇と

第22表 変形土器一覽

写真 番号 (表裏)	種類	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
		口径	底径	器高	最大脚径	口縁部	体部	口縁部	体部	
5	土師器	19.5	8.1	26.5	27.3	ヨコナデ	ヘラ削り	ヨコナデ	ヘラ削り	肩部説明書。(床面)
6	土師器	(22.6)	—	—	(22.8)	ロクロナデ	叩目 + ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	一部確付書。(床面)
7	土師器	—	7.2	—	—	—	叩目 + ヘラ削り	—	磨減不明	黒炭部が多い。(ピット内)



第32—2图 23号(J159)竖穴住居跡出土遺物

でも言い得よう。

変形土器はロクロ成形2、非ロクロ成形1点。このうち№5は壺形であるが、本遺跡では分類区分上、「球胴（球形）の壺」としている。

24号 (J03) 竪穴住居跡 (第33図 第23表 写真図版18・62)

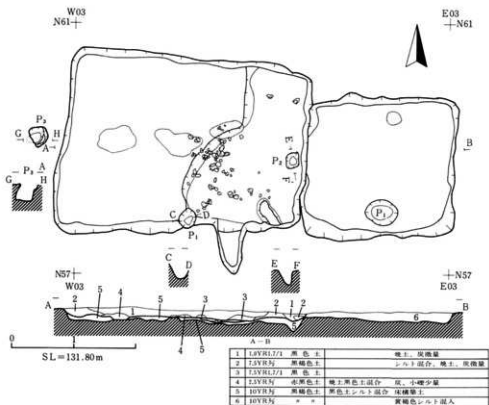
(重複 改築) 東側で1号 (Ka50) 竪穴と重複し、本住居跡が新しい。

(規模 平面形 方向) 東西3.9m、南北2.9mで、約9.62㎡の東西に長い長方形の平面を呈し、カマド方向の軸線はN-179°-Eである。

(堆積土) 1層の部分的に少量の焼土と炭を含む黒色土が主体になり、壁ぎわにシルトを混入する2層の黒褐色土がみられる。5層は床構築土の黒色土とシルトの混合土である。

(壁) やや外傾した立ち上がりで、検出面までの壁高は約10cmである。

(床) 掘り方技法による床面構築で比較的凹凸があり、特に東半は3cm～5cmほど低くなる。また、カマド前の約1.2m四方範囲には、こぶし大程度の礫群がみられたが、施設的または意図的な使用目的をもつものか、単に投棄されたものか不明である。ただ、カマドの破壊状況等か



第33-1図 24号 (J03) 竪穴住居跡・1号 (Ka50) 竪穴

らすると後者の可能性も考えられる。

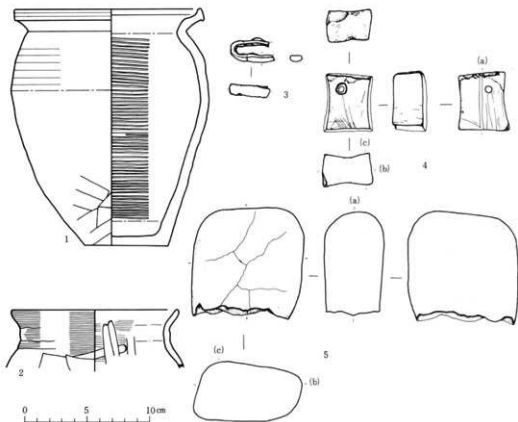
(柱穴) 東壁中央の壁ぎわ P_2 は 1 辺約 20cm の方形プランで深さ約 20cm あり、これに対応し西壁中央から約 20cm 西の壁外に P_3 が位置する。 P_3 は長辺 25cm の方形に近いプランをもち深さが約 27cm あり底が西に入りこむ。 $P_2 \cdot P_3$ はそれぞれ対応する位置にあり、4.2m の間をもち類似するプランをもっており柱穴と考えられる。なお、カマドの西隣り南壁に P_1 があり、径約 25cm、深さ 15cm ほどで柱穴状の小ピットである。

(周溝) 認められない。

(カマド) 南壁の東半中央に位置するが、東袖の一部と推察されるものと、壁外南へ約 80cm のびる溝状の煙道を確認するのみで、然焼部位置には焼土もみられず、凹み等の施設痕もなく構造、規模等は不明である。また、煙道にも焼土や火痕がなく、短期間のカマドで、しかも人為的に破壊された可能性もある。

床面の東西中央線上に乗るように 3ヶ所の現地性焼土があり地床炉的なものと考えられる。

(その他の施設) 認められない。



第33—2図 24号(J03)竪穴住居跡出土遺物

出土遺物 (第33-2図 第32表)

埴形土器2点、鉄製品1点、砥石2点、計5点の実測。

埴形土器は体部～底部の破片が1点だけ出土している。

埴形土器は図示したものの他に、叩目・カキ目・ヘラ削り等を有す破片が若干ある程度。

鉄製品は床面から1点(No3)出土している。腐蝕部が多く一部欠損しているが、柄金具状のものである。西側に隣接する第25号住(Jj12)に同類の鉄製品がみられる。

砥石は2点。No4は携帯用であり、孔がついている。材質は斜長石流紋岩。表面にはタール状のものが付着している。また、全面共何らかの形で使用されている。No5は両輝石安山岩に依る。ヒビ割れしている部分があり、一端が欠落している。4面使用であるが、あまり使い込まれていないようである。

第23表 埴形土器一覽

実測区番号	写真番号	種別	量 (cm)				外面調整		内面調整		備考
			口径	底径	器高	最大脚	口縁部	体部	口縁部	体部	
1	114	土師器	15.2	5.5	19.0	15.9	ロクロナデ	木口刷のナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	カキ目	底面ケズリ。(床面)
2	—	土師器	(13.4)	—	—	—	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	(床面)

25号-I・II (Jj12) 竪穴住居跡 (第34図 第24表 写真図版18・19・62)

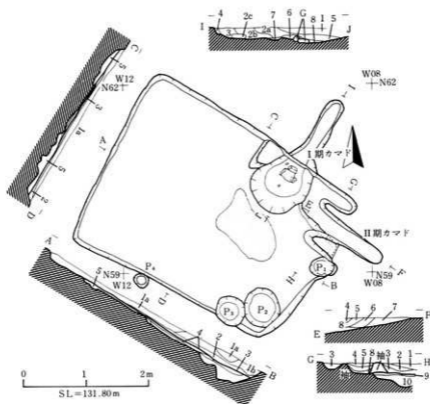
(重複 改築) 増改築が認められる。すなわち、北東向きのカマドのI期と、南東向きカマドのII期で、前者が古く後者が新しい。

(規模 平面形 方向) I期は、II期住居跡構築に当って拡張等があり、No1カマドと、No2カマドの右袖下に北東隅の痕跡を残すのみで、規模、平面形の全貌は不明である。カマド方向軸はN-31°-Eである。II期では、東西3.9m、南北2.9m、面積10.3m²で、東西に長くやや歪んだ長方形を呈しI期を包括する。カマド方向軸はN-121°-Eである。

(堆積土) 1層の黒褐色シルト質の全域に広がり堆積土の主体となる。また、カマド周辺に広がる2層の黒褐色土は、炭化物 焼土粒と粉状パミスをブロック状、または斑点状に多く含んでいる。

(壁) I期については不明、II期の壁は、やや外傾する立ち上がりで、検出面までの高さは約20cmである。

(床) 現況はII期の平面を基本とするが、当然、I期時の構築も包括されることを前提とする。西半西壁寄りには地山を直接床面とし、他は掘り方技法によるシルトと黒色土の混合土を用いて構築しており、この状況がI期の床面と推察され、カマド前面に火熱によって赤変焼土化した固い面が約60cm×1mの範囲に認められ、カマドからの掻き出し物による火熱も想定され



A-B, C-D			
12	100%IV	赤褐色土	灰土層
13	70%IV	赤褐色土	1.5m以上埋没不可見層
14	70%IV	赤褐色土	赤褐色土層、灰土層、灰土層
1	100%IV	河原層	粘土層
2	100%IV	河原層	粘土層
3	100%IV	河原層	粘土層
4	100%IV	河原層	粘土層
5	100%IV	河原層	粘土層
E-F, G-H			
1	100%IV	河原層	粘土層
2	100%IV	河原層	粘土層
3	100%IV	河原層	粘土層
4	100%IV	河原層	粘土層
5	100%IV	河原層	粘土層
6	100%IV	河原層	粘土層
7	100%IV	河原層	粘土層
8	100%IV	河原層	粘土層
9	100%IV	河原層	粘土層
10	100%IV	河原層	粘土層

I-J			
1	100%IV	河原層	粘土層
2	100%IV	河原層	粘土層
3	100%IV	河原層	粘土層
4	100%IV	河原層	粘土層
5	100%IV	河原層	粘土層
6	100%IV	河原層	粘土層
7	100%IV	河原層	粘土層
8	100%IV	河原層	粘土層
9	100%IV	河原層	粘土層
10	100%IV	河原層	粘土層

第34-1図 25号 (J₁|2) 竪穴住居跡 I~II期

る。II期は、I期の平面を拡張し、カマド左袖周辺とI期カマド西の一部は地山面を、東半分ではI期床面上に明黄褐色砂質シルトを貼って新床面とし、カマドを構築したものと推察する。

しかし、床面の赤変焼土化を地床炉的に考え、この面でI時期、その上に貼り床をもって北東カマドをもつII時期、拡張し南東カマドのIII時期とすること、また、北東カマド期に当初の床と貼り床の二枚の面をもってI期とし、I期の二枚の同床面で南東カマドを構築するII期とする推察もできるが、北東カマド時の平面形を大幅に変容させる改築をしていることは、床面の補強も当然と推察でき、貼り床下の当初床面の固さはカマドを伴う本格的住居跡のものと考えられることから、前述のように、当初床面に北東カマドを伴うI期、一部貼り床と拡張し南東カマドを伴うII期とするのが妥当かと考える。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) I期カマド 平面形が不明のため北壁に施設されている以外は明確でない。燃焼部は壁外に張り出し、径約80cm×90cmで若干掘りくぼめ、掘り方埋土中に鉄滓を敷き、その上を火床とし支脚石をもつ。煙道は、燃焼部奥壁から水平にのび、長さ約1m、幅25cm、深さ18cmの溝状をなし、煙出し部は特徴をもたない。

II期カマド 東壁北半に位置し、両袖、燃焼部、煙道部を認める。左袖は、地山シルトをそのまま削り出しており、右袖は、貼り床面上に黒褐色シルト質土に褐色シルトを巻いて構築している。燃焼部は地山を火床とし、火熱による赤変が著しい。煙道は幅25cm、深さ10cm、長さ70cmの溝状で、先端に緩傾斜で立ち上がるが、削平のため先端の煙出し等の状況は不明である。

(その他の施設) P₁~P₃とあるが、東壁中央部にあるP₁は、径約33cm、深さ18cmの円形ピットで、堆積土はしまりのない黒色土1層で、底から鉄製品1点の出土があり、II期に伴うピットと推察される。南東隅のP₂は、径約55cm、深さ5cmほどの浅いピットで、隣接するP₃は、径約43cm、深さ15cmで、堆積土は黒褐色土を主体に水平な3層からなり人為的可能性がある。P₂・P₃は、いずれの時期か確認できないが貯蔵穴様である。

出土遺物 (第34-2図 第24表)

環形土器3点(台付環1)、甕形土器2点、長頸壺・鉄製品・砥石各1点、計9点の実測。

No1は灰白と橙色部分がある。橙色を呈するのは底部の内外面部分であり、やや軟質の感じもする。No4は胎土の粗悪なB類。浅黄橙色を呈している。No2の台付環は脚部が押し潰された様に歪む部分がある。

甕形土器は図示したものの他に、床面或いは貼床面にロクロ成形片が若干出土している。回転糸切痕・叩目等を有するものが主である。

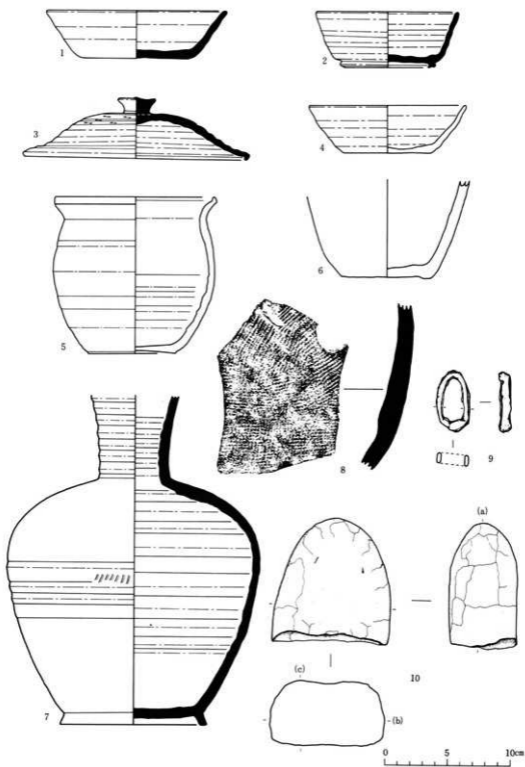
No7の長頸壺は口縁部と体底部の一部欠失。頸部の繫ぎ目痕が明瞭に残る。胎土・焼成共良質の須恵器である。内面は灰白色を呈し、外面は光沢のある灰黒色部分が多い。肩部と底部内面に自然釉がかかる。カマド部と堆積土内出土の破片が接合されたものである。

鉄製品は環状のもので、柄金具と思われる。旧カマド燃焼部からの出土。(No9)

砥石 (No10) は緑色凝灰岩を素材とする。4面が研磨されているが、多く使用されたのは2面である。無数のヒビ割れ痕が、断面の周囲に観察される。

第24表 甕形土器一覽

実測番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外 面 調 整		内 面 調 整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大口径	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
5	118	土師器	12.9	6.9	12.5	12.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切か?明黄橙色。(床面)
6	—	土師器	—	7.2	—	—	—	ヘラケズリ	—	不 明	木敷瓦。その周辺をヘラナデ調整。(カマド)

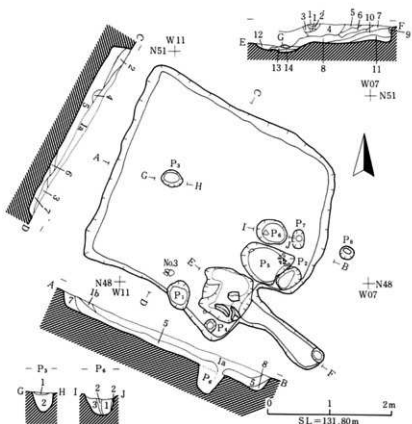


第34—2 图 25号(J12)竖穴住居跡出土遺物

26号 (Kc12) 竪穴住居跡 (第35図 第25表 写真図版19・63)

(重複 改築) 検出面下約10cmの1層と接する5層上面相当で、およそ東西3m、南北2.4mのほぼ方形の範囲に多数の土器片が散在し、中央やや東寄りに、約30cm×60cmの範囲で厚さ1cm×2cmの焼土堆積があり、炭化物の散在を認め、住居跡埋没過程のくぼみを一時利用した痕跡の可能性もある。

(規模 平面形 方向) 東西3.6m、南北3.1m、面積9.57㎡で、東壁が外にふくらみをもつが方形を基本とする平面形である。カマド方向軸はN-127°-Eである。



A-B C-D	
1a	10VRN 黒褐色土 瓦多量、土器片少量
1b	" " 炭化し
2	10VRN " シルトの小ブロック少量
3	" " 上部に褐色シルト多量に散入
4	10VRN 黒色土 粒状のシルト散入
5	15VRN 暗褐色土 粒状シルト多量、褐色土大ブロック散入
6	10VRN 黒褐色土 褐色シルト粒多量
7	10VRN " シルト粒若干
8	10VRN 暗褐色土 シルト
G-H	
1	15VRN 暗褐色土
2	15VRN " シルト多量、炭より薄水痕あり
I-J	
1	15VRN 暗褐色土 炭より薄水痕あり、しまりなし
2	10VRN " シルト粒多量
3	10VRN 褐色土 シルト黄色り成分 径200μシルトブロック、小礫散入

E-F	
1	10VRN 黒褐色土 シルト粒若干
2	10VRN 黒褐色土 焼土
3	15VRN 暗褐色土 褐色土焼土成分
4	15VRN 黒褐色土 炭粒大の焼土多量
5	" " 焼土散入
6	15VRN 暗褐色土 褐色土+シルト成分 径200の焼土ブロック少量
7	" " 褐色土+シルト成分 径300大焼土ブロック多量、炭散少
8	15VRN 黒褐色土 上部に焼土若干、炭散少
9	10VRN 褐色土 シルト褐色土成分
10	10VRN 黒褐色土
11	10VRN 褐色土 シルト褐色土成分
12	10VRN 黒褐色土 炭粒大の焼土多量、炭少量
13	10VRN 暗褐色土 焼土 焼土成分、炭散少
14	15VRN 黒褐色土 径200大の小礫多量

第35-1図 26号(Kc12)竪穴住居跡

(堆積土) 1・5層が主体となる。1層の黒褐色土は多量の炭と少量の土器片を包含し、5層はしまりのよい暗褐色土で、粒状シルト多量と散在する黒色土の大ブロックを含み、土器片は少ない。前述のように、1層に接する5層上面で一時利用の可能性が考えられる。他に、壁ぎわに、7・8層のシルトを含む黒褐色土・暗褐色土が堆積する。

(壁) ほぼ垂直に近い立ち上がりで、検出面までの壁は15cm、30cmあり、南壁で低い。

(床) 全面を掘り方技法によって黒色土とシルトの混合土を用い構築し、比較的平坦な面をしている。

(柱穴) 東・西壁のほぼ中心を結ぶ線上で、西壁から約90cm内側のP₃、東壁から約90cm内側のP₆が柱穴で、両柱穴間は約1.8mである。P₃は径約30cm×25cm、深さ30cmで、堆積土は黒褐色土で柱痕は確認できない。P₆は径約50cm×38cm、深さ30cm、黒褐色土とシルト混土の中に、黒褐色土の径15cmほどの柱痕が認められるが、住居跡堆積土セクションA-Bに示すように、住居跡埋没中に柱の一部が残存していた可能性もある。なお、両柱穴とも底面は礫層である。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁南壁南端に位置する。燃焼部は70cm×70cm、深さ16cmほど掘りくぼめ黒褐色土を埋めもどし、その上面が火床面となり支脚石を認める。袖は、右袖の芯材とみられる長さ25cmと30cmほどの長隙を遺存するが、左袖は遺存しない。燃焼部奥壁からやや立ち上がって、幅30cm、深さ25cm、長さ1.4mほどの溝状煙道が、若干先端へ上がりぎみにのび煙出し部でやや落ちる。

(その他の施設) 柱穴P₃・P₆を除き、住居跡内にP₁・P₂・P₄・P₅・P₇の5ピットがある。P₃以外は柱穴状を呈するものが多いが、5cmから12cmの深さの中にあり柱穴と確認づけるものはない。P₃はカマド北側に位置し、60cm×70cmの楕円形で深さ12cmの規模で、黒色土と褐色土に焼土を粒状に含み土器片を包含する堆積土をもち、貯蔵穴の可能性が高い。

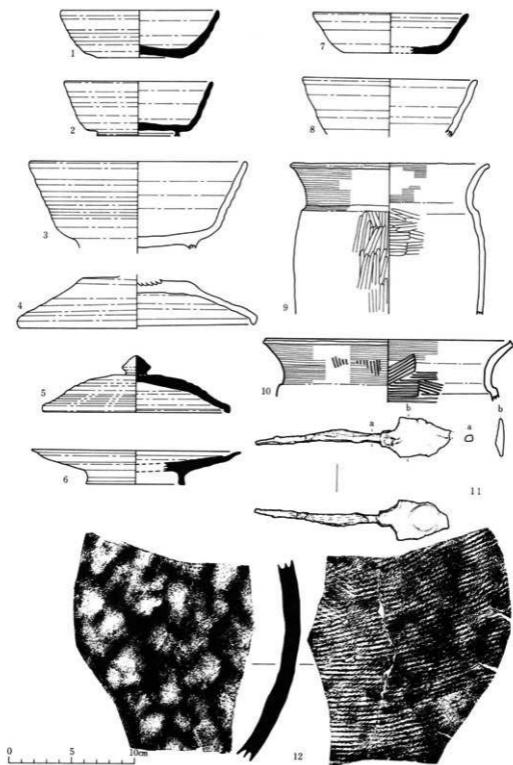
出土遺物 (第35-2図 第25表)

環形土器5点(台付環2)、蓋2点、台付皿1点、甕形土器2点、鉄製品・須恵器拓影図各1点、計12点を図示している。

環形土器はA類2点、B類1点。残る2点は、A類或るいはB類の範疇にも係る台付環である。No.8は黄橙色軟質土器で、触れると土器粉が付く。またNo.3の台付環は、橙色を呈す土師質のものである。反転復元に依る実測であり、床面からの出土。

蓋はNo.4・6の2点。No.4はNo.3の台付環と同様の色調・胎土を呈し、また各々の法量からみて、セットとして使用された可能性がある。

台付皿はNo.5がある。口縁部近くを薄く挽き出し、端部が開いている。脚は直立する形にある。



第35—2图 26号(Kc12)竖穴住居跡出土遺物

No11は床面出土の鉄製品。茎部に木質部分が残存している。全長15.5cm大。若干の錆が付着するが、残りは良好である。この他に器種不明の鉄片が2点堆積土と床面から出土している。

拓影図No12はカマド焚口部出土の須恵器甕片。内面圧痕上に、木口使用のナゲ痕が入る。ナゲの単位は短かく、縦・横に走る。

他に破片として、堆積土中から土師器木葉底部片、A・C各類の体部片若干、須恵器長頸壺と思われる破片等が出土している。

第25表 変形土器一覽

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
			口径	底径	器高	最大幅	口縁部	体部	口縁部	体部	
9	—	土師器	(16.0)	—	—	—	ヨコナデ	ヘリガキ	ヨコナデ	ヘリガキ	反転復元。非ロクロ。胎土粗。(堆積土中)
10	—	土師器	(20.0)	—	—	—	刷毛目+ヨコナデ	—	刷毛目+ヨコナデ	—	反転復元。非ロクロ。(ピット内)

27号 (Ke03) 竪穴住居跡 (第36図 写真版20・63)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3m、南北3m、面積7.98m²の正方形の平面を呈する。カマド方向軸はほぼ真北を指す。

(堆積土) 1層とした黒色土が全体に入り、焼土やシルトを若干含んでいる。中央の床面上に3層とした炭を多く含んだ黒褐色シルト質土が認められる。以上が堆積土の主体をなすものでレンズ状の自然堆積土である。

(壁) やや外傾する立ち上がりを示し、東壁南半では若干崩壊が認められる。検出面までの高さは15cm～25cmを計る。

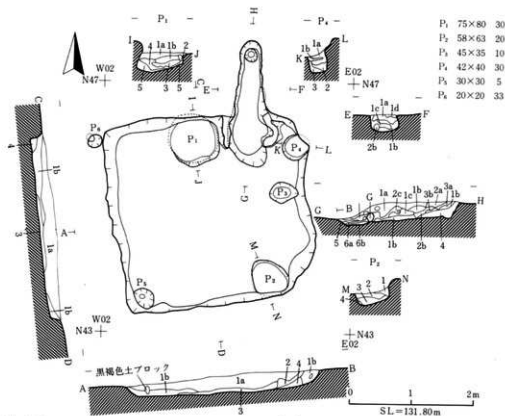
(床) 地山シルトをそのまま利用したほぼ平坦な床面を呈し、南西部を除き、全般に焼土と炭の広がりが見られた。

(柱穴) 竪穴住居跡内にP₃・P₅、外にP₆の小ピットを認めるが、柱穴としての確証はない。それぞれの径と深さは、P₃ 35cm×45cm、10cm P₅ 30cm×30cm、5cm P₆ 30cm×20cm、33cmを計り、P₆の底は北西に入りこむ。

(周溝) 認められない。

(カマド) 北壁の東端近くに位置し、燃焼部は若干掘りこみ地山シルト面を火床とし、間口55cm、奥行50cmを計り、袖の構築はシルトおよび黒褐色土を用いている。煙道はほんの緩傾斜で北に高くなり、幅35cm～50cm、深さ25cmで120cmの長さの溝状を呈し、先端部の煙出し部は煙道底面より約5cm落ちこむが平面的には変化がない。

(その他の施設) 貯蔵穴と推察されるのはカマドの西に隣接するP₁であり、同じく東隣す



- P₁ 75×80 30
- P₂ 58×63 20
- P₃ 45×35 10
- P₄ 42×40 30
- P₅ 30×30 5
- P₆ 20×20 33

A—B C—D			
1a	10YR5/3	黒色土	焼土をやや含む
1b	+	+	シルトが混入
2	10YR5/3	黒褐色土	シルト
3	10YR5/3	+	汚れたシルト
4	10YR1/1	黒色土	灰を多く含む
E—F G—H			
1a	10YR5/3	黒色土	シルト、焼土極少、炭灰あり
1b	10YR5/3	黒褐色土	焼土ブロック若干
2a	+	+	黒色土焼土混合
2b	+	+	+
2c	+	+	+
2d	10YR5/3	黒褐色土	1-2cm大の焼土ブロック混る
2e	+	+	黒色土焼土
2f	+	+	2cmより焼土ブロック多
2g	+	+	焼土ブロック少なく炭若干
3a	10YR5/3	褐色土	灰を含む
3b	10YR5/3	+	焼土
4	10YR5/3	黒褐色土	2cmより明るて混入
5	10YR5/3	褐色土	シルト質焼土
6a	5YR5/3	赤褐色土	焼土
6b	5YR5/3	赤褐色土	焼土

I—J			
1a	10YR5/3	黒褐色土	シルト、焼土混入
1b	+	+	+
2	10YR5/3	黒褐色土	シルト
3	10YR5/3	黒褐色土	炭質質土混入
4	10YR5/3	黒褐色土	シルト
5	10YR5/3	黒褐色土	炭質質土、焼土、灰を含む
6	5YR5/3	+	焼土若干
K—L			
1a	10YR5/3	黒褐色土	粒状の焼土を含む
1b	+	+	1cm大の焼土ブロック混入
2	10YR5/3	黒褐色土	5mmより焼土多
3	10YR5/3	+	焼土をやや含む
4	5YR5/3	+	+
M—N			
1	10YR5/3	黒褐色土	+
2	10YR5/3	黒褐色土	石シルトを含む
3	10YR5/3	黒褐色土	シルト、焼土、炭が混入
4	10YR5/3	黒褐色土	+

第36-1 図 27号(Ke03)竪穴住居跡

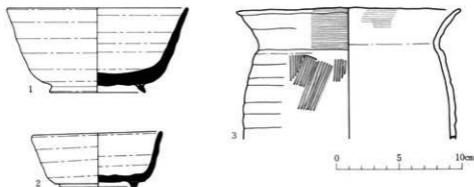
るP₄にも可能性がある。それぞれの径と深さは、P₁ 75cm×80cm、30cm P₄ 40cm×42cm、30cmを計り、P₁は浅い袋状を呈し北側下端は住居跡の壁下に入り込み、P₂の東側下端も壁下に入り、いずれも、堆積土に炭や焼土を含む。

他に、南東隅にP₂がある。径58cm×63cm、深さ20cmを計り、南側下端が住居跡の壁下に入る。堆積土に焼土と炭を含みP₁・P₄と類似の様相を呈し貯蔵穴様である。

出土遺物 (第36-2 図)

環形土器2点、壺形土器1点、計3点の実測。

環形土器は2点共須恵器台付坏である。大きさと脚部の成形が異なる。何れも堆積土中から



第36—2図 27号(Ke03)竪穴住居跡出土遺物

の出土である。

甍形土器はNo3の1点。床面上出土である。胎土は悪く、黒変部分が多い。口縁を内外面共ヨコナデし、外面体部には刷毛目が施される。体部内面の調整は磨滅のため不明である。推定口径は約18cmである。

他に堆積土中からは、A・C類のヘラ切底部片が各1点出土している。

28号 (KI03) 竪穴住居跡 (第37図 写真図版20.64)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 東西3.6m、南北2.5m、ただし、西辺は2mと短かく、約7.88m²の面積をもつ。西側で狭くなる変形した東西に長い長方形もしくは台形を呈する。カマド方向軸はN-89°-Eである。

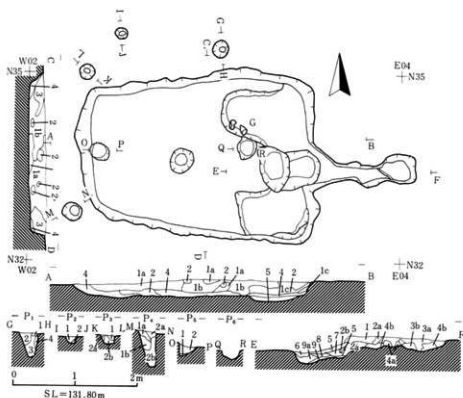
(堆積土) 1層および4層とした黒褐色土が主体となり、上層の黒褐色土はシルトを混入し、その多少によって細分され、入りこんだ状況を示すが土性的に差異はなく、自然の堆積と推察する。

(壁) 東・南壁は垂直に近く、北・西壁では外傾する立ち上がりを示す。検出面までの高さは15cm~25cmを計る。

(床) 西側の約3分の2は地山シルト面を、残る東側は、掘り方をもってシルトと黒色土を用いて構築した床でほぼ平坦である。

(柱穴) 竪穴住居跡内のP₅・P₆、住居跡外のP₁~P₄が柱穴状ピットとして認められた。P₅・P₆は東西中軸線上に乗り、P₅は西壁に接し、P₆は東壁上端から1.1m、相互の間隔は2.4mを計る。P₁・P₃・P₄は、それぞれ壁上端から0.3m内外の壁外に所在し、P₁-P₃-P₄と対状をなし2.2m~2.25mと近似する間隔をもつ。P₂のみは大きくはずれた位置にある。

各ピットの規模は、径と深さを順次に、P₅ 25cm×30cm、20cm P₆ 30cm×35cm、15cm P₁



A-B C-D		
11	JAVEN 黒褐色土	シロ土遺入
12	"	シロ土遺入は層より多
13	"	シロ土遺入は層より多
14	JAVEN 黒褐色土	赤くなく、プロ、チ灰を含まず
15	JAVEN 黒褐色土	シロ土遺入
16	"	黒褐色土
17	JAVEN 黒褐色土	焼土、シロ土若干
2a	JAVEN 黒褐色土	一部を含む
2b	"	2a層より、やや細かい
3a	JAVEN 黒褐色土	焼土、シロ土遺入
3b	"	焼土より中の細かい
4a	JAVEN 黒褐色土	シロ土
4b	"	焼土若干層を成す
5	JAVEN 黒褐色土	焼土若干層を成す、シロ土若干
6	JAVEN 黒褐色土	赤くなく、プロ、チ灰を含まず
7	JAVEN 黒褐色土	赤くなく、プロ、チ灰を含まず
8	JAVEN 黒褐色土	赤くなく、プロ、チ灰を含まず
9	JAVEN 黒褐色土	赤くなく、プロ、チ灰を含まず
10	JAVEN 黒褐色土	赤くなく、プロ、チ灰を含まず
20	JAVEN 黒褐色土	焼土を含む

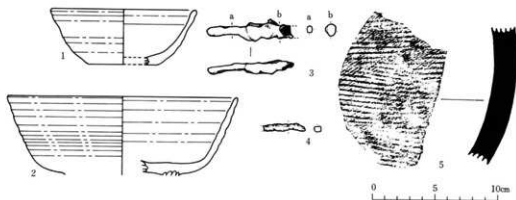
G-H		
1	JAVEN 黒褐色土	焼土若干
2	JAVEN 黒褐色土	シロ土
3	JAVEN 黒褐色土	焼土若干
4	JAVEN 黒褐色土	シロ土
5	"	"
1	JAVEN 黒褐色土	シロ土
2	JAVEN 黒褐色土	シロ土
3	"	"
4	"	"
5	"	"
6	"	"
7	"	"
8	"	"
9	"	"
10	"	"
11	"	"
12	"	"
13	"	"
14	"	"
15	"	"
16	"	"
17	"	"
18	"	"
19	"	"
20	"	"
21	"	"
22	"	"
23	"	"
24	"	"
25	"	"
26	"	"
27	"	"
28	"	"
29	"	"
30	"	"
31	"	"
32	"	"
33	"	"
34	"	"
35	"	"
36	"	"
37	"	"
38	"	"
39	"	"
40	"	"
41	"	"
42	"	"
43	"	"
44	"	"
45	"	"
46	"	"
47	"	"
48	"	"
49	"	"
50	"	"
51	"	"
52	"	"
53	"	"
54	"	"
55	"	"
56	"	"
57	"	"
58	"	"
59	"	"
60	"	"
61	"	"
62	"	"
63	"	"
64	"	"
65	"	"
66	"	"
67	"	"
68	"	"
69	"	"
70	"	"
71	"	"
72	"	"
73	"	"
74	"	"
75	"	"
76	"	"
77	"	"
78	"	"
79	"	"
80	"	"
81	"	"
82	"	"
83	"	"
84	"	"
85	"	"
86	"	"
87	"	"
88	"	"
89	"	"
90	"	"
91	"	"
92	"	"
93	"	"
94	"	"
95	"	"
96	"	"
97	"	"
98	"	"
99	"	"
100	"	"

第37-1図 28号(K103)竪穴住居跡

25cm×30cm、38cm P₃ 25cm×25cm、15cm P₄ 30cm×30cm、55cm P₂ 18cm×22cm、11cm を計る。明らかな柱痕は、いずれにも認められなかったが、P₂を除くピットは、配置的にみて規則性があり柱穴としての可能性が高い。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁のほぼ中央に位置する。燃烧部は浅い掘りこみをもつが、いわゆるカマド構築の掘り方か否か明瞭でない。燃烧部の位置から袖部をもつカマドと想定できるが、袖は遺存しない。煙道は、幅30cm内外、深さ15cmで、90cmの長さの溝状を呈し、煙出し部分は、径50cm、60cmの不整形で煙道底面より若干落ちこむ。



第37-2図 28号(Ki03)竪穴住居跡出土遺物

(その他の施設) 床面中央に、径40cm×40cmの円形範囲に現地性の焼土を認めた。焼土下は約3cmほどの浅い落ちこみを呈するが、強い火熱を受けた様相はない。地床炉的なものとも想定されるが確証的なものはない。

出土遺物 (第37-2図)

出土遺物は全体量が少なく、図示したのは環形土器2点(台付坏1点)、鉄製品2点、須恵器甕拓影図1点、計5点である。

No 1 にはぶい橙色を呈すB類。軟質で歪みがある。No 2 は脚部と底面の一部が欠落した台付坏。ぶい橙色を呈す軟質のものである。第26号(Kc12)竪穴住居跡出土のNo 3 に酷似している。

鉄製品は4点出土しているが、図示したのはそのうちの2点。器種は不明であるが、No 4 の方は釘のようでもある。

No 5 は須恵器甕片の拓影図である。外面に平行叩目が施される。カマド煙道口出土。

29号(La50)竪穴住居跡 (第38図 第26表 写真図版21・64)

(重複 改築) 2号竪穴の東半と重複し、本竪穴住居跡が新しい。カマドは最初のNo 1 と貼り床をし新生活面を形成するNo 2 カマドをもつ。

(規模 平面形 方向) 東西5m、南北3.6m、面積16.15m²の東西に長い長方形を呈し、カマド方向軸はNo 1・No 2 カマドともほぼ真北を向く。

(堆積土) 木根による攪乱が多いが、大別すると、2層としたシルト混りの黒褐色土と5層の部分的にシルトと焼土を含む黒褐色土になる。

(壁) やや外傾する立ち上がりで、検出面までの高さは約30cmである。東壁南半で若干外に張り出すがP₄に関連するものと推察され、他の施設とする確証はない。

(床) 西壁沿いに掘り方技法による床面構築がみられるのみで、他は地山をそのまま床面としたのがNo 1 カマドの時期であり、No 2 カマドの時期には、カマド周辺に焼土混りの褐色シル

トを用い貼り床をしていて、貼り床下にはNo 1 カマド時に関連する焼土が知見できる。

(柱穴) 柱穴と確認できるものは確認できない。

(周溝) 確認できない。

(カマド) No 1 カマド 北壁東半の中央に位置する。燃焼部と袖はほとんど遺存せず全貌は不明であるが、燃焼部は若干落ちこみがあったものと推察される。煙道の長さは1.3m、幅30cm、深さ20cmほどで溝状を呈し、先端での変化はない。

No 2 カマド 北壁のほぼ中央に位置し、燃焼部は、約60cm×110cm、深さ10cm～20cmの掘りこみに黒褐色土等を埋め、その上面を火床部とする。袖の遺存は左袖が良く、右袖は辛じて残るが、黒褐色土およびシルトを用いて構築している。煙道は、先端に向けゆるやかに上がるが、途中で削平のため切れる。現存の長さは約75cm、幅30cmの溝状であり、先き40cmに径40cm×40cm、深さ10cmほどのピットがあり煙出しかと推定される。

(その他の施設) 位置的な点から貯蔵穴と推察されるのがP₁・P₅・P₇である。P₁は径50cm×76cm、深さ30cm規模で位置的にNo 1 カマドに属するかと思われ、P₅は径60cm×60cm、深さ16cmほどで、No 1 カマド燃焼部を切っておりNo 2 カマドに属し、P₇は径110cm×95cm、深さ20cmほどでNo 2 カマドに属するもので、P₅・P₇の先後関係の有無は不明である。なお、堆積土は、P₁が記録なく不明、P₅は黒褐色土、P₇は褐色シルトと黒褐色土を主体にし、各ピットとも遺物を含む。

その他、P₂・P₃・P₄・P₆は比較的大きなプランをもち貯蔵穴様であり、深さは9cm～20cmにあり、堆積土に焼土を多く含む特徴がある。また、P₈・P₉は小ピットで深さ6cmと9cmで、堆積土は黒褐色土の単層である。これらが、いずれのカマドに属するか明らかでない。

出土遺物 (第38—2 図 第26表)

坏形土器12点(台付坏3点)、甕形土器4点、砥石1点、須恵器拓影図1点、計18点を図示している。

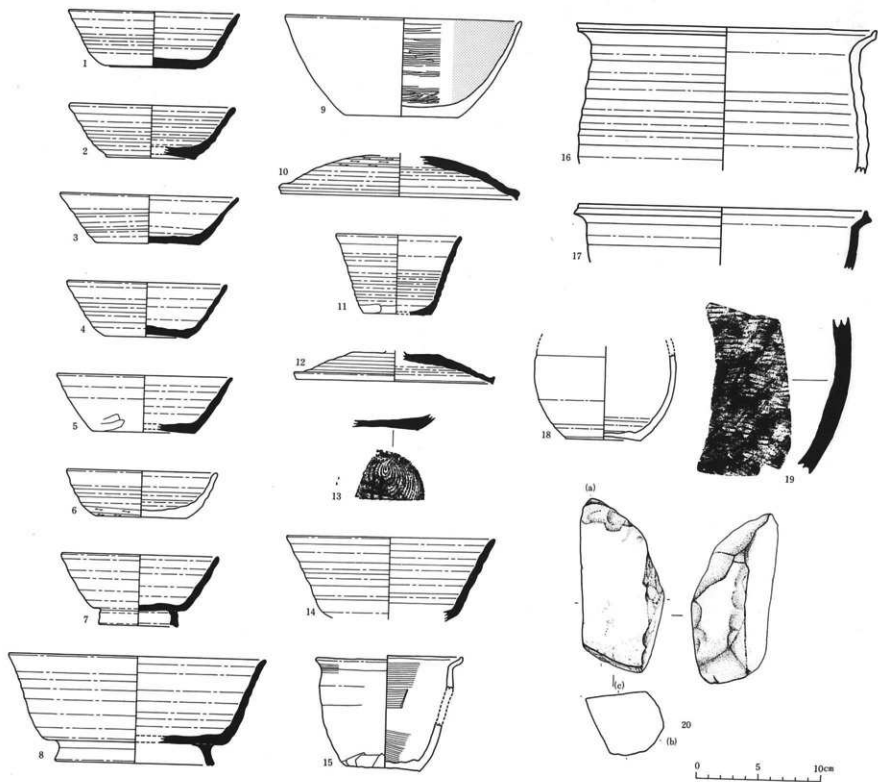
坏形土器はA類7点、B類1点、C類1点となっている。No 6は赤褐色を呈す糸切無調整のB類坏。No 9のC類坏は、反転復元に依るものであるが大きな坏である。底面に×印を有している。切離しはヘラ削り再調整のため不明。他のA類はNo 4を除き、還元焙焼成に依る色調を呈している。No 4はややにぶい黄色がかっている。

No 7・8は須恵器台付坏。No 9は器形からみて同類の範疇のものと推される。

甕形土器はNo 15・16・18の3点が土師器、No 17・19の2点が須恵器である。土師器はNo 15を除き、ロクロ成形に依る。

砥石はNo 10の1点。斜長石流紋岩を素材とする4面使用の砥石。最大長13cm位である。

他に、焼土中からヘラ切A類底部片、堆積土中より赤色塗彩の球胴甕片1点等が出土している。



第38—2图 29号(La50)整穴住居跡出土遺物

第26-1表 坏形土器一覽

実測区番号	写真番号	種別	切離し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)			$\frac{a}{b}$	$\frac{a}{d}$	外傾角度(°)	備 考
						口 径 (a)	底 径 (b)	器 高 (d)				
1	128	A 類	調整のため不明	手掛へう削り	底 部	(13.6)	7.6	4.5	1.8	3.0	55	(P ₁ 内)
2	—	A 類	回転糸切	無 調 整	/	(13.0)	(7.0)	4.2	1.9	3.1	54.5	切離しのロクロ回転削い。
3	—	A 類	へう切	無 調 整	/	(14.3)	8.2	4.0	1.7	3.6	51	(増積土)
4	—	A 類	回転糸切	無 調 整	/	(12.8)	6.6	4.4	1.9	2.9	54.5	(床面)
5	—	A 類	へう切	手掛へう削り	体 部 下 端	(14.0)	(8.2)	4.5	1.7	3.1	57	(P ₁ 焼土中+増積土2層)
6	—	B 類	回転糸切	回転へう削り	体 部 下 端 — 底 部	(12.0)	7.2)	3.7	1.7	3.2	57	磨滅顯著。
7	—	台付坏	不 明	/	/	(12.4)	$\frac{7.7}{6.1}$ (増積)	$\frac{5.7}{4.2}$ (増積)	/	/	/	(増積土)
8	—	台付坏	へう切	/	/	(20.6)	$\frac{14.0}{12.6}$	$\frac{8.6}{1.6}$	/	/	/	
9	—	C 類	磨 滅	手掛へう削り	底 部	(19.0)	9.0	7.9	2.1	2.4	58	外面磨滅顯著。(床面上)
10	—	蓋	調整のため不明	回転へう削り	体 上 部	(19.0)	—	—	/	/	/	J159住No3に類似。フマリ欠失。(増積土)
11	—	A 類	へう切	手掛へう削り	体 部 下 端 — 底 部	(10.1)	(5.5)	6.3	1.8	1.6	70.5	(床面)
12	—	蓋	調整のため不明	回転へう削り	体 上 部	(15.8)	—	—	/	/	/	フマリ欠失。(P ₁)
13	—	A 類	回転糸切	無 調 整	/	—	—	—	—	—	—	底部片。外面に磨着。(増積土2層)
14	—	台付坏	底部欠失	/	/	(16.6)	—	—	/	/	/	(西コマド内+増積土)

第26-2表 甕形土器一覽

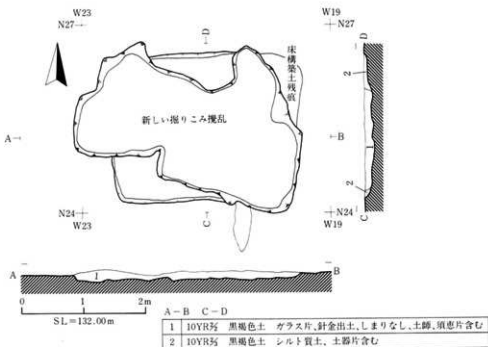
実測区番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外 面 調 整		内 面 調 整		備 考
			口 径	底 径	器 高	最大傾	口縁部	体 部	口縁部	体 部	
15	—	土師器	11.9	5.9	9.2	10.7	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	底部内面ナデツケ。
16	—	土師器	(23.8)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元。(コマド燻道部)
17	—	須恵器	(24.0)	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	(ビット内出土)
18	—	土師器	—	6.0	—	—	—	ロクロナデ	—	ロクロナデ	回転糸切。(西側コマド)
19	—	須恵器	拓影図。外面叩目、内面押正供。壺形土器になるか？								

30号 (Lb24) 竪穴住居跡 (第39図)

(重複 改築) 認められない。

(規模 平面形 方向) 大半が現代の攪乱をうけ全体は明瞭でないが、現存する部分から推定すると、東西2.9m、南北2.3mの東西に長い長方形で、南壁からのびる焼土部分を煙道の痕跡とし、コマド方向軸はN-180°-Eとなる。

(堆積土) 攪乱部分が多く、堆積土の確認は明瞭でないが、1層は攪乱土で大半をしめ、針金、ガラス片と土器の細片を含む、2層が攪乱のない黒褐色土で、南西隅、北壁側に認められ



第39—1図 30号(Lb24)竪穴住居跡

る初期的な自然堆積土である。

(壁) 南西隅と北壁中央で確認できるのみで、壁高は5cm～8cmである。

(床) 全貌は不明であるが、遺存する南西隅では浅い掘り方を認めた。

(柱穴) 現状では不明。

(周溝) 遺存部分では認められない。

(カマド) 南壁東半の中央に、幅25cmで南に80cmのびる火熱により焼土化した地山を認める。これは、煙道の底部分の残存と考えられ、カマドの施設が推察できる。

(その他の施設) 現状では不明。

出土遺物 (第39—2図)

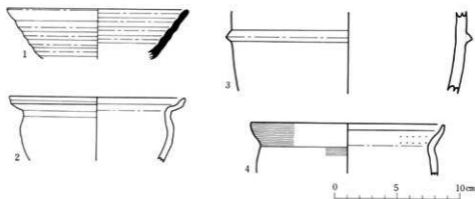
出土遺物は少なく完形品はない。

No 1は床面出土。B類の色調が混じるA類環である。推定口径14.4cm位。体部の凹凸が強く内面の一部が黒変している。

No 2はロクロ成形小型甕(土師器)。反転復元に依る。堆積土中からの出土。推定口径約14cm。

No 3の土師器は堆積土内からの出土。体部をロクロ成形した後に鐮状の隆帯が付けられている。

No 4は非ロクロ成形の土師器。推定口径は15.5cm。堆積土中からの出土である。磨滅がひどくヨコナデ痕以外の調整は不明。



第39-2図 30号(Lb24)竪穴住居跡出土遺物

これらの他には、床面から須恵器蓋の破片、回転ヘラ削りを有すA類体へ底部片等がみられる程度である。

31号(Lc33-1) 竪穴住居跡 (第40図 第27表 写真図版21・64)

(重複 改築) 32号竪穴住居跡と本竪穴住居跡の煙道埋出し部がそれぞれ重複し、先後関係では本竪穴住居跡が古い。

(規模 平面形 方向) 西半は調査区外となり東西規模は不明で南北は2.3mである。方形が推定でき、カマド方向軸はN-105°-Eである。

(堆積土) 木根等による攪乱が非常に多い。黒褐色の腐植質土と砂質土が主体となり、5・8層が砂質土である。全般に砂と礫の混入が認められること、北側から南へ流れ込む堆積の様相に特徴がある。

(壁) 比較的直に近い立ち上がりで、検出面の高さは15cm~20cmを計り、北壁東端で外へ半円状に張り出すが、カマド構築等に関連するものと推察される。

(床) 大半は小礫混りの砂質地山土を床面とするが、カマド前面は若干掘りくぼめられ、その深さは約3cm~5cmであるが、検出時にはカマドのものと推察される焼土の広がりがあった。

(柱穴) 認められない。

(周溝) 認められない。

(カマド) 東壁の北端に位置する。カマド前面に掘りくぼめられるとともに、更に燃焼部から煙道へ掘り方をもち、セクションI-Jに示される4層の暗赤褐色土を埋め構築したものと推察され、4層には、礫、シルトの他に炭や土器片も含まれる。なお、カマド前面の掘りこみ底面の西半も火熱による赤変焼土化している。燃焼部中央に礫があり、やや偏平であるが支脚石とみられ、その位置から燃焼部の一部は壁外に及ぶものと推察する。左袖の遺存は明確

A-B C-D	
1	10YR5/2 黒褐色土 砂混入
2	" " " 砂、礫混入
3	10YR5/1 黒色土
4	" " " 砂礫石土混入
5	10YR5/2 黒褐色土 砂
6	10YR5/1 黒色土
7a	10YR5/2 黒褐色土
7b	" " " 砂
8	10YR5/1 黒色土
9	10YR5/1 黒色土

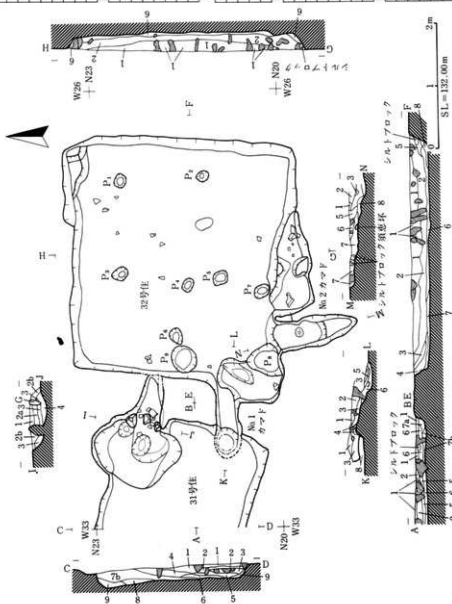
E-F G-H	
1	10YR5/2 黒褐色土 シルト、土器片若干
2	" " " 土器片含む
3	10YR5/1 黒色土 シルト含む
4	10YR5/2 黒褐色土 シルト若干
5	" " " "
6	10YR5/1 黒色土 土器片、含む
7	10YR5/2 黒褐色土 土器片、焼土若干
8	10YR5/1 黒色土 シルト若干

I-J	
1	10YR5/2 黒褐色土 焼土、灰含む
2a	10YR5/1 黒色土 焼土、シルト、土器片含む
2b	10YR5/2 黒褐色土 シルト、砂含む
3	10YR5/1 黒色土 焼土、土器片含む
4	10YR5/2 黒褐色土 焼土、シルト、土器片含む
5	10YR5/1 黒色土 焼土、シルト、土器片含む
6	10YR5/2 黒褐色土 焼土、シルト、土器片含む
7	10YR5/1 黒色土 焼土、シルト、土器片含む
8	10YR5/2 黒褐色土 焼土、シルト、土器片含む

K-L	
1	10YR5/2 黒褐色土 焼土
2	10YR5/1 黒色土 焼土若干
3	10YR5/2 黒褐色土 焼土若干、土器片2ヶ所
4	10YR5/1 黒色土 シルト若干
5	10YR5/2 黒褐色土 焼土、土器片少量
6	10YR5/1 黒色土 シルト、土器片含む
7	10YR5/2 黒褐色土 焼土、シルト若干、土器片
8	10YR5/1 黒色土 シルト若干

M-N	
1	10YR5/2 黒褐色土 焼土
2	10YR5/1 黒色土 焼土
3	10YR5/2 黒褐色土 焼土若干
4	10YR5/1 黒色土 シルト
5	" " " 焼土若干
6	10YR5/2 黒褐色土 シルト
7	10YR5/1 黒色土 シルト、土器片含む
8	10YR5/2 黒褐色土 焼土

●本図等による採丸



第40-1図 31号(Lo33-1)-32号(Lo33-2)竪穴住居跡

でないが、右袖一部が遺存し、その先端部と北側の対に縦位に施設した長形状の石があり、袖の芯材もしくは焚口の構築材と考えられる。燃烧部から煙道部への区別は明瞭でないが、煙道は約50cm、幅45cm～20cm、深さ20cm～10cmの先端に上がる溝状のものであり、先端が、32号竪穴住居跡に切られるので煙出しの詳細は不明であるが、現状観察では煙出し部の特徴はなかったと推察される。

(その他の施設) 認められない。

出土遺物 (第40-2図 第27表)

坏形土器と甕形土器のみの実測である。

坏の2点は、浅黄橙色を呈すB類。No 1は手持へら削り、No 2は回転へら削り痕を有している。No 2と同類の器形をもつ坏は隣接する第32号(Lc33-2)竪穴住居跡にもみられる。また、2点共B類中では胎土が良質であり、No 1の方は硬質でもある。

甕形土器は土師器2点。2点共北東コーナー近くの焼土中からの出土である。

なお、表土を中心として、内側に鉄の残滓を付着したスサ入り粘土の破片が散在していた。第46号(Oi33)竪穴住居跡内に多量にみられたそれと同じものである。隣接するLc33-2住にも若干みられたが、この種の遺物については一括して後掲するもので、ここでは省略する。

第27-1表 坏形土器 一覧

実測図番号	写真番号	種別	切磨し	調整技法	調整部位	法 量 (cm)				a/b	a/d	外縁角度(度)	備 考
						口径 (a)	底径 (b)	器高 (d)	器高				
1	129	B 類	調整のため不明	手持へら削り	底部	14.0	7.8	5.1	1.8	2.7	58	硬質。(床面)	
2	130	B 類	へら切	回転へら削り	体部下端	9.4	6.0	5.3	1.6	1.8	69.5	(カマド内)	

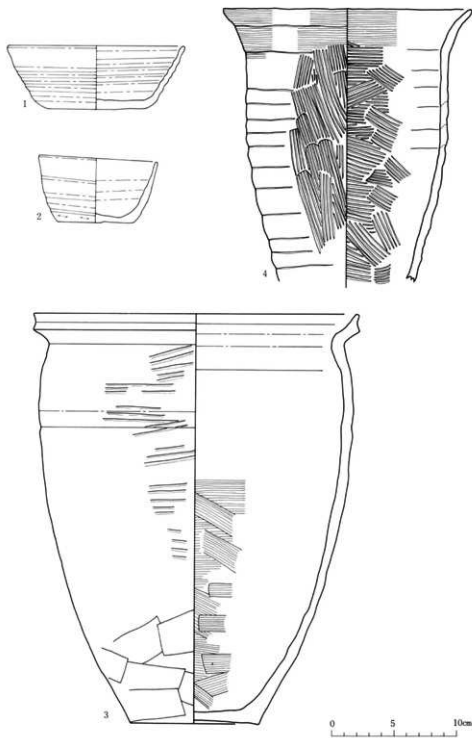
第27-2表 甕形土器 一覧

実測図番号	写真番号	種別	法 量 (cm)				外面調整		内面調整		備 考
			口径	底径	器高	器高	口縁部	体部	口縁部	体部	
3	131	土師器	26.0	10.3	32.4	25.0	口縁部	明目 + へら削り	口縁部	へら削り	一部に煤付着。赤褐色。
4	—	土師器	(20.0)	—	—	(16.3)	ヨコナゲ	刷毛目	ヨコナゲ	刷毛目	反転還元。巻上げ痕明瞭。

32号(Lc33-2)竪穴住居跡 (第40-1・41図 第28表 写真図版21・64・65)

(重複 改築) 31号竪穴住居跡と重複し本竪穴住居跡が新しい。また、カマドの改築があり西壁南端のNo 1カマド、南壁西端のNo 2カマドを認め、後者が新カマドの可能性があり、その構築時に南壁の一部を拡張したと考えられる。

(規模 平面形 方向) 東西3.8m、南北3.5m、面積10:50m²で、平面はほぼ正方形であり、カマド方向軸はNo 1カマドがN-90°-W、No 2カマドでN-176°-Eである。



第40-2图 31号(Lc33-1) 整穴住居跡出土遺物